

川柳塔



No. 857

平成十年度 六賞発表

十月号

第4回 川柳塔まつり

＜平成10年度同人総会＞

と き 10月7日（水）午前10時から

ところ ホテル・アウィーナ大阪（なにわ会館）

（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車）

議 事 平成9年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成10年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式＞

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇
賞の表彰式を同日午後1時から行います。

＜記念句会＞

各賞表彰式に続いて開会。午後4時終了予定

おはなし	弓削川柳社	濱野奇童氏
兼 題 「にんげん」	（香 川）	木 村 あきら 選
「千 円」	（青 森）	高 瀬 霜 石 選
「飾 る」	（京 都）	都 倉 求 芽 選
「か ら だ」	（鳥 取）	小 西 雄 々 選
「強 い」	（大 阪）	河 内 天 笑 選
「進 む」	（事前投句）	橋 高 薫 風 選

◎各題2句 出句締切午後1時

会 費 1000円（当日いただきます）

＜懇 親 宴＞

と き 同日午後5時—7時 同会場で開催

懇親宴会費 8000円（会席料理）

宿 泊 アウィーナ大阪 8000円（朝食付）

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは締切りました。

同人総会を除き、各賞表彰式・記念句会・懇親宴には同人・
誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち
申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

恩

橘高 薫風

私の恩人、武田義章先生が亡くなられた。命を助けられたのだからこの世の中の第一の恩人と言える。

先生は明治三十七年のお生まれで九十四歳、「鄧小平と同じ年だ」が晩年の口癖で、「長生きするには、酒や煙草をたしなんでいては駄目だぞ」と、私に会った際に仰っていた。

大阪大学医学部教授、厚生年金病院名誉院長を歴任、肺臓外科の第一人者だった。葬儀のあった六甲カトリック教会の初秋の空は美しかった。帰宅してテレビニュースを見ていたら、黒沢明監督の葬儀に出た、やはり映画の大林宣彦監督が空を仰いで「今日の空の美しさ」を強調していて、私と同じ思いでお見送りなさったのだと思う。

川柳での恩人は多いが麻生路郎先生は

別格であった。先生の川柳界への貢献は広範に亘るが、戦後の昭和二十四年十二月、山陽新聞に夕刊が復刊してすぐ山陽柳壇が創設され選者を担当された。翌二十五年の九月、先生の第三句碑が久米南町のJR弓削駅前に建立された。

俺に似よ俺に似るなと子と思ひの句で、「句碑ありぬ亡き先生の背丈ほどの」と私が後年その前に立つたときに詠んだものだ。この町には三百を越す句碑が山の遊歩道に建っていて、日本一の川柳町といわれる所以も諾える。

頂上には

浮き草は浮き草なりに花が咲き

中島生々庵

の句碑がある。先生が脳梗塞の後遺症の不自由な身で、小石夫人の介添えを頼りに渾身の力を込めて書かれたものである。

路郎先生の句碑の建ったあと第一回の西日本川柳大会が開かれて、今年は五十回の記念大会が十一月一日に大々的に開催される。前夜祭のイベントも華やかだと言つ。

生前の路郎先生の誕生日をお祝した

川雑川柳まつりが川柳塔まつりに引き継がれているのだが、今年は西日本川柳大会とペアで予定の中に入れ、一人でも多く参加下さい。

日本の四季の巡りが少しずれたような今年の氣候の不順に、私は体調を崩し、呼吸不全という厄介なアクシデントに見舞われた。その年に精神的な守護神を失い、心もとなない思っている。

それに、路郎先生の足跡を「大空のころ」に毎月記録していても、先生の偉大さがちつとも伝えられないような気がして仕様がなない。私の目は、また私の筆は私の器量であって、先生の器量は私の器量では写し取れないのである。

私は先輩の恩、後進の恩をしみじみと感じて、この秋に居る。

武田義章先生に捧ぐ

アレヤアレヤいのち永遠とわ恩義も永遠
敬老の日にて猿島孫と見る

老いらくに禊の恋もありぬべし
老いらくは蟬の歌より螢の詩

悔い一つ持ちいつまでも生きられる



座右の句

りんどうの花の情熱こそ確か

(薫風)

私の句

ワンカップぐらいで脳に花が咲く

大内朝子

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 恩

慣れ

川柳塔(同人吟)

自選集

この一句

座右の句・私の句 特集 (3)

川柳の群像 有本泉三

古川柳歳時記『恵比須講』

水煙抄

大空のころ (93)

平成十年度

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞
茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞

橘高薫風 (1)

濱野奇童 (2)

橘高薫風選 (4)

矢野佳雲 (52)

東野大八 (60)

清博美 (62)

河内天笑選 (66)

橘高薫風 (87)

橘高薫風 (88)

慣れ

濱野奇童



突然に閻魔が牙剥く

から怖い 奇童

大家風太くんが、対向車に正面からぶつかられ骨折するという事故に遭遇され

た。ご本人のお話によると、その時反対車線は渋滞で、全く割り込む余地が無いほどのラッシュだったらしい。そんな中で、突然追い越しをかけたらしい車が真つ正面に飛び出して来たのである。左側はブロック塀で避難することも出来ない。「だめだ」と急ブレーキを踏み、身構えるのが精一杯だったらしい。ただ受けるのみだと覚悟したという。

対向車は、ブレーキも踏まず突っ込んで来た。エアバッグも衝撃に破裂、白いガスが車内に充満する。息苦しい。シートベルトが身体に食い込む。通り掛かりの人にドアを開けてもらい、車外に転び出たとき「助かった」という思いが、ふつふつとわき上がって来た。後刻、対向車の若者は、CDを入れ替えていて反対車線を行っていたことには、全く気付いていなかったということがわかった。恐ろし

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

渺湖抄

茴香の花

「しばらく」

一路集「ほめる」

「油」

初歩教室「輪」

九月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／山根めぐみ）

福岡しげおさんを偲んで

柳界展望

十月各地句会案内

■編集後記

高須賀金太 …… (64)

高橋夕花 …… (97)

八木千代選 …… (94)

西出楓楽選 …… (98)

三宅不朽選 …… (100)

清水利武選 …… (100)

最上和枝選 …… (101)

吐田公一 …… (102)

井上喜醉 …… (108)

井上喜醉 …… (123)

井上喜醉 …… (126)

井上喜醉 …… (127)

井上喜醉 …… (128)

座右の句

人妻になっても君の稚い字

私の句

指先の勘がミクロの誤差を知る

（史好）

清水潮華

いことである。

大分以前のことだが、早朝車を走らせていた時のことである。丁度通勤時間帯とあつて車の列が続いていた。車間距離をおいて追走していたら、その車間距離をあざ笑うように真っ赤な車がいきなり割り込んで来た。赤い車のルームミラーに映された顔は、まだ若い美人である。その美人が、信号で停車するとバフを叩きはじめた。忙しい朝のご出勤だと苦笑させられる。信号が変わると間髪をいれず発進する手際は慣れたものである。とすると、今朝に限つての事でも無さそう。

次の信号では口紅を引いている。その信号を出て暫く走つた頃、いきなり車が尻を二、三度振る。正常に戻ると彼女は、左腕の腕章をすり上げてゐるではないか。恐らく尻を振つた時、腕章を嵌めていたのではないだろうかと思つとゾツとする。腕章は、緑に白線の入つた交通安全の物であり、この日が交通安全日であつたのだから驚きた。交通指導当番の先生だったのかも知れない。ドライバーは自信があるのだろうか、追隨する者には誠に迷惑である。

最近、携帯電話の危険性が叫ばれているが便利さ、楽しみ等には間魔様が牙を剥いてゐることも忘れて、どんどん溺れて行く人間の弱さ、そしてその慣れの怖さをつくづくと感じさせられた出来事であつた。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

堺 市 桑 原 道 夫

青空に眉毛盗られてしまいけり

稲妻を腋窩にためるセールスマン

飽食の世のひもじさよ蟬の声

ジャイアント馬場の葉巻も平成に

大声で笑う両手のゴミ袋

炎天を傷つけながら少年来る

弘 前 市 齊 藤 島

散髪をして紀子様を一目見に

ヤーヤドーこどもねぶたのお通りだい

ひまわりが夏の球児の顔で咲き

三人四脚転んで笑いまた笑い

石笛を吹く縄文の顔をして

大空が好きでたまらぬトンボたち

トルコ紀行

和歌山市 木 本 朱 夏

トブカビのバルコンに居て吹かれおり

スルタンの青いグラスや夏至祭

切っ先は我れに向くなり神の剣

コーランの祈り晝闇を拓く

ペリーダンスの腰に眼のある如し

円柱の連なり全天蟬時雨

鳥取市 武 田 帆 雀

長所より短所に類を集めてる

穴があるそこから細工したらしい

入母屋の反りに二の矢が刺さらない

腫れ物に触れて下さる若い女医

軒下の風が手紙を覗き込む

災いの口に救急車が走る

守口市 森 川 まさお

不景気な夏なり黒いズボン穿く

定年や家族とともに花火見る

はかなさや休むことなく朝の蟬

ヘッドライト池の蛙は向きを変え
療養の友と座れば潮匂う

くしゃくしゃになってハンカチまだ白い

黒石市 千葉風樹

指先を登り始めた今日の鬱

弱虫のままの雪より白い骨

忘れた言葉だった靴のひも結ぶ

人生は火花だきつと闇は来る

置き去りにした蟬が鳴きじやくる駅

てっぺんの席をカラスに笑われる

藤井寺市 吉岡美房

天も地も滾る浪速の夏まつり

睡蓮の花から届く暑気見舞い

結論が出そう胡坐を組み直す

いい齡をしてとは僕のことですか

喝采は無いが真面目な切られ役

目裏の戦友と聞いている蟬しぐれ

枚方市 前 たもつ

古里の蜘蛛は大きな巣をつくる

好き勝手たかだか妻の掌の内

タレントも指輪はいらぬ参観日

お月さん以来元気で生きてます

勤勉で築いた日本どこへ行く

人間に助け出される阿弥陀さま

豊中市 田中正坊

一以てこれをつらぬくのが男

鉛筆いっぽん平記者で朽ちた父

凡人がひとのふんどし借る政治

軍人がいまに見とれと爪を研ぐ

変人がこのまま退くと思われず

老残の僕にシツクなループタイ

松原市 玉置重人

本物でない歩幅が揃でない

万歩計いつもの猫も恙なし

体調は悪いが舌はよう動く

当然のようにゴミの日ゴミを出す

くたびれたけれど生きてる歩かねば

如才ない男が風を読み違い

富山市 酒井輝

男みな疲れ卑弥呼が目覚ます

コーヒーは女が払いお別れね

ワープロが救ってくれた左利き

新券を持ち兄弟の久し振り

一合の米でもとげば生きる音

出た釘がそのまま錆びている不運

黒石市 相馬一花

ヒマワリが方向音痴になる曇り

酸素吐く草に浴びせる排気ガス

人間のいのちを食べに来る猛暑
お化粧で先送りする更年期
今どきのヤングは知らぬ舌鼓
唇を盗んでくれる人いない

島根県 松本文子

無芸でも生きてる犬も犬なりに
あれは哀しみ私の立ち尽す場所
憧れた空は時々意地悪な
負けまいとしてスニーカー履きつぶす

ひとり歩いているとでこぼこ道になる
夕焼けてひとりぼっちになる時間

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

井の中を出ることにした天の邪鬼
掌に受けた氷が溶けてゆく無情
演出をした花火にも闇のあり
むらさきの向日葵ならば髪飾ろ
飾りにもならぬ蝙蝠傘の柄は
敏感に冷たくなった首飾り

弘前市 今 愁女

悲しみよこんにちはまた遇いましたネ
ちいさめのヘルメットがある恐山
恐山帰らぬ吾子に石を積む
奥津軽先祖がえりの立佞武多
生首抱いた妖艶闇に消ゆねふた
天の川端から端へ子を探す

露払い「己」掲げて太太鼓

ねぶた太鼓津軽モツケの越天楽

灯の扇津軽まほろば夜を突く

ねぶた笛縹渺と愛しめやかに

三回忌ねぶたを抜けて駆けてゆく

あんぱんでねぶた引く児の鼻化粧

韓国籍の夫八十二歳の生涯を閉ず 鳥取県

お別れの迫る無言ののど仏

まだ温い掌語る二人道

さようなら縛解けて愛溶けて

閻王へ名刺がわりの自叙持たす

韓服で異国の土になる旅路

花に埋れたあなたとつてもきれいです

七月二十三日四十七歳の次男逝く 米子市

七夕の笹が揺れ出し訃報来る

からころと最後の声の骨拾う

泣きました目が潰れると思う程

たくさんさんの賞も遺品となったわね

道しるべこの世に向けて帰ってよ

苦勞などかけずに逝った子が憎い

ふるさとの無い子供らはキレイやすい

ふるさとの夜空も星が減ってきた

ふるさとの空気を持って帰りたい

弘前市 一戸 ツネ

埴 寛子

茂理 高代

岸和田市 高須賀 金太

ネックスレスして青年の土用干し

どっちかが嘘ついてはるスキャンダル

面白い話はないか戻り梅雨

岸和田市 長谷川 呂 万

孫達に日本の行方ただ祈り

年寄りが乗ると居眠る若い人

引出しの聖書を読んでみたホテル

人伝ての肥料与えた菊枯れる

あざやかな夕日ジャンボの友送る

もちの木にブランコ掛けた父も古稀

下関市 石 川 侃流洞

ネジ巻けば恩賜の時計生きている

老いて従う子が八十の坂を超え

僕の家素通り空巢が両隣

父の墓のお下がり戴くワンカップ

熱燭で傘寿愚直の暑氣払い

八起きまた転んで頑固ひどくなる

大阪府 八十田 洞 庵

供養無き無縁仏に蟬時雨

親切な裏でやんわり持つ打算

ひとつだけ秘密を提げた旅みやげ

今宵の雨は女一人を沈ませる

結び目がとけてあっさり他人の目

笑顔の裏に冷えたまなざし見てしまふ

鳥取県 乾 喜与志

お台場で大きな筒が錆びにけり

はらはらと観ながら涙拭いている

慌てることもなくなつて惚けるらし

背の墨は萎れるだけの物語

夕立の止むまで温泉に浮かぶ

犬連れて朝の散歩の拾い物

加古川市 吐 田 公 一

湯の宿で孫と絆の将棋さす

第一声ハローハワユーロスの孫

困つた時叩けば開く母の胸

頂点の安楽椅子が揺らぎだし

反核よ徒手空拳の叫び声

核を持つ仏陀かインドバキスタン

西宮市 門 谷 たず子

息つぎが下手でなかなか進めない

デュエットが揃わぬままに秋になる

自分史に落丁ばかり風ばかり

正論の好きな眼鏡がまん丸い

まだ亡母のぬくもりがある花鉢

母の居ぬ古里なれど風うまし

米子市 青 戸 田 鶴

わが道を歩くつもりが曲り出す

いろんなもの見えてきだしたのが不思議

ほんとうの歳がかけない時もある
強い女のふえてゆくのが暑くるし
楽しみは朝な朝なの朝顔だ
恐ろしいことが始まるクローン牛

鳥取市 倉益一瑤

とっておきの祭りにしたいわたしの死

冗談の種が発芽をして慌て
朝が来る曲ったへそを戻さねば
奴唄はらはら妻の手をはなれ
自販機のオアシス淋しすぎないか
そして朝出来心とは言わせない

松江市 舟木与根一

ちゃんばらを楽しみにして農閑期
人形に声色つけて籠の鳥

立秋という西瓜畑の風無惨
院居士と金鵒勲章貰った墓碑
夏は風化させぬと油蟬しきり
老碌はしても揺るがぬ母の味

箕面市 出口セツ子

裏表無くて敬遠される吾子
不況愚痴悩みも無緑蟻の列
自分史のつもり素顔で作句する
涙壺優しい涙だけ溜める
何の为生きる見事に散る花火
冷めた目で私を批判する私

砂川市 大橋政良
気まぐれがひよいと出てくる自動ドア
やさしさを半分もらう握りめし

びた銭にまでも不況の匂いする
悪知恵を見落していた但し書き
寝たきりで吐く息欲の匂いする

弘前市 浅田隆樹

おそろいのパジャマで十年若がえる
妻という洗濯バサミの跡がある
コツコツと貯めた脂肪は裏切らぬ
大腿に歩くスリットスカートで
古写真妻がこんなにくうぶな人

弘前市 高瀬霜石

座禅組む石はどんどん重くなる
夫婦喧嘩一冊本を読みあげる
現実をいつもまっすぐ見る勇氣
姑の採点百点はつかぬ
青空の鱗をひとつ持ち帰る

弘前市 佐治千加子

金婚式菊の花束夫の墓
石を彫る音はたと止む残暑^{ひび}午
一途なり問答無用の猫じやらし
意志のあるように爪研ぐ朝の猫
足早に去りゆく「時」の闇に座す

弘前市 相馬銀波

弘前市 高橋岳水

またヤマセ稲にりんごに夏僅か
刈るまでは稲と予報を読み返す
梅雨あけも残暑も知らぬキリギリス
普段着の夏日が欲しい北の蟻
この夏も花火ねふたと走り去る

弘前市 中山雅城

今朝の庭カサブランカに声掛ける
朝顔の起床ラッパが聞えそう
八月六日は朝から雨になる
おじや炊く八月十五日の朝
朝露を犬と一緒に踏んで来る

弘前市 蒔苗果林

梅雨明けず顔をお湯水二度洗う
血圧におはよう言って野良に出よ
草いきれ満員電車の人いきれ
歩いたぞ四十分間そよ風と
真夏日の炊きたて御飯ほとけの座

弘前市 小寺花峯

字余りの暮らしが続く肩の凝り
水槽の金魚もやはり日曜日
テープカット主役のハサミ見当らぬ
愚痴つもる話に猫も知らんふり
笑い合う酒に油断のならぬ棘

帰省子のストレス癒す青畳
酒とろり月下美人を待つゆとり
乞われたら酔生夢死と揮毫せん
往診を終えて月見の客となる
町医者 of 哀歓が浮く夜の猪口

弘前市 小枝ふさゑ

突然の訃報にコーヒー冷めたまま
約束が消えてしまった永久の旅
花嫁のようです友のデスマスク
朝顔に友の化身か揚羽蝶
同期生おくやみ欄にまた一人

弘前市 須郷井蛙

深呼吸今日のファイトへ活を入れ
待たされる覚悟文庫本を持ち
不景気がまともに見えるネオン街
ご近所の和を大切に旅土産
指定席気分 空席の汽車に乗る

弘前市 岡本花匠

頂点で線太くなる男前
根性を買われしがらみ守る杭
欲得の煩惱あまた保身策
月影と法然は詠み弥陀の慈悲
数え唄今朝あるいのちニト口錠

弘前市 富士慕情

ヤーヤドー金魚ねぶたの声囁れて
祭肌太鼓の汗が迸る

来たきたきたユラリ登場大ねぶた

三国志津輕の夜の華となる

ねぶたゆきひと雨ごとの風涼し

十和田市 小笠原敏人

低温でてんとう虫も踊らない

夏が無く迎える秋を喜べぬ

食取らぬ愛犬どんなに苦しかろ

点滴をして愛犬の治癒信じ

愛犬の呼ばれて見上げる眼が哀し

十和田市 阿部進

言いたい事何んでも言える無位無冠

倅せは夜の居酒屋一人酒

古希なれど鍛一筋に生きる母

不景気に抱いた夢をくだかれる

目くばせて貴男の心読めました

青森県 西谷大吾

鳴く蟬をじつと見ている蟬の殻

叱られて窓に小さく鳥を描く

海はいい喜怒哀楽の四季がある

すり減った靴にも生きる夢がある

大の字になって明日の策を練る

仙台市 川村映輝

少子化が進み前途に暗い陰

政府交代したが円安止まらない

面映いが弱った妻に手をあずけ

梅雨明けず仙台七夕雨の中

祭日に国旗の姿なく寂し

大宮市 八田敏

句作りを田辺聖子でまた始め

山遙か武蔵野の風物足りず

汗だくがないマンシヨンの夏淋し

若者の団地で古希が若返り

R V車カーナビつけて医者通い

町田市 竹内紫鏑

音楽時計仰ぐ高札ありし辻

開校記念そろわぬ校長の写真

市歌にある富士は屋上なら見える

静かだねイヤ飛行機が来るまでサ

常温の飲み水嫌い都会人

横浜市 菱田満秋

読まれると困る日記をつけている

あじさいの花七変化した末路

父の日があつて息子が偉く見え

遠花火下半身は隠される

吼えないでいると番犬馬鹿にされ

横浜市 清水潮華

静岡県 蘭田 獏 杏

嬉しい日睡眠薬が倍になる
盆休み一番先に美容室

改築の駅交番も同居させ

止んでから大雨注意報が出る

三Kの仕事で老いを生かされる

横浜市 後藤 早智

上海に遊ぶ夫のカサの下(上海にて 五旬)

上海の人情に触れ你好嗎(ニーハオマ)

極上の夜景騒音さえ沈め

賑わいも中華の味をいや高め

上海で竜宮城を垣間見る

横浜市 菊地 政勝

政治家の便利な言葉不退転

いい時に会社辞めたと言われている

体力も意志も無視する安定所

父親の役割変える定年後

なるほどと知らぬふりして聞いてやり

静岡市 安本 晃 授

日焼けした頬に程よい父の汗

年金で足りる平和な夫婦独楽

地下足袋を穿くと豪気な父の肩

幸運のきざしか赤いバラが咲く

雨傘をたたむと母の子守唄

天国の間近に見たい天の川
緑の谷から湧くように人が来る

竹槍に良い竹ばやし散歩道

早起きをしたつもりだが陽は高い

ばあちゃんの勿体ないが疎まれる

大山市 早川 盛夫

世の中は間違っているゴミの山

生きたとは豆腐崩して考える

快晴を洗濯日和と夢の無さ

遅刻して履くスリッパの片ちんば

商品券だから買える高い靴

可児市 板山 まみ子

丑の日も夏休みにも拘らず

夕立を待ちわびていた夏の鉢

熱帯夜虫の音さえもわずらわし

沖縄の夏雲こいしゴーヤ(苦瓜)買う

ふる里は戻らぬ時の玉手箱

富山市 舟渡 杏花

神の封印こじ開けられたクローン牛

人間に備えて塀を高くする

誰も居ないとところで泣いても無駄ですよ

墓穴から携帯電話モシモシと

金が出るカード一枚ふところに

富山県 島 ひかる

熱あつの二人へ残暑とは書けぬ

レストランのつもりで夜景見て食事

書き慣れて愛という字がうまくなり

屈辱を笑顔に変えて羽織い

放流の稚魚は知らない解禁日

富山県 増田 紗弓

審美眼おなじふたりもすれ違ふ

追い抜いた車まだまだ視野にある

釣り籠のレジ方言が好きらしい

笑い皺雲は何度も行き過ぎる

葉鶏頭の情熱あびる地蔵尊

羽咋市 三宅 ろ亭

わが朝の散策路上白鳥群

東に霜軍営にと陽を迎う

ネコ車の上にトマトとネギ数本

後悔は今朝投稿は間にあうか

最大の思い出薫風師と会った日よ

京都市 都倉 求芽

引力に負けて地に墜つ日も月も

底知れぬ深さに輝く星の海

男でも女でもないのが連れだつて

旅恋し空に与謝半島 能登半島

京の風浴衣のよさを知っている

京都市 山海 友熙

あやとりの少女の指に父が棲む

一周忌あなたに逢える白い道

ああ京都 阿闍梨に逢える二年坂

十月の京は静かに陽が落ちる

そうどすえわたしも女赤い下駄

京都市 大河 未佐子

鉾曳きも国際色のボランティア

学校も職場も慕も女組

美人ならもつと辛からたれる肌

席に着きほつと一人の空の旅（札幌の孫のもとへ 二句）

厳冬を知らず札幌いいと言う

京都府 稲葉 冬葉

愚痴になる酒と知りつつ手酌酒

捨て石になろうともわれ生臭し

生きていますか葉書一枚下さいな

背景にいつも負けてはいませんか

外出のチェックガスよし電気よし

奈良市 米田 恭昌

長寿社会扶けあつてまるい背な

引き際の美学か男背伸びする

A少年の声無き声が聞きとれぬ

両方の顔たて一人おいとかれ

華燭の宴父さすつていた瘦せた脛

奈良市 天正千梢

土用餅食べて土用をのりきる気

骨抜きにされる法話を聞いている

高円のお山せまりし梅雨晴れ間

梅雨晴れ間朱雀門の際立てり

ブツダ展 隣の人の足をふみ

生駒市 麻生アート

流し目が消えた平成ちと淋し

ピッチャーの耳にとどかぬ蟬しぐれ

電算機つれて買ひもの抄らず

阿弥陀さま黙ったまんまえみたま

いにしへの奈良の都のトリスパー

生駒市 北山悟郎

終戦日万感涙とめどなく

尽忠はなんだったのか天仰ぐ

忠と孝果せば心澄み渡る

傘寿なお戦う義肢が意気盛ん

軍歌を歌えば大きく心広がりて

大和郡山市 坊農柳弘

秋深々駆け込み寺に佇つ女

手作りの団子肴に月見酒

温暖化もみじの色を狂わせる

夫婦円満水掛け不動に祈願する
O型の血筋世話やきお人よし

大和高田市 岸本豊平次

里に入り産土拝むハイキング

山畑が靈園になり香が立ち

「只今」を集札箱へ無人駅

耐えがたきを耐えたバブルが爆発し

胸を刺す言葉をさらつと言え人

大阪市 川端一步

露伴文玉さんも好きになりました

古書市を巡り大文字を拝む

頬杖をつけば絵になる女の子

微笑んだ地蔵に疲れ癒される

平凡がいいのタンポポ飽きられず

大阪市 榎本落児

ふるさとの山ありがたし挙手の礼

八十歳クワガタムシを買ってくる

暑いのでお大師さんはやめにする

ベレー帽僕と女房の共用だ

かき氷日本の夏もいいもんだ

大阪市 西出楓楽

先見の明あり前の席があく

なまじ席譲ってむつとされました

初盆へ五キロ肥えたを申上げ

雲ひとつない空なぜか物足りぬ
エッセイでぐんと身近になる作家

大阪市 神夏磯典子

内緒ない夫婦へ人が寄ってくる

お隣と仲良くしたい低い堀

半分のその半分で揉めている

高齢化薬局いやに多くなり

少年よ天窓の星見てごらん

大阪市 井上白峰

方円に従う水が堰を切る

穏やかな大樹の影に蟻の群

例えばの話で釘を打ちに来る

ものの好きな風が埋み火燭りだす

古傷を想い出させる遠花火

大阪市 北勝美

夾竹桃 今年も炎えて朝の照り

原爆の犠牲者の上にある平和

武器輸出それで栄える国もある

病院食妻には量が多過ぎる

妻病んで菊の脇芽が伸びたまま

大阪市 河井庸佑

勝ち譲り明日の躍進胸に秘め

成り行きに任せてみるも策の内

要領でする世渡りが蹴躓く

軽率な言動人の和を崩し

法の日に身近な法の講話聞く

大阪市 津守柳伸

ハワイアンジュエリー行き交う有楽町

戦争の二文字憎いキノコ雲

妻パート男子厨房に入らんとす

グルメ旅おばたりあんの暑気払い

留守三日仏の花を入れ替える

大阪市 川内叭笑

被爆者の声が世界に届かない

嘆くまい生きた証が辛過ぎる

今日こそは明日こそはの心意気

セクハラも大統領がやる時代

儂きは継ぎ木の如き総理の座

大阪市 川原章久

そんなことおましたかいな恥の汗

孫の画く父の似顔は酒の色

鰻焼く匂い千日前の角

神に捧ぐ火が巖かに清らかに

逸らした目またすぐ戻すキャミソール

大阪市 杉澤汀

走る人宿る人ある俄雨

ここ一番が弱い男で生きのびる

主役より脇役が得手いぶし銀

おり合いをつけても所詮個が二つ

蟬の子が今度とぶ空どんな色

大阪市 本間 満津子

長いような短いような傘寿すぎ

二三十年生きてたように世が変り

大阪五代目ハイウェイ下に有る故郷

レトルト食 食べず嫌いはやめました

稼がないのに生きて行かれるええのかなあ

大阪市 渡部 さと美

苦瓜のにがさも噛んで夏を越し

うわさぐらいにびびり大物にはなれぬ

アメリカのこれも二の舞子の非行

耳打ちが回り顔付きが回り

傷ついて地球右ゆれ左揺れ

大阪市 板東 倫子

肯定も否定も出来ぬ死刑論

弁解がつぶやきとなり辞意となる

梅雨未だ明けぬ海の日の河童たち

どしゃぶりの泥田に沈むコシヒカリ

水茄子でお茶漬夏の清涼剤

大阪市 町田 達子

胃下垂の祖母へ逆立ちせよと言ふ

シューベルトの夕を聴いたあの美声（ヘルマンブライの死）

大国ほど頼っている核の傘

精霊迎える墓地のカラスがおとなしい

丁寧な塔婆名よみ盆供養

大阪市 稲本 凡子

この暑さ不義理ばかりの日を重ね

悩みごとなんにもなくてつまらない

退化する脳に加速度ついてくる

腹時計今日は進んでいるらしい

孫が来て部屋の空気が若くなる

大阪市 大塚 節子

呉越同舟 遺産の多い御法要

近道の通り抜け路地四季のあり

さいならを言うてそれから立ち話

熱のない姉も咳止めリンゴ汁

クラス会さんざしやべって誰やった

大阪市 辻川 慶子

たのしみは水蜜桃が冷蔵庫

夏ばてと言えども空はいわし雲

株下落補てんなどには縁遠い

つまずきは神さまからの要注意

祈らずにおれぬ難題また出来る

大阪市 小糸 昭子

旧道に歴史を残す碑が隠れ

この罨を自分で取って良いですか

罨かけてうっかりはまる粗忽者

味方顔してクーデター考える

すぐ変る大臣だからすぐ忘れ

大阪市 清水絹子

四季問わず夫の好む熱い燗

坂道をのぼりつめたら坂のある

熱帯夜たまの早起き休刊日

十万回鼓動よ今日もありがとう

水なすに茶粥おかわり帰国の子

大阪市 松尾柳右子

打ち上げの花火にシャッター押し忘れ

水都祭終りて淋し川の音

蒜山のジンギスカンへ牛が鳴き

それぞれのバカンス聞いて盆休み

電話口英語だ何か喋らねば

大阪市 田中節子

追憶にゆれる花火の水都祭

流れる雲流水の如湖に映え

ハプニングつなぎつなぎの旅になり

須佐湾の花火山からはね返る

挽歌ほろほろ九月の空は胸痛む

大阪市 福岡雅楓

あの夏も野道飾っていたアザミ

神秘さは無くても月の美しき

SFの皿に氷を転がして

自己満足に飾られし人美しい

痩せ我慢できず氷は溶けていく

大阪市 藤田頂留子

私語好きの隣で話聞き逃し

失言ねらいうさぎの耳にして野党

邪魔なマンション花火には特等席

暑いなあ暑おますなあお達者で

三月月も踊りたそうな名調子

大阪市 川久保睦子

大文字の護摩木に亡夫の名を入れる

逆縁の苦衷に耐える老父の肩

おかわりと言って下さい空銚子

残酷に慕情つのらす夕日赤

酔うたふりして辛口を言うた亡夫

大阪市 小林周信

甲子園お馴染みさんと外野席

新盆に読経参上アルバイト

大胆な筆と誉められたのは妻

舞い下りた月下美人の葉が根付き

骨董屋飾りたてても骨董屋

大阪市 岡本久峰

心意気示すなにわの赤レンガ

祭神は知らず外人水掛ける

またひとつ灯を消した船場街

無党派に亀裂の走る保守地盤

夏雲に偲ぶ大地へ伏した戦友

大阪市 中田 あい子

蟬が鳴き雷なつてあけぬ梅雨
梅雨あけの空一文字飛行雲
ブライドと意地の違いを友に見る
華やかな過去持つ人が一人住む
迎え火を焚けば聞える亡母の声

大阪市 奥田 良子

酸欠をこらえて迎う門火かな
送り火はゆっくり消えてまた独り
ぶんぶんよ死んだふりして掃き出され
独り言上手になって老い仕度
流れ星おちゆく先に恋があり

大阪市 津村 志華子

年金の財布ゆるめるもみじの手
三食に昼寝がついて未だ不満
カセットのリズムに合わすみじん切り
アルバムにもんぺ姿の亡母がいる
寄せ書きの友ひとり逝き二人逝き

堺市 柿花 紀美女

一日を懸命に進む傘寿過ぎ
老いにあう仕事こなして仕舞風呂
父となった子は帆をいっばいに上げて行く
野球部の孫たくましい丸坊主
夕日落ち明日を思う老夫婦

堺市 神原 文

大悲閣一期一会の修行僧
色黒がUVカット塗っている
飛び魚になったつもりでバタフライ
奢りとは知らず上トロ注文し
サザンクロス胸に現像しておこう

堺市 志田 千代

ネバナラヌ ネバナラヌで生きてきて
浮き雲よ今日も私は急ぎ足
老斑にしっくり馴染む古指輪
あげまんでなかったけれど仲は良い
休肝日父は早食いだったのか

堺市 楊井 二南

この頃の年の功とは桁違い
暑中見舞続いて盆の忙しさ
扇風機即時に向きを変えざる義理
慰めが効いて背中を丸くする
歯ぎしりを噛んで決めた事がある

堺市 山本 半銭

わたくしでなければならぬ墓掃除
税務署と銀行好きになれぬとこ
送り火の今宵老若優しかり
お月さまと歌う赤城の子守唄
仏さまと少し話してから眠る

堺市 黒田 真砂

号令が途中で乱れた幼稚園

久し振り娘のお供してショッピング

妹逝き早や一周忌蓮の花

夫退院珍らしそくに庭眺め

足元に光遊ばせ夜の散歩

高石市 浅野 房子

エリートも会社あつてのことでした

亡き友へ友へとゆれる秋桜

賞味期限に追われ忙しい冷蔵庫

ストレスも栄養として生きのびる

道祖神質問攻めのひとり旅

和泉市 岡井 やすお

出来もせぬことを並べて票を取り

言い方を変えても景気良くならず

人が食べ終つて匙を取るカレー

PK戦門番ばかりいじめられ

呆け防止豆腐半丁たまごお茶

和泉市 西岡 洛 酔

イヤリング夢と未来が揺れる街

和睦する盃にがい味を消す

四角四面老いの一徹ゆずらない

正直の背中へ太陽燦として

引き締める規律に制帽よく似合い

岸和田市 岩 佐 ダン吉

背伸びして大きい話してやろう

笑顔まで天下一品だった母

甥のリズムに逝つた母のこと

蟬が落下道少しだけ急がねば

核ゼロのプランに肉太の署名

北海道旅行 岸和田市 芳地 狸 村

ラベンダーの彩と香りに酔う富良野

百態の岩が迎える層雲峡

流星の滝をバックに老い二人

白糸が岩にはりつく銀河滝

牧場がうけにいつてる北きつね

岸和田市 田 中 文 時

真摯な目 妻家計簿と睨めっこ

断ち切れぬ絆子供は背くとも

追い越してからがしんどい上り坂

世の中を牛耳るような酔い心地

ロボットも社内旅行に行きたかる

岸和田市 寺 田 甚 一

核保有国また増えた原爆忌

開け放しカヤ吊つた夏なつかしむ

平穩無事そんな時代に職を引き

低金利の余波ビールから発泡酒

声の出る機械にいつも叱られる

岸和田市 井 齋 一 齋

美人揃い神もうかれるギャル御輿

口裏を合わす合図に足を踏む

出向者荷物のように扱われ

遮断機にじつと耐えてる消防車

来客にランクを付ける財産家

岸和田市 古 野 ひ で

どの路地も無言が続く炎天下

死ぬ時の心構えが未だ出来ず

友情の深さしみじみ夜の底

まなうらにドーム浮かべてする黙祷

どのひともこけたらあかん言うて去に

岸和田市 藪 野 けい子

ひと言が説明足らずのる噂

流言が色味付けて伝えてる

わけまえを争うほどの土地はなし

あざやかに会議を蹴って空の旅

あざやかな達筆にほれラブレター

岸和田市 原 さよ子

何億年という大氷河踏みしめる(カナダの旅 三句)

バスの窓鹿を見つけて大喜び

船に乗りレインコートでナイヤガラ

駄句もよい看護ストレスとれるなら

かがり火へ鵜匠みごとな綱捌き

豊中市 安 藤 寿美子

トロッコ列車夕立の中つつ走る

数珠持っているのいないのみな合掌

霊供膳姑白和え嫁贈

送り火をたいて誰方もごくろうさん

平等にゆかぬこの世や原爆忌

豊中市 吉 田 あずき

八月の記憶は一つ老姉妹

上に上まあの辺か盆の花

炎天へ罪の火種を背負うごと

全長も知らずに蟻の列つづく

熱帯夜のぼせた月を裏返す

豊中市 井 上 直 次

飾るのも生きる方便この浮世

空を説く僧も飾っている衣

飾らない亡父を噂に遺品分け

女々しいと女房に活を入れられる

落ちそうで落ちぬ女の横座り

豊中市 滝 北 博 史

孫娘が船渡御の夜アメリカへ

ご先祖はみんな甘党土用餅

土用丑 鰻屋のママ病むなんて

辛い朝高砂ユリの白い花

走るなというサインなど無いチーム

豊中市 湯浅馬洗

生きたい生かせたい心 母百二

癰瘡癒え巢立つ燕にまた来いよ

来客に百歳万歳書いて見せ

愛してます言え安堵の老いた妻

主婦変身前掛け取ってサン格拉斯

池田市 岡本吉太郎

ワープロをあつかえますかと安定所

公約はやぶる為だと政治家は

悪口を言い合ってる間は平和です

ぼそぼそと故人の悪口通夜の席

もうかりまつか ぼちぼちでんな言える世に

池田市 栗田久子

食べて飲み安心なのは家の鍋

とぼけたら呆けたのではと不安がる

娘らは九時さて父さんの門限は

夕焼に溶け込んでいく赤とんぼ

情念を天にたがらずまんじゅしゃげ

箕面市 岩津ようじ

ご破算で願うつもりが小淵さん

冷めたピザそれでも嬉しそうな顔

あの日僕宿直でした終戦日

通院が生きてる証 喜寿一人

時間給になおしてみたくなるお布施

箕面市 椎江清芳

逆転のドラマの幕は神が引く

呱呱の声今踏み出した長い旅

旅の宿酒が多弁にさせて更け

極楽に行くには舌が長過ぎる

懸賞が掛かると強い二枚腰

吹田市 瀬戸まさよ

暑さには負けぬ鮮やか夏の花

八月は火垂るの墓に泣き終わる

親戚の大波引いて盆も済み

暑い夜うちわで済ます老夫婦

恋知らぬ妻母となり姑に

吹田市 古川喜美子

ハンカチでそつと拭いた汗じやない

ローストチキン脚にリボン巻いて出る

札束で撫でると飾りみな落ちる

シツカロールまあいい顔に丸く刷き

飾らないから素顔とは限らない

吹田市 山本希久子

信じられる信じられないりんご剥く

恋一夜花はひとり散りました

スパゲッティ今宵の客はみな若い

ロボットの腕に介護をされそうだ

キッチンの日二枚になった皿

吹田市 栗谷春子

筆談も工夫ひとつで乙なもの
川柳で受けて答えて午後たのし
この蟬がいつかかえて啼く日待つ
紅蜀葵となりにわけた花も見え
たえられぬ中に一すじ秋の風

吹田市 茂見よ志子

蟬鳴いて朝陽よろこぶ声が降る
なにもかも明日にしたい暑気疲れ
鏡出て遺蹟の歴史変わる森
アロマテラピー仏様にもよい線香
忌憚なく言えばそらぞらしい周囲

吹田市 石原靖巳

明日を見る眼鏡はしかと拭いておく
保険金満期目安に生きてます
憎らしい批判を明日の糧にする
バイアグラ浮気の虫が目覚ます
アメリカよ口うるさくはないですか

吹田市 野下之男

日本の自信を見せる橋渡り（明石大橋）
閉塞の空に届けとホームラン
口車満更でない妻と居る
他所の猫食べる時だけ家の猫
禁酒日は頭の隅に置いておく

守口市 結城君子

夏バテを女医の一語で救われる
祇園祭しづく気にする芸こはん
星見たしせて銀河の映像を
お仕事に熱心すぎる孫を案じ
健康チェックとデパートめぐりして帰り

枚方市 二宮山久

里帰り夏の味覚を食べ放題
定年へ心がまえの趣味多忙
身がまえて残りの人生五十坂
幸せが過ぎて刺激のほしい夏
ふる里は遠くて近き宅急便

枚方市 海老池洋

雲海のそれから上は神の国
ブランド品 言わば女の包装紙
燕にはリゾートホテル無人駅
本物と私の指輪見てくれる
孫たちも鳥の目になる観覧車

枚方市 森本節子

ミュージカルかつば横丁で余韻消え
風呂上がり背もたれ椅子で見る夕日
盆の礼施餓鬼の札と筆を持つ
原生林の深さ見おろし入笠山（八ヶ岳高原にて二句）
ゴンドラが上れば八ヶ岳低くなり

枚方市 寺川 弘 一

貧乏とブライド掲げ生きて行く

マニユアルがすっかりやる気取り上げる

効き過ぎた後を心配する薬

ブランコと一緒に揺れる遠い夢

携帯で聞こえる会話の阿呆らしさ

東大阪市 森 下 愛 論

優しさが身に染み深酒控えます

張り付いた酒豪消したい染み一つ

軽く飲む地酒で軽く鬱はせる

飲むほどに饒舌となる老いの酒

無欲にはなれず經典巻き終える

東大阪市 指 宿 千枝子

W杯勇者のおしゃれネックレス

赤ちゃんも小犬も同じリボンして

バカンスは間崎島に宿をとり

群れ遊ぶ稚魚にもボスがいるらしい

白さぎよ真珠いかだで何思う

東大阪市 谷 口 義

生きのびて一人ぼっちの冬の蠅

蟬時雨聞こえなかった夏があり

朝顔が咲いただけでもうれしい日

おばあさんの決心だけは変わらない

推敲を重ねて妻に申し上げ

東大阪市 安 永 春

八月六日母になる産声を聞く

世の移りお産も二人三脚だ

人生のコンベア油差しながら

蝶番ときどき外し楽しまん

思い通りにならぬからとて浅いこと

交野市 山 川 日出子

沖繩の嘆きを知らぬ戦後っ子

雷で空襲語るお爺さん

月兎青い地球を恋しがる

六十路でも月火水木習い事

食前の祈り忘れぬ八十童子

寝屋川市 江 口 度

子の喧嘩血の出るまではとまらない

回転寿司屋お皿の色が請求書

ストレスがたまると金魚浮いてくる

自販機で小銭を整理するポッケ

少し小さすぎないか象の墓

寝屋川市 平 松 かすみ

その度にぼすたるガイド持ち出され

四畳半多趣味の母の道具箱

ラッシュから逃れた足を組んでいる

朝日出て沼は極楽絵図となり

赤ちゃんが毎年増える隣組

寢屋川市

森

茜

マントヒヒみたいに夏が座っている
花屋さんの言葉どおりにつく蕾
子を叱るどこかいじめているような
スイミングふくよかな列おし出され
ほこほこと背ながが燃えてくる熱意

寢屋川市

後藤 黎之助

十本の指が働く老いの幸
なまけると筆は自分の字にならず
友の背はみえる自分の背はみえず
初対面同じ年齢だと打解ける
海鳴りのように聞えるビッグバン

寢屋川市

堀江 光子

青空も蝶も知らずに氷中花
カラフルにコレクションめく薬箱
同窓会食後のくすり一せいに
朝の散歩蜻蛉羽化する刻にあう
蟬しぐれ自分史を繰る終戦忌

寢屋川市

柴田 英壬子

ほこり洗い流すと造花みずみずし
読書の候フレキシブルな風に会う
二編とも読もう目を病んではいるが
永遠の世の常寂光寺がある安堵
亡母にもらった匂い袋がある簞笥

寢屋川市

角野 仁清

定年へ企業戦士の二軍落ち
台所ギブスの妻の指示仰ぐ
キレル子は一人もない甲子園
この先も何とかなるさきりぎりす
天命を待つさきりぎりす潔し

寢屋川市

坂上 高栄

車椅子轍に捨てるわだかまり
腹決めて六根清浄身の軽さ
国民の期待重たい返り咲き
安心を今日も買ってる市場籠
口実は言うほど唇寒くなる

寢屋川市

太田 とし子

ほたる火の指にこぼれるもの思い
職なくてペンペン草と語る日も
孫が来て私の孤独かき回す
荷を運ぶ蟻はバートか正業か
レストランお子様ランチ丁度よい

寢屋川市

酒井 勇太郎

ブライドが背筋に残る父孕寿
我が孫の甘いマスクが気にかかる
日本丸歴史作家に舵委ね
リストラが家族の絆強くする
多趣味持ち免許皆伝無い不覚

妻谷重三

高槻市 井上照子

ラッキーだ万歩の距離に二度の職玉の輿射止めるまでのユニホームビールまであれこれ言われ宮仕え愛妻が部長の噂訊きたがる縄のれん課長はいつもレジの傍

妻屋川市 北岡波留吉

海鳴りのひびきが誘う新天地柿かじり竜田の川で詩を探す命かけた妻を残して死ねますかピンチ乗り切り箔をつけてる七光り年の差が気になりだした倦怠期

高槻市 川島諷云児

秋の気配に自問自答が多くなる知らず知らず敬遠されていた迂闊果たせない夢の続きを子に期待多少恥かかねば金は溜まらない過去形で物を言うなど叱られる

高槻市 傍島克治

居酒屋であげた気炎がうそのようトッパ記事高校野球で平和な日ため息が精一杯の抗議です薬石の効副作用だけ残り口下手なくせに喋りたがりやです

海好きな父の墓地から夕陽みる花びらの優しさめしべ頼もめる同病を哀れむ心深くなり子が親に尽くす時代を忘れよう結婚と離婚エンゼル多事多忙

茨木市 藤井正雄

馴れてきた猫の寝相の鷹揚さ飾らない言葉で路地は今日も暮れ宿浴衣脱ぎ捨て卓球子が相手頼み事小出ししている膝頭趣味の域とつくに越した庭の菊

茨木市 堀良江

波立てず金魚優雅に鉢に住む拭き上げた廊下ゆうゆう猫の足ママの絵はどれも大きな赤い口新人がはや裏口を知っている誕生祝い花束小さくしてもらう

茨木市 井上森生

背に負うたつもりの余生軽すぎるいつまでも賞味期限の来ぬ笑顔年金で行くオリーブの里の旅向日葵の中にも背中向けたやつ一飛びと彼の地に嫁ぐ娘は言うが

茨木市 島 元 ふ み

突っぱっていないと減入りそんな老い

詫びることばかりの私でも祈り

健康な老人だけが貰う飴

北国の夏もキャミソール着たい娘ら

やさしい娘おやっと思う時勢かな

八尾市 宮 西 弥 生

八月十五日白い肌出す女たち

全館冷房不景気忘れた日の財布

百万本のバラ一本に会う勇氣

よいことがつづき濃い目の墨をする

年上の言葉信じることにする

八尾市 宮 崎 シ マ 子

針箱に母の極楽つまってる

入道雲湧くほど愛は湧かぬもの

手のかかる夫の留守に深呼吸

麦ワラ帽にこっぴり隠れる小さい母

故郷に従姉が二人姉一人

八尾市 内 海 幸 生

未だ続く不況の救い高い天

墓地を出て蚊は思いきり叩かれる

住所録朱線が増えた暑さかな

株すこし買って政経欄を読む

旅先の寺で先祖の盆供養

八尾市 吉 村 一 風

中ジョッキワンモアと言う今日の汗

呑み干したボトルに出口見つからぬ

言い過ぎた言葉浮いてる朝の水

回転ずし不況知らずによく走る

ドドドドン花火ふっきる氣の迷い

八尾市 高 橋 夕 花

暑くるしい夜だカサブランカが匂う

モナリザの笑みは冷たく人嫌い

ラベンダーの海が私をウツにする

私がかれいに見えた水鏡

かなしいが恋の一字がもう描けぬ

八尾市 長 谷 川 春 蘭

茄子漬の塗りのはげたる夫婦箸

油虫逃がし一つの老いを知る

ステテコが何処へ行っても大阪弁

背を開き脱ぐを金魚に見られたり

母が居るただそれだけの子の帰省

八尾市 高 杉 千 歩

母の勤彼を息子のように呼び

出張の途中下車という帰省

征兄は徳めぐむとよんで二十歳の死

お年寄りでしょうが席は譲れません

いっどこで苦吟小学三年生

八尾市 篠原 いつふみ

時どきは揺さぶつてみる子の絆

ブランドでビシッと決めて芯が無い

水槽で肩身の狭い養殖魚

よく笑う女に有った悩みごと

飲み放題損得迷うほどは飲む

八尾市 村上 剛 治

爽やかな声が挨拶して通る

雷鳴に夫婦げんかが溶けました

弁解がうまくてそっぽ向かれてる

甘い水一度飲んだら癖になり

疑い深い眼鏡を拭いてばかりいる

八尾市 村上 ミツ子

キャミソールの姪もいっしょに墓参り

初盆へ亡母の好物みなで食べ

いっぱいに羽根を広げてくれた母

相槌を打って断り考える

そう言えば昨夜茗荷を食べ過ぎた

八尾市 生 嶋 ますみ

モデルルーム巡り歩いて夢を買う

取りつけた手摺がなじむ木の温み

恋をしてかかとの高い靴を買う

ジャンプしてバスから降りる園児たち

カレー作り夫の腕にまかせてる

八尾市 神 原 まさと

見栄捨ててバランスをとる老いの坂

展覧の絵を見ていたら横に友

スーパで良く会う人に本屋でも

生涯の味方は電子レンジなり

あかんあかと二歳の大阪弁

藤井寺市 高 田 美代子

のんびりと一生夢を見ていたし

顔を上げて歩くハミングが出る日

一本の電話に揺れたことがある

秋のわたしの何処を切っても風ばかり

ありがとうを言うて素直になっている

藤井寺市 福 元 みのる

薬もう減らしましょうに元氣出る

何よりも恩師の説教いくくり

薬より養生法を説く名医

熱狂に氷馬鹿売れ甲子園

被災地へまた戻りたい里心

藤井寺市 中 島 志 洋

答えたくない事ばかり聞くマイク

辛さを掴みそこねた細い指

賢兄より愚弟が先に嫁貰い

パレードで俺に手を振るミス着物

どことなく母に似ている好きなひと

松原市 小池 しげお

決闘が終って動きだす時計

病名を氣遣う音のないテレビ

善人で一生終る鼻の汗

一緒には死ねない夫婦茶碗かな

出世して幼馴染を忘れない

羽曳野市 榎本 吐来

審判が審判されているテレビ

引き綱でガイドしている犬の自負

親友の名が出ぬ古稀のクラス会

不景気の風吹っ飛ばす甲子園

シナリオがあつたか九回裏の乱

羽曳野市 吉川 寿美

風化した愛を大事に老いふたり

次に来る波に乗らねば黄昏れる

夏大根辛いジョークが心地よい

雷雨烈しわたくしごとを隠さねば

カップラーメンほどの軽さで愛される

羽曳野市 福田 満州

暑うてもものうぜんかずら見習おう

お盆でも仏の好きな肉料理

リハビリをするため生きているみたい

スカートと縁切りました膝頭

定年後留守番ごっこしてくれる

羽曳野市 三好 専平

うまいかと問われまらずいと言いにくい

肩の力抜いたら口が軽くなり

手話だから心の音が聞こえます

名人の芸は泣かせて笑わせる

潔癖もいいがフアジーも捨て難い

羽曳野市 酒井 一壺

いたずらといじめとどこが違うのか

いたずらの時だけ知恵がよく回り

スプレーでいたずらされた赤い犬

熱さめてつまらなかつた人と知る

熱さめて通帳の残ゼロとなる

富田林市 松本 今日子

夏祭り亡母の描いた扇子持ち

あの頃でどこらあたりか世はめぐり

同じ日の二人の葬よ同い年

盆供養お経が少し物足りぬ

信じない物の一つにカレーライス

富田林市 藤田 泰子

風切って歩いたこともある背広

姑さんに習った手順梅を干す

波乗りの上手い男と夏の海

長い旅今日も楽しく流れよう

私も駱駝も好きな砂遊び

富田林市 片岡智恵子

クワガタを沖縄で買い関空へ
ファミリーの笑顔それぞれ旅終る
末席の口火流れは変らない
保険満期めでたいはずのつまらなさ
世紀末川の流れが速くなり

河内長野市 加島由一

百万の味方だよと給料日
朝顔に約束通り水をやる
子供には見せない空っぽの財布
健康のために時々恋をする
好きと言うには御堂筋短過ぎ

河内長野市 植村喜代

大丈夫大丈夫お腹の子を忘れ
夾竹桃思い出しているまだ二十
竹トンボ心いまだに飛んだまま
悪女にはなれず悪女に悩まされ
喋りつづける娘に少し疲れきり

河内長野市 井上喜醉

うつむいて都合の悪い擦れ違い
年金の出る日知ってるパチンコ屋
どん底で円は奇跡の時を待つ
あつさりと言えずA型まわり道
君が代も唄えぬ子いる民主主義

大阪府 榎山隆盛

松茸がちょっぴり安い秋の色
オスカーの助演賞なら妻のもの
身の回りテレビ三台鳴っている
治療費と比べりゃ安い飲食費
松花堂弁当のつく方へゆく

大阪府 米澤俣子

大企業蹴って気楽なフリーター
素人目悲し落款買ひ被る
気になる噂告げに来たのか黒揚羽
ネットメロン膳柔らかいお食べ頃
しくじりを見て見ぬふりも思いやり

和歌山市 福本英子

肉付きの面と出会った京の夏
サボテンと薔薇と痛みの違う刺
無医村に医大出たての美青年
お名前は喉まで出てるこんにちは
子福者の手相で独り住む暮し

和歌山市 牛尾緑良

紙おむつ替えているのは他人の手
罪をまだこぼし続ける日記帳
車椅子踊り疲れてみたい日も
時々粉飾をする生きざまに
五十年経っても八月の渴き

和歌山市 堀端三男

掌から砂こぼれるように友が近く

ひと夏のアバンチュールを知る帽子

五分五分になれば女性に花持たそ

カレー事件以後遊ぶ子供の声聞かず

飯の世と思えど欲は捨てきれず

和歌山市 福井桂香

それにしても恐い真夏の夜の夢(カレー毒物混入事件)

エゴ捨てた鏡にまいる顔うつる

闘病をしばしエンジヨイしています

掌をひろげ朝の太陽転がそう

海になり愛あい愛を漂わす

和歌山市 川上大輪

ツーフィンガーあなたの指は細すぎる

犯人は誰だ だあれも答えない

悪い癖おんなじ物が欲しくなる

すぐそこに避暑地があったバチンコ屋

水族館の魚はきつと不味からう

和歌山市 川上富湖

コスモスになりたい棘を抜いてみる

図書館の隅に落ちてる目の鱗

雲になろうと煙突を出た煙

九百二十匁だったと母子手帳

彼岸花忘れたなどと言わせない

和歌山市 細川稚代

和歌山と汚名流して盆供養

一城の主と独りの胸を張る

五割引きやつと私の手に入る

灯台のあかりストレス消してくれ

姑さんを見送り誰もこわくない

和歌山市 桜井千秀

飛ばされた帽子は後ろ振り向かぬ

射る時の的は小さく絞り切る

慎ましく控え神経尖らせる

絡んでる糸で羽ばたく折りがない

心中の虫が喚いて寝付かれぬ

和歌山市 岩本美智子

キャミソール ロングの髪も涼しそう

蟬時雨タクトとってるのがいてる

クラーが駄目な夫と過ごす夏

うすれゆく視力夕闇迫りくる

日一日色褪せていくわたしの絵

和歌山市 青枝鉄治

狭い車庫親の中古は追い出され

起工式また青空が削られる

宴席の芸でリストラ免れる

選ばれて付けたバッジの汚職劇

オフレコになって本音がほとばしる

和歌山市 堀 畑 靖 子

シンプルな暮し望んでいるけれど

何年も使わぬものが多くなる

夏バテで私の手入れ難になる

青虫を銜え雀も生きている

人は人は私昼寝する

和歌山市 山 根 めぐみ

柿の実がつぶされているおままごと

路をむく気遠さじんと亡母想う

あじさいの葉が重くて露まみれ

なめくじが思案の末に動き出す

深いほど情けは闇に溶けたがる

和歌山市 古久保 和 子

らんちゅうはアインシュタインかもしれぬ

ピタゴラス ショートケーキは美味しかろ

バーゲンの文字は溺れるほど好きだ

ちよつといひ話があると隅の席

文面の通りの味がする切手

和歌山市 宮 口 克 子

なかなかのもんやなあとはどんな意味

良心のかけらを抱いて鬼が病む

背の低い順に並んだ懐かしい

バカでかい理想器も考えず

解答はその他の事情聞いてから

和歌山市 玉 置 当 代

浅漬けと茶粥うれしい里の膳

井戸水の生活に夏を救われる

相槌を打つと仲間になれている

今にまだとれぬわたしの甘え癖

写経する心がひろくなるように

和歌山市 田 中 み ね

付かず離れず長い付き合いたいから

鏡拭く明日も女で居るために

もしかしての期待もあって取る電話

御開帳すれば火を吹く日記帳

当たりかまわず吠えて淋しい犬となり

和歌山市 池 永 正 嗣

天下泰平隣の犬が吠えるだけ

一厘を残す人生その重味

同じ海を豪華客船輸送船

いい本は広告までも違います

遠い日のがんじがらめの日を憶う

和歌山市 木 村 初 子

青い海今日のいのちに活を入れ

盃蘭盆会亡夫と盃交わす宵

身仕度にアレコレ迷う齡でなし

花育て花のいのちの重さ知る

友逝きて風の挽歌が野辺渡る

和歌山市 垂井 千寿子

助けた事は忘れた方が良い時世
肩揚げを取り人生へ船出する
母の愛に勝る力が見付からぬ
梅雨明けへストレス回す洗濯機
物置きに計画ばかり積んである

和歌山市 楠見 章子

星座表あなたもきつとビルの上
糠床混ぜた手で夫のビール注ぐ
結婚記念日プランの夜景雨になり
生返事ポストが鈍い音を立て
政争劇アリの背中では陽を弾く

海南省 三宅 保州

常識という妄想に取りつかれ
気にいらぬときは逆さに押すハンコ
肩書がなければただの酔っぱらい
ロコミという最大のコマーシャル
古里の辺り夕立だと思ふ

神戸市 中村 ゆきをを

有難やどっこいしょと立てるのも
だしぬけの英語に笑顔だけ分かり
カルチャーセンター一番前でガムを噛み
買うティッシュ貰うティッシュと使い分け
あたふたとすかたんばかりの暑さかな

神戸市 山口 美穂

コーヒーは濃い目残暑に負けぬよう
庭の胡瓜も曲がり残暑に堪えている
秋海棠の可憐な紅も嫉妬する
老母と娘と時々逆さになる暮し
我儘言うて困らせた老母のいい寝顔

神戸市 池田 善守

帰りたかった我が家に二晩飯の宿（義父追悼 二句）
戦争に四度も行つて八十五
五時以降予定はないがある素振り
ワープロも英語も教材買っただけ
携帯電話ながら仕事が多くなる

芦屋市 黒田 能子

からまった糸そのままに秋も暮れ
バイキング満腹感は自由なり
花活けた玄関やさしい顔になる
お守りのように指輪が外せない
ふかふかの指の形のついたパン

芦屋市 水田 民平

珍しく立読みの混む梅雨晴間
お揃いの浴衣で踊る盆が好き
雷雲の重なる空に核の影
巻雲のようなクリーム溶けて秋
落ち込むな所詮仏の手が舞台

尼崎市 春城 武庫坊

全て許して海は静かな顔をする

ちひろの絵暑さしばらく忘れさせ

不器用な男主役になりたがる

夫婦茶碗を洗える幸をかみしめる

運不運サッカー戦も人生も

尼崎市 春城 年代

まさかと思う右へ右へとペンのもと

眼のことはあきらめようと言ひ聞かし

同級生年寄るごとに頑固なり

ご先祖にと小さいバナナ売っている

コレステロールの悪玉とみに増やしけり

尼崎市 長浜 澄子

どんな時にも私でいたい萋の花

衰運かボトルシップに波の音

ちちははの教えを想う万灯会

昨日はきのう中天に月は冴え

一呼吸おくと何でもない話

西宮市 林 はつ 絵

八十の先の端数は切り捨てる

易学を少しかじった論しぶり

盆供養大振る舞いが惜しくない

混ぜようと無理はしません水油

生き生きと昼の雀荘老人会

西宮市 西口 いわゑ

ひまわりと根くらべして陽は沈む

尾を引くように長崎の鐘ひびくなり

平等に分けて諍うもとなり

母を語るとき少年になる夫

うとうとと初恋に逢う午後の椅子

西宮市 奥田 みつ子

姑となるときめきと途惑いと

驚草のようやく咲いた息子の笑顔

時代の流れ取り残されてゆくも良し

乳母車どこまでも道続いている

迷う目にキラリと秋の川光る

西宮市 秋元 てる

フランスパン鍔広帽が大股に

蓋付の湯呑しなやかだった指

生真面目な人と別れて水ゴクゴク

生涯の午後何時頃だろ今は

傘の下は天気 気楽な母である

西宮市 亀岡 哲子

梅雨はまだ明けぬコスモス咲いている

月下美人ひそかに開く夜のリモコン

あらそうおと相槌打って欲しいだけ

美術展の出口一枚選る葉書

友達の口紅だからちよつと借り

西宮市 牧 渕 富喜子

二三頁読む間の空の変わりよう

不満あるが月はまああるく出てくれる

花束のトルコ桔梗はナルシスト

八月は姿勢問われる事多し

はやばやと梨も供物の中に入れ

西宮市 菊 池 トミエ

休耕田ひまわり植えて村おこし

ほんとうは知っているよと目が笑う

老人に鰻一尾多すぎる

封を切る指が感じたいい予感

朝顔の折目正しく青い色

西宮市 久 保 まさお

つゆ明けず秋を待たずにトンボむれ

篠山へ来て見つからず初蛭

いくさ終え広島で聞く鐘の音

原爆といくさをにくみ生き延びる

白鳥の数をかぞえて丹波道

西宮市 刈 田 泰 司

ちらっと見る指輪私の方がええ

目刺しにも祝ってもらう誕生日

誕生日やさしい言葉だけでよい

忠告は薬用人参ほどに効く

賞味期限切れにびくつく腹でなし

西宮市 井 上 松 煙

柄になく心飾って疲れてはて

よくなれば癌の話をさりげなく

音がして花火は見えず夏まつり

昼寝どき子守歌なり蟬の声

胃に落ちる速さのわかる氷水

西宮市 井 上 信 子

流水よなまめかしくも美しい

宇治金時注文までに身体冷え

南氷洋の鯨の味はまだ覚え

厚化粧お人良さそなおかみさん

震災で一家離散のお雛さま

西宮市 緒 方 美津子

花束を抱きても父のまじめ顔

肝心な事は飾らず言っておく

白菊に飾られる日よ遠くあれ

一合で狸々になる喜寿の父

足弱くペンが私の生きる杖

伊丹市 山 崎 君 子

朝顔が咲いて洗濯好きになる

アイスクリームかすかに匂うラベンダー（北海道で）

クリスタル肥えたあざらし娘の土産

碧い目と歌って踊るさくらさくら（サハリンで）

サングラスとってごらんよ暗いまち

伊丹市 小熊江美

好きだよと不意に言うても困ります
蟬しぐれ内証話をかきたてる

赤とんぼ急に増えたる秋きざし

ストレスを溜めてひと言言えぬまま

好奇心ばかり先だつ旅行好き

宝塚市 嵯峨根保子

そうめんを虫養いに残暑かな

体力のいる約束に口ごもる

虫はらう手です邪心はありません

一滴の毒は私のかくし味

一日の段落にあるネスカフェ

宝塚市 吉田笑女

朝夕に仏を拝むのも日課

書き溜めた迷句他人に見せられぬ

句づくりに盆の太鼓が耳ざわり

夜明けまで踊りつかれた盆踊り

亡き夫と踊った過去がなつかしい

宝塚市 黒台伊佐武

せつかはあと十秒が待ちきれぬ

小人は器用が過ぎてお人好し

思い出し笑いを彼につつかれる

四十年よくまあほんに御苦労さん

箱入りの息子をとられ嫁苛め

川西市 氏林洋敏

満月が二つあっても困らない
ふるさとへ帰れぬ理由はたんとある

お金なら腐るほどある昼寝する

挨拶の短い人を好きになる

人類の敵がのさばる核兵器

相生市 中塚礎石

マンションで余生を送るのも楽し

区画整理業者は先の先を知り

お上には勝てずわが家が壊される

詰め込んだ否応なしの仮換地

引越しの柳誌のもらい手はあまた

姫路市 古川奮水

日めくりの速さに祀る孟蘭盆会

天秤は妻の目線に近づける

引算をすると買物かご軽い

救急車犬も蛙も道開ける

マンネリの尻尾で餌を変えられる

兵庫県 大谷幸次郎

高規格道路で浜がまた細る

残照へやる気まだまだ衰えぬ

親心避雷針にもなるつもり

実印のような迷路で抜けられぬ

窓際で知った西日のエネルギー

乾杯へビールの色もうれしそう

鳥取市 春木圭一郎

一本のビールがつけばごちそうに

真冬でもビール私の起爆剤

飲むほどに美人が増えるああビール

缶ビール二個で二人はいいムード

鳥取市 岸本孝子

朝めしをしっかり食べている顔だ

堂々とひとり娘をとりにくる

門限にはらはらさせた娘も嫁ぎ

とおき顔がだんだんくずれだす

聞き上手ころを楽にしてくれる

鳥取市 岸本宏章

朝ごはん食べた子の目がさわやかだ

どの山も富士の雄姿にあこがれる

盛り場の日付が変わる午前二時

明日濡らす傘もしっかり干しておく

平熱のときに遺言書いておく

鳥取市 美田旋風

自由の世妻と違った風邪を引く

世も変わり歩けない橋見て帰る

割り切れば鬼から角が消えている

九時からのドラマは妻の子守唄

龍宮から帰り役所に椅子がない

どれ程の違いがあらう躑躅つくし體

キムタクも大人の髭を貯える

十二枚曆の中にある秘密

弥陀の座にとつても遠い女でした

病抱き静かな花火見ています

鳥取市 杉本孝男

地に足が着かぬ男はしごかれる

寂しくて卵も割れぬひとりの夜

申告へ行けば追加の税とられ

念力で打つそば味に自負が湧く

ひたむきな汗は男の美学なり

鳥取市 植田一京

好き好きとダイナミックなラブレター

原色の街で愛には飢えている

グラスにも凝って素敵にワイン飲む

陽炎のようで中心つかめない

満月の寝るには惜しい夜が更ける

鳥取市 西村黙光

薬草酒のお蔭と思うわが余生

畑買ひ薬草読本煌かす

断酒会の親友にや教えぬ薬草酒

縁台で妻を労う薬草酒

薬草酒自作自演の猿芝居

鳥取市 両川洋々

ああ神よ会社に僕の席がない
核廃止急げ地球が死んじやうぞ
この顔は造化の神のミスだろ
う
コマ切れの党で政権取れるかい
夢のない田んぼで案山子胃が痛む

鳥取市 岩原喬水

その先は聞かず秘密のままがよい
老いてなお色気の方はダウンせぬ
ふすま絵に昨夜の悪を睨まれる
老骨の指が時々悪さする
亡き妻とほろり写真でひとり酒

鳥取市 富山檳榔樹

思い出は隠れて泣いた母の顔
浜ゆうの花に海辺のロマン聞く
甘いも酸いも変わる浮世の風車
お晩ですふる里の風生きている
明日はもう土壇場越えた茜雲

鳥取市 石上悦子

おばさんもちゃんと名前があるので
す
バスポートそのたびまわり整理する
少年はせっかちに実をつけたがる
梅雨あけにセミの礼砲響きます
電話ボックスで携帯かける雨やどり

米子市 政岡日枝子

心の中の脳をゆっくり休ませる
赤い月明日はどちらへ逃げようぞ
もう夢は追わず大の字に寝ている
ドタバタ劇は見ている方が気がつかう
引き分けのどちらも弱いから拍手

米子市 木村富美子

子を産んだ数ほど罰を受けている
この子等を見とけてからおとうさん
こだわりが有り遠回りして帰る
昨日今日悔いを残して日が落ちる
三日月に最敬礼をしてねむる

米子市 鷺見正子

うぶ声に美女と暗示をかけてやる
つるるんと行水をするゆで玉子
美容院の鏡で私まだ綺麗
あの峰の先を知ってるバスポート
正論へちよつと弱気な膝頭

米子市 野坂なみ

ひいじじさまの紋付を着る花婿さん
勿体なくて夏の朝寝はできません
お悔みを言ったお方が人違い
ひきわけの底に逆浪立っている
一切れのパンを盗んだばかりに

米子市 永井三津子

何時の間にか亡夫を恋うてる蜜狩り

忙殺の日々に傷心救われる

句集帳我が愚痴そつと聞いてくれ

反抗期大人は身体ばかりなり

絡めても恋は敏捷すぐに逃げ

米子市 澤田千春

とっておきの赤いベレーはいつかぶる

納得がいくまで歩く風の中

悩みをカットこの世が広くなってきた

軽くなった脳味噌つれてお笑いに

好きな人と綱引き合つて生きている

米子市 田中亚弥

神さまの言われる方へ這っている

仲間が一人二人と反旗ふりだした

へソの緒を切つた時からタレントに

抜け道のところどころに水がある

僕の進路に口だしやめておばあさん

米子市 中井ゆき

泣くでない風は時々向き変える

街作り蔵は長生きさせられる

深呼吸天の青さを全部吸う

土ふまずくつきり家族韋駄天だ

迎え火を焚く度つのる寂寥感

米子市 石垣花子

熱いお茶筆の運びを軽くする

心まで盗まれていた鍵の束

夫婦の財布潤す妻のペンネーム

顔を見て危うく伝言思い出した

小さい羽根で幸せ運ぶキューピッド

米子市 白根ふみ

花筏はらはら想いとどくまで

贋作と知らずはらはら抱いている

砂丘の駱駝もう日本に飽きている

とっておきの笑顔がすぐに出てしまう

慌てると蛸もわたしも縛れだす

米子市 林瑞枝

モーツァルトの響く再起の喫茶店

大山の靈氣に触れる紅葉みち

ジョギング二人夕陽の歌がよく似合う

日本海花鳥賊波に身を任せ

がいな祭お祭り好きな姉を呼び

米子市 光井玲子

古里の風の匂いが身に染みる

とこしえに神話の湖で育つ貝

うたが生まれそう霧の這う朝ぼらけ

門閥を捨て自由な風の中にいる

思い出の中には祖父のカンカン帽

倉吉市 野口節子

腹くくり乗って見ました泥の舟
二人居てだんまりのまま朝が来る
ブランデー温め合っている夫婦
一升瓶今日は休めと書いてある
目を閉じて夢の続きを追って見る

倉吉市 松本よしえ

燃り甘くかけた息子に背かれる
草刈機浜ひるがおも薙ぎ倒す
オアシスの女神の足が濡れている
わけ有って大事にされるお爺さん
朝の体操となりの声が高すぎる

倉吉市 山本玲子

思い出もアルバム帳も色あせた
迷ってはおれぬ火の粉が飛んでくる
バランスを崩しのはほんやじろべえ
老いらくの集いに素人医者がいる
三日坊主これも天成かと思う

倉吉市 山中康子

老桜伐り建設の音の中
川柳のよろこび柳友となら解る
屋台から恋が芽生えて仲に立ち
旗色をさとり素早く身を躲す
あだ名にも素知らぬ振りでたくましい

代々の家名を誇る鬼瓦

倉吉市 米田幸子

濁流に日本丸が飲み込まれ
汚れても褌をしたら出直せる
首に鈴つける役目を買うて出る
金は無くとも妻が居るからオアシスだ

倉吉市 最上和枝

子の名前一番高い樹に吊す
無記名の忘れた傘が泣きじやくる
名前まだ知らないうちに意気が合う
挨拶もしつかり出来て嫁に行く
鎌倉彫りの盆に匠の技がはえ

鳥取県 谷口次男

青という素晴らしい色持っている
石頭酒が入ると軟弱に
地球捨て住みよい星を選ぼうか
球児らの潑刺プレー オアシスだ
ボケ防止ボルノ雑誌で若返る

鳥取県 新家完司

どこに釘打っても惜しくない家だ
ひるめしは毎日そこらへんのもの
太陽のライトを浴びて僕主役
駅長はカラス真夏の無人駅
つぎつぎと敵が生まれてくるこの世

鳥取県 西原 艶子

早朝の女は仮面まだつけぬ
残る日へまだ道草をしています
後ろにも子を見る瞳もっている
子や夫の後ろわたしの席がある
煩惱を宥めきれない出来心

鳥取県 橋本 多哥由

しみりとなつた心をもてあます
夏は好きもえて海ゆき夕日みる
喧しい老母がいるから安心だ
夏の夜に浴衣で二人地酒飲む
ふる里を移れば淋し影法師

鳥取県 原 みさを

茶髪ピアス時代おくれの熱がでる
ヒートアイランド人のおごりが裁かれる
私を弾避けにしている人事
昭和史の八月という重い月
落選の票の重みも忘れまい

鳥取県 上田 俊路

八月に被ばく手帳が語りだす
時化続く浜でハングル文字拾う
しゃんしゃんと傘で彩る夏まつり
めりはりが無くて不況の出口ない
なりゆきで生きたシベリアまだ偲ぶ

鳥取県 土橋 螢

哀歎の涙を知らぬ地藏さん
貧困の思い出ばかり食べ過ぎる
戯れの夏が行ったり来たりする
ほのぼのと昨日とちがう朝がくる
感謝して暮せば迷うこともない

鳥取県 西川 和子

どこまでもついて来るのは悪い影
筒先が向いているから逃げられぬ
空高く筒から夢がはじけ出す
五七五これが私の物語
語らずに終る人生だつてある

鳥取県 石尾 かつ乃

まわり道した晩年が忙しい
はらはらとさせたあの娘も今日嫁ぐ
はぐれ雲ちよつと道草したくなる
預かった猫いじらしいほど馴染む
風鈴の音色に和み友を待つ

鳥取県 羽津川 公乃

ピーマンも三原色に夏を炎え
口紅もバフも知ってる曲り角
絵ハガキに盛り沢山な道中記
友眠る墓が立派で空しいな
一大事君が代一部度忘れし

鳥取県 林 露 杖

立秋の白昼撰氏三十五度
荒れ庭の白いグリヤが寂しすぎ
太陽を背に踏ん張って地曳綱
無理やりに日課を決めて暑に耐える
建て娶り子為した家も立ち腐れ

鳥取県 石 谷 美恵子

母さんのダウン家中音がない
退屈が集い噂に花が咲き
愛のシグナル熱い想いが届かない
私が仏か鬼になるお金
浜育ち今では土と対話でき

鳥取県 さえき や え

身に合うたくらしで肩がこりませぬ
ふところの夫と北山杉を見る
昔のままの駅よ父さんもう居ない
考えが横にふくらむ一人者
おみやげを山ほど積んで精霊船

鳥取県 権 代 康 女

自然には勝てぬと雨の空を見る
古橋を夢見る子等の水しぶき
肝っ玉ゆすぶるような浜言葉
子が巣立ちやと夫婦の身繕い
だれか来たようだと行って電話切る

鳥取県 国 森 武 子

七彩の虹は東の間夢あたえ
思い出の束「つらかった」のは刈り捨てる
メダカすむ小川がほしい孫のため
墨衣心の中をのぞきたい
音違う風に会いたい時もあり

鳥取県 山 本 正 光

一馬力余分残して老後の身
妻の忌に墓石を洗う惜しみなく
ヘルパーと泣いて笑って癒やされる
武装して食べます特にカレーなど
切れ物を握ると何かしたくなる

鳥取県 田 村 きみ子

瞑想の目にまだ残る蟬の殻
子育ての時期が花だとみんな言う
ないしやないしよの話を聞きにくるとんぼ
文化人ばかりで松の木も枯れた
今日という日を大切にした命なり

鳥取県 津 村 八重子

まんまるい団子作ろう亡姑の忌に
孫と手をつなぎ螢を追う川辺
湾曲の背にも思い出たんとある
心の中はいつになってもかざりたい
茶柱にはずみいそいそ母の朝

鳥取県 鈴木公弘

三叉路のどちら向いても風がない
ほんとうの味方がほしい蟬しぐれ
ご意見はいろいろあって水をのむ
エアコンをドライに換えて考える
秋立って迷いのみえるキリギリス

鳥取県 土橋睦子

自分らしく生きよう月が満ちてくる
灯明をつけて暫く無に還る
ティーカップ替えて忘れる恋ひとつ
臆病を傾く影に嗤われる
ふり仮名をつけぬと読めぬ私の名

鳥取県 乾隆風

木戸番のはしから下足番をする
ほんとうの自分に嘘をつくでない
七合目を登ると膝が笑うなり
予防線はるに猫なで声をする
眼うらに燃える西日は美しい

鳥取県 幸家單車

夕立が晴着濡らして去って行く
遅着きの客にお膳を運ばせる
どしゃ降りの雨に花嫁案じられ
蟻の列一家総出で餌運ぶ
新築移転それから運がついて来た

鳥取県 土橋はるお

紙礫ひらいて見れば離縁状
紙の財布に紙のお金を入れている
土壇場に立っても素顔見せられぬ
壇家の人がさっぱり死なぬお坊さん
トンボすいすい僕もやる気が湧いてくる

鳥取県 黒田くに子

ばたばたと失業ふえる世のゆがみ
青空へやる気はあるが職がなし
趣味一つともしびにして余生生く
残業かと思えば飲んでいる夜更け
缶詰のように老母のひとり部屋

鳥取県 近藤春恵

廃屋でコスモス楚々とゆれている
病床に笑顔つくって会いに行く
大海を知らず小川の雑魚で生き
門限が辛い別れをせきたてる
日本海大波小波くり返す

松江市 安食友子

まだまだと水を吸ってる植木鉢
湖畔ではストリートです恋心
バカンスであつと驚く赤い富士
ウォーキング冷やかしの目を受けている
飲み捨ての缶見てござる地蔵さん

松江市 川 本 畔

咳ひとつ出して答になつてゐる
添い寝しても母にはなれぬ孫の距離
宴たけなわやくざな風になつてくる
真つ直ぐに歩けぬような音楽だ
電車こつとんあなたの町に近くなる

松江市 浦 辺 静 江

夕映えに心動かし老い達者
こだわりをすつきりさせた深呼吸
几帳面すぎてあちこち探す癖
おしゃべりに横槍入れるおばあちゃん
待ち惚けを食わされ一寝しておこ

松江市 佐野木 み え

二度と来ぬ利尻の島よかもめたち(北海道旅行 二句)
湿原に小さき花の息吹聞く
夾竹桃父の忌がまためぐり来る
お地藏さん夜空の花火見えますか
堀川船水都も涼し観光客

出雲市 竹 治 ちかし

まだ地には染まらぬ彩を選つてゐる
父と娘にインターネットという絆
捨てられぬ時計が違ふ刻を告げ
常識の海で時々水を飲み
飽食の不満聞いてるパンの耳

出雲市 板 垣 夢 醉

角隠し過去の汚点は置きみやげ
力瘤ないから知恵で始末させ
酒夫妻はビールで共稼ぎ
風鈴を仕舞い忘れて秋の風
井の中の蛙も旅に出たい秋

出雲市 吉 岡 きみえ

大ジョッキあけて仲間の輪に入る
銀河を仰いで明日の予定組む
吹き通す風と読書をしています
斜めから横から見る目変えてみる
ホームレス豊かな頃をしゃべり出す

出雲市 久 谷 まこと

人並な幸せでよい日が昇る
底辺にいるからみんな良く見える
たてまゑと本音が別な道を行く
世の流れ目まぐるしくて乗り遅れ
弁舌が良くて正論らしくなる

出雲市 小白金 房 子

昼の月残して暮れる母の湖
八月の雲が引きずる敗戦忌
夏ばてを寄せぬ農婦の小麦肌
なす 胡瓜 夏の主役を膳にもる
つぶらな目生まれ子牛を拭いてやる

出雲市 園山 多賀子

吾亦紅 老いは老いなり身だしなみ

汗をしてコーヒー ホットで飲む夫婦

一日だけアリバイ固守する夏椿

抽象画ヒントにしたい題が欲し

草の径裸足の好きな子がいない

出雲市 小玉 満江

札束が頂上にある針の山

再婚をすすめた友はもういない

草笛を吹けば故郷よみがえり

暑い夏九十九歳無事に越え

盆踊り上手の後からついて行く

出雲市 富田 蘭水

薬にも毒にもなつて孫そだて

お早うの一言ぬくもりさめさせぬ

どん底に落ちて他人がよくわかり

おしゃべりなワイングラスが溜める嘘

ゆれながら吊橋ゆるす人ひとり

出雲市 石倉 芙佐子

障子の棧指で擦って小言いう

関白の横をすらりと抜ける風

老女とか強かに軽やかに生き

仏様を送ると一度に秋になる

あるときは彼岸花より赫く咲き

出雲市 岸 桂子

母ならばどう耐えるだろ風当り

紫陽花の色を狂わす一つの計

子育てを人に預けた均等法

やや遅い時計が受話器の中で鳴る

遠ざかる人ならそつと見送ろう

島根県 堀江 正朗

闇に生きあの世とやらを夢に見て

幸せは歳いだだいた顔知らぬ

地獄極楽どっちでもいい目が欲しい

あの頃に帰ろ迷いを切り捨てむ

ひと言に世間知らずの恥ずかしさ

島根県 堀江 芳子

腹立たぬ理由は呆ける年齢か

弱音など吐けぬ自分をいとしがり

子育てのようにはいかぬ正朗さん

ホウホウとなに寂しくて山鳩よ

ニンニクの匂いも生きていく力

島根県 小砂 白汀

願わくばラベンダーの花の下

割れ鍋の中で仙人掌花をつけ

疲れたる終の棲家はトタン屋根

汚れてるだから白い手袋しているよ

あほらしい喜劇見てるかいましばし

島根県 伊藤 寿美

定退の空虚を埋める歎異抄

ボイルした言葉同居の卓に載せ

賑やかな花火の下に居る失意

国のため匍匐前進した昔

今日も雨ショートショートを読んでいる

岡山市 川端 柳子

良いこともあった救いの枯野いく

アトリエで半身魔性になった花

何よりも笑顔がほしいまた来てね

悲願テクテク夫と歩いている笑顔

夢を与えて耳許の風こちよい

岡山市 井上 柳五郎

暑さ見舞い返事は声で聞く電話

淋しいなあ饒舌の孫嫁に行き

出世した子の親路地にひそと住み

老醜を晒してならぬ身だしなみ

これからはおまけ傘寿へ齡重ね

倉敷市 小野 克枝

主婦の顔つくる水切籠振って

水割りがうまい巨人が負けそうだ

控え目な母が必ず通す筋

二つ三つ蓄開いて喪があける

通知表見せて上げると孫の策

倉敷市 田辺 灸六

罪のない心に曇るものはない

負けて勝つそれでいいよと痩せ我慢

横槍の深傷に負けてなるものか

人間のらしさが覗く眉の相

洗わねばならぬ夫婦のわだかまり

倉敷市 井上 富子

黙祷をすれば見えますきのこ雲

しばらくは家事を離れるバスポート

篤農と言われ張り切る耕運機

洋服を裁とうゆるみをたんと入れ

一人旅スケッチブックしのばせて

岡山県 矢内 寿恵子

長生きの余得静かに経を読む

茶柱の朝ハンドルも軽くなる

やがて私も溶けるまんだら絵の中に

残り火を囲うてくれる孫 曾孫

合掌へ我が行く末も地の果ても

岡山県 小林 妻子

言訳の出来ない影がつきまとう

欲張って来た足跡がはずかしい

満足も出来ずに今日の鏡拭く

退院を見送る窓の若葉たち

神様を信じてくれぬ子も分かる

岡山県 大石 あすなろ

胸の宝庫に愛という字を入れておく

ちちははの風が来て泣く休耕田

生きて来た道に花野もあつたはず

暑バテでツーカーの仲ショートする

切り捨てた噂ひとつが舞いもどる

岡山県 山本 玉恵

完走の足跡が無いすらやみ

手鏡の裏にひとりを眠らせて

明日があるあしたがあると辞書を繰る

少女羽化 乳房つんつん目を覚ます

約束をする日の軽い紙コップ

岡山県 二宗 吟平

宮の鈴振ってスツキリ夏祭

海の風切って明石の橋渡る

一番の札所わが名を見付けたら

ミャンマーの言葉美しガイド嬢

大木を押して治った手の震え

岡山県 荻野 鮫虎狼

昇天の龍は下界を見向かない

ローカルの旅日本の音を聞き

前に行く犬振返り振返り

夏祭り男の匂いだけ残り

禁酒した男に冷たい餅が待ち

岡山県 江口 有一朗

軟水が甘くて良いと益軒さん

不易流行胸にゆっくり急ぐ旅

間合とることが苦手の子が切れる

寝る前に七つ点検老い独り

悲しみの重さ原爆忌の暑さ

岡山県 富坂 志重

人間の愚痴聞きあきて梅雨上がる

梅雨のうつ少しやわらぐ新茶の香

じゃが芋のようにごろごろ夏休み

針の無い時計といたい八十路すぎ

夢追って恥かきながら生きている

岡山県 福原 悦子

選り好み趣味に生きている老いの坂

欠伸噛む助手席にいる思いやり

やんわりと逆らう演技も年の功

嘘混せて半分話弾んでる

潮時を迷い喜劇にしてしまふ

広島市 森田 文

ふたりから七人になる夏休み

児も猫もまるく育ちて暑中なる

八月六日いつものとおり蟬が鳴く

慟哭のあれから口が重くなる

わかりやすい栄養学で生きている

竹原市 小島 蘭 幸

熊蟬が鳴く毒舌を懐かしむ
種を買う明る窓にするために

にぎやかに飲む仏壇は開けておく

一番風呂にビールが冷えている里よ

八月十五日もバイト休まない

竹原市 森 井 菁 居

何事も無かったように秋に入る

不景気へ文殊の知恵が頼りなし

結論が出ぬまま凡夫塔を降り

考えがまとまった頃雨が止む

ボールペンぼとり眠気がさした音

竹原市 時 広 一 路

角の無い鬼なら僕もなれそう

どうしたの言われた僕の休肝日

僕の眼で確かめてやる新世紀

見ぬ振りをした日心乾き出す

賽銭と柏手 何も願わない

竹原市 岩 本 笑 子

定年退職毎朝ラジオ体操へ

ちよつと待てと言われぬように仁王門

ハンディを持つ子と千の鶴を折り

おにぎりをしつかり食べて夏の陣

遠慮無い電話娘は帰省中

竹原市 古 谷 節 夫

広島弁品は無いけど好いテンポ

雪月花今朝もお日さま昇るなり

ティータムお毒味役は誰がする

遠メガネ地球の未来見えますか

継続は力たすきを確と掛け(たけはら五〇〇号)

竹原市 石 原 淑 子

かかとかから背筋伸ばして炎天下

たけはら誌両師に感謝五百号

やさしさの素は何だろう夜明け前

ときめきの一期一会よ蓮の花

風のゆく生きる力を置いてゆく

呉市 楨 田 英 詩

石仏の苔貫禄をしかとみる

子を思い親を偲んで月を見る

和解して友とのリズム取り戻す

愛情を戻すヒントが出てこない

高過ぎて飽きてしまったころざし

広島県 藤 解 静 風

減税という飴少しほろ苦し

有能より無害の方を採る政治

六頭身は六頭身のまま風化

ばやいてはいても生き甲斐です多忙

ふるさとは海だと遺伝子と言った

宇部市 平田実男

峰打ちをされて身に沁む力の差

只酒が好きな男の薄い影

都落ちするのへ富士がきれい過ぎ

アルコールヘストレスじわりじわり融け

七人の敵が居るから生き生きし

美祢市 安平次 弘道

大粒の涙やっぱり勝てまへん

好きなことさせれば子供かも知れぬ

善人になるには欲が深すぎる

自分史に書くから妻が腹をたて

B面になると調子が出て来ます

柳井市 弘津柳慶

過去を追えば次々妻が顔を出し

雲の峰師と盃を交わそうか

その日から白い日記となる傷心

おぼえない旧悪友があばき出し

思春期の少女の瞳美しい

香川県 木村あきら

日々好日東の空に陽が昇る

紋白蝶昔話はしたがらぬ

言訳は止そう人間小さくなる

雑踏を抜けると碧い空がある

床の間に秋引き立てる花活ける

香川県 工藤吟笑

澄みきった空へ卒寿の小さい旅

叱る目の奥に感じる優しい目

もう叱るまい泣き入った児の寝顔

ヘラヘラと叱られ笑う反抗期

澄んだ票だけでグルマの目は開かず

香川県 成重放任

残暑の中蛸がはや秋を呼ぶ

あの島に熱帯の夜はあるかしら

蟬しぐれ今日も昼寝の邪魔をする

口だけは負けぬが体後退り

忘れ物取りに帰ってまた忘れ

香川県 川崎ひかり

全世界わいたさわいだW杯

カイワレのその後の話誰もせず

美人薄命整形美人どうなるの

野良犬が顔色見ながらついてくる

損をする積りで買った株でない

香川県 池内かおり

真っ当に生きてバラ色とはゆかぬ

全体を見れば勝ち目はない女系

損得を言つては済まぬ老母の世話

成り行きで乗ったが損な役どころ

お亡父さん孫が供えた煙草です

香川県 山地 マツエ

ループタイ老いのあせりが見えかくれ
待ちかねた便りだったの一行詩
月冴えて恋の終りが言い出せぬ
弥陀拝む心時々夜叉が住む
とんカツにメニユーが変わる孫が来る

香川県 神保坊太郎

損得を言わずに尽くす血の絆
徘徊じやおまへん私万歩計
潮騒が退いてうつろになった瓶
親の手をはなれ小毯がよく弾む
無理しても寄付を旧家の顔がする

松山市 宮尾みのり

蛙にはようなれなんだ水たまり
しょうもない男ヨメさんまたも替え
毒薬の何と無機物的な色
家庭崩壊したとバブルの後を聞く
母だから娘だからという甘え

松山市 丹下美津子

勝てぬ相手にせめて弱者の黙秘権
電話口早ちゃきちゃきの浪花っ子
母が待つ窓ほのぼのと灯がもれる
子が四人まさかの時の預金帳
再出発を励ます母と朝の駅

今治市 矢野佳雲

いつ嫁に行くか女の子が生まれ
賞罰は無し定年のさわやかさ
叱られることは嫌いな井の蛙
百万べん好きと言われて好きになる
母の笑みうつつに何を思っていてか

今治市 野村京子

ブラックのコーヒー女盛りです
古本屋で命光らすエピソード
水鏡モノクロで見る母の顔
満月へ胸熱くする月見草
風の嘘ふと聞きもらす花の芯

今治市 越智一水

敗戦を知らない兄の墓洗う
兄嫁と田んぼ守って娘も嫁かせ
ふる里へ帰れと月が丸くなり
知らぬ地で子のあいさつが温かい
寡婦ひとり戦にふれる涼み台

高知市 北川竹萌

組閣への指命小渕氏暑かろう
糸瓜取る終は目当ての糸瓜水
西瓜よく熟す待ってる里菜園
なりゆきの儘に八十坂膝軋む
電話口遣りし西瓜の礼言葉

高知県 赤川菊野

黒粥をたいて大地の子を偲び

ここはモンゴル月も夕日もエトランゼ

ここは草原沈む夕日よパオの灯よ

海峡の向こう無限の空がある

裏方に徹した父のデスマスク

北九州市 梅田宣司

まだ妻に言わねばならぬこと一つ

刻まれたシワは語らね過去の修羅

八月の暦見る目の世代の差

この暑さ金さえあれば天国よ

一心同体妻も私もボケました

唐津市 田口虹汀

秋茄子を嫁に食わせて家平和

花咲かぬ草木も同じ水をやる

難問に出遭うた時は風に聞く

カタ仮名は苦手ほとんど孫にきく

秋西風雨持つ父に習った晴雨計

唐津市 山門幸夫

立秋の入道雲の煌きよ

蛙追う蛇が跳んでる処暑の庭

太郎君こちら向いてと七夕へ

虹の浜スザンナ長老居て楽し

ときめきの薄れた故郷は遠くなり

唐津市 山門タミ

苔むした墓に語れど風もなく

亡母の井戸埋めて思い出させた故郷

台湾のうなぎも威張る丑の日よ

玄関は靴々々の夏休み

今更に読めば悲しい凍土の記

唐津市 久保正剣

退屈な蟹が啄木待っている

老人会踊りが好きな元芸妓

間歇泉噴くまでポーズ取って待つ

限りあるページに記す愛の詩

パトロンのふところ狙う鼻濁音

唐津市 仁部四郎

噂ではよく効く呪文ビッグバン

ガラス戸の奥に人間図鑑あり

スポーツニュース見たので今日も終わりです

能書きと云うてのこと母の愚痴

敗け方がお気に召さないひいき筋

唐津市 山口高明

一村三我が家も女性上位です

失政の総理を起用する不思議

世話人をやらされ毎度身銭きる

一寸だけ声出して読む表彰状

履歴書の用紙が売れる不況風

唐津市 市丸晴翠

年の順と限らぬ訃報電話置く
居座った台風並みの不況風
仏壇に母愛用の欠け茶碗
電子音に仕切られている新世帯
菜園のトマト烏も待っている

熊本県 永田俊子

川柳への情熱燃ゆる聖子女史
すたれゆくモラルを嘆く赤い月
生きさまの正解他人が出してくれ
影法師も疲れてきたか背が丸い
相槌を打ってつめたい風に会う

熊本県 高野宵草

塵焼きへ毅然とカード放りこみ
散歩する犬と揃いの雨合羽
最高の己れで逝きたし今日を研ぐ
冷房を効かせ熱い茶飲みたがり
席ゆずる乙女笑顔が美しい

熊本県 岩切康子

叱られた猫が体を摺り寄せる
根性を貫く勇姿に少し惚れ
夕焼に染まらず白い盆の月
喫茶店喪服のままで旧友と
ベンチャラの口に憎さが増しており

弘前市 櫻庭順風

鴨川のせせらぎを抱く慕情かな
忍び合い別れぬ人となりにけり
白刃を潜り刹那の恋に身を焼かん
累卵の危機を救った思慕の情

八戸市 島田昭治

今頃に生きた証を探してる
脇目もふらず猪突に生きたころ恋し
七日盆昔の仲間が会いにくる
寝るときは写真の亡妻におやすみを

富士宮市 渥美弧秀

居酒屋へ誘われ無口の粹外れ
花に埋み棺の義姉はみ仏に
斎場でのスピーチ半分も言えぬ
星空へざわめき燃やすキャンプの火

大阪市 清水利武

殺人鬼早く捕まれ神ぞ知る
蟬の声鳴くだけ鳴いて消えてゆく
ロウソクの灯が霊を呼ぶ万灯供養
計画を立てて秋には一人旅

大阪市 寺井東雲

心臓に悪い握手といい握手
生きているために連絡賀状書く
入道雲水着の女神呼んでいる
恥ずかしい早くお日様沈んでよ

貝塚市 池田 寿美子

初恋もアバンチュールも秘めて喜寿
お盆にはあの世に出逢う人待つ
百円のドライアサヒに今日も暮れ
見習いたい「うらら」の祖母の気構えを

岸和田市 原 苑子

肩車乗せてやれない老いた肩
満ち潮に素足がおどる春の海
定退後仲間はすれの無趣味人
あふれくる涙は何も語らない

豊中市 江口 明光

そつと踏む妻へ非情な台秤
川柳へやすらぐペンに春の音
どの席も父は音痴の祝い酒
自由化に踏まれて育つ麦になれ

池田市 藤井 計光

パワー全開球児の夢が駆けめぐる
癌告知名医慄然と言いつ放つ
道のりの遠さつぶさに慈母がいる
結論をしっかりと聞かす父がいる

寝屋川市 富山 ルイ子

十七回忌父の墓前に好きならば
古稀すぎてから人生の正念場
約束を破り親への縁切り状
失敗を教訓にして登る坂

寝屋川市 籠島 恵子

ゴミを銜えたままで清掃車が走る
みんな留守人恋しさがまたつのる
陶器市母の好みを言っておく
視界五メートル思わず夫を呼んでいる

八尾市 大内 朝子

わたくしを頑固にしている亡父の血よ
かけひきへちぐはぐになる恋模様
ラブラブの夜はふたりで星になる
起き上り小法師抱いて生きのびる

西宮市 山本 義子

サングラスお洒落ではないお許しを
電話故障 味わいました島流し
開発は銀杏並木を取りはらい
青磁皿に素麺を盛りひとり悦

川西市 松本 ただし

瓢箪のくびれがひと息つけという
ヤジウマの立場で回す万華鏡
鍵要らぬ金庫で暮らし足っている
難波橋ライオン欠伸こらえてる

鳥取市 福田 登美

真夏日にとんぼが秋を連れてくる
健康をしっかりと刻む万歩計
半分は疑う薬手放せぬ
交差点善人ばかりの群に見え

鳥取市 近藤佳子

残照へ首すじシャンと立ててみる
どん底を生きた男だ粘りもつ
倅せがあふれて花のようなひと
調子よい上げ底に似たひとと居る

米子市 木村春枝

母の膝むかしの疵を物語る
むくげの花歴史の語りもりがち
淋しさと孤独を抱いて土蜜
友の声電話口から励まされ

倉吉市 淡路ゆり子

無駄な事あつてストレス解消す
気付かせまいとこころ痛める癌告知
汗かきに木綿に勝る肌着なし
子供部屋ひまわりに見張られている

鳥取県 太田幸枝

文章はつたないけれど達筆で
風紋の砂丘で駱駝絵にもなる
はらはらとしながら愛のプロポーズ
喜んで乗った車ですぐ眠る

島根県 森茂美

世間にも認知されたか茶髪の子
晩酌を一つ増やそう孫が来た
夕焼けの空に終戦偲ぶ雲
上げ底の下に余裕がとつてある

竹原市 三宅不朽

大空と大の字紫煙やめられぬ
炎天へ身ぬちの藍を搾りだす
今日も蝶看取りし窓にもつれ合う
禪寺の朱塗りの橋が腑におちず

この一句

満開の花に誘われ修羅出土

(昭和53年度 路郎賞受賞作品)

酔々

定年後誘われて、川柳の道に入り、先輩のお勧めで川柳塔へ入れて戴きました。そのおかげで一年半後、路郎賞に輝くこの句に出逢えたのでした。

この句の重量感は何故でしょう。一字一句もゆるがせにしないで、あたかも桃山時代の障壁画のような絢爛さがあります。路郎賞というものは、川柳とはこういうものだという指標だと思います。私のただ内へ下へと向いた、ちまちました作風に、上むけ外向けと目を開いてくださったのです。

路郎賞受賞五年後のこれからという時に、昭和58年9月23日、63歳で亡くなりました。酔々師のご冥福を改めて祈ります。

(矢野 佳雲)

自選集

阿 萬 萬 的

自己主張過ぎて階段踏み外す
自分史に省いて置きたいところもあり
秋の雲に悟る心を教えられ
負け犬の気持が解る齡かしら
齡かしら何かと涙もろくなり

小 西 雄 々

祝辞まで受けた船出が座礁した
用心をした落丁が愚を喋る
打ち直す綿も近頃ない暮し
田舎では食えぬが都会では食える
慌てると夢売りまでが去って行く

辻 白 溪 子

酔いさめてもとの無口になる男
安い方を比べて買った訳でない
蟬の声散歩の道についてくる
お見合が終って仲人当てにされ
ええやんか外人の妻貰っても

小 林 由 多 香

長い目で見ても新人頼りない
よく切れる頭で勇み足もある
竹槍で戦うつもりだった夏
裏切ったうしろめたさが眠らせぬ
幸せを冷凍にしたまま忘れ

西 田 柳 宏 子

命乞いらしく釣られて跳ねている
先祖代々ひしめく狭いうちの墓
延長15回魔物ひそんでいたボーク
やる気まだあるらし傘寿竹を踏み
八・一五地獄も休む終戦日

藤 井 明 朗

二〇〇〇年夢を頂くのを祈る
出合い別れくり返す運不運
川柳のふれあい人生観がある
病には勝てず頑固も医者通い
初盆の無常の風を置いて去に

信楽の狸も売ってるちゃわん坂

松川杜的

議員さん欠伸よりましか眼鏡拭く

読んで問い読んで答えて議会チョン

棚経へ少年僧の手が白い

八月の空は忘れぬ蟬しぐれ

恒松町紅

カロリーを言うとかツブの手が感ず

キヤミソール男の弱い尾髭骨

母親が気に入っている顔写真

十年が寿命ですよと軽く言う

宍道湖という脇役のある花火

正本水客

四字熟語することがないわけなし

先頭を意識している手を振っている

正座してみても考えかわらない

どことなく似ていると言うほめ言葉

生涯を託す人とは思ってず

月原宵明

甲子園笑顔で校歌勝ちチーム

過去を振り向くのは老人可哀そう

ビーチバレー技より他に見せるもの

散骨をせよの遺言状だけど

手と足の芸術に酔う阿波踊り

人生に待ったがなしで日が暮れる

勤めてた会社見下ろし飲むビール

夫とは別れましたとビール酌ぐ

七つ目の橋から町が村になり

ずぶ濡れが入り出て行く二三人

遠山可住

遺伝からみると白髪か禿になる

犯人は人間らしい星の危機

おかしいと言う味方がひとりいるピカソ

天才かもしれぬおかしい子がひとり

山歩き一つ憶える今日の花

金井文秋

米寿になりましたこれからが余生です

いい運動になりますスーパーまで千歩

ウォーキングしてるのでない蟻の列

盲点を突いた勝利が殊勲賞

老いの出る幕ではないと役を逃げ

野田素身郎

リハビリのあの老人にも負けている

高校球児各地の夏を持つてくる

蚊に咬まれながら待つこと小一時間

選挙あるたび亀裂が深くなる夫婦

皮膚癌を怖れちゃ何もできぬ夏

宮口笛生

ジャンケンで負けて諦めつかずいる
正直に出来すぎていてはがゆがり
ヨイトヨイヤマカ暑さ忘れた盆おどり
模擬店の賑わい楽し夏まつり
百葉の長と土用を乗り越える

波多野五楽庵

まつさらな夕日十月からの使者
沙羅双樹心貧しき風ばかり
火祭りのゆらりゆらりと影法師
お静かに妻の病のさなかなり
ゆで卵なんて我が儘なんだろう

藤村 女

春は花 秋は紅葉の趣味の友
武田尾にふと思ひ出の虹があり
快いお世辞に顔がゆるんで来
虫聞いているのか女湯に音がない
ペン走るみんな苦吟の顔になり

高杉鬼遊

母を呼ぶ賽の河原の風車
くらやみが好きゴキブリも恋をする
弥勒菩薩の腰の辺りの塗りが剥け
コンビンへゆく家庭内別居中
無花果を食う残酷に手を汚し

板尾岳人

人間を捨てずに明日も舟を漕ぐ
恋をして人間らしく水を飲む
水も火も風もわたしを笑わない
人間が好きだと思ふ濡れ落葉
十月の風を宿して秋に居る

野村太茂津

名刺撒き散らし肩書き消しておく
旬の初物配る裏町住み心地
助手席で居眠りしてるスベアキ
老朋友^{カミナリ}思ふ長江荒れ狂い
喫茶店呆けた老兵モノローグ

八木千代

その影に昨日の青を匂わせる
何を憂いてか青草はむらさきに
草むらに仏も鈴を響かせる
向う岸からも土鈴を振るような
そこに動かぬのは蟋蟀という鈴か

河内天笑

カマキリは毎日鎌を研いでいる
嫁はんにおこられながら寝てしまひ
縫うようにして追い越して行きよった
何がうるさいいうて携帯電話どの
すこし風ある日は信貴山がきれい

座右の句・私の句特集 (3)

座右の句

秋風の中で乞食に拝まれる

(豆 秋)

私の句

尚富を地に積まんとすもんじゅの炉

麻生 アート

座右の句

一步出すれば吾れ旅人となる心

(栗)

私の句

旅人よ素朴におどれ郡上節

大塚 節子

座右の句

阿呆になつときなはれという母があり

(栗)

私の句

地に還る日まで女は朱と舞う

宮西 弥生

座右の句

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

(薫 風)

私の句

自画像に少し笑顔を書き足そう

木村 あきら

座右の句

限らない欲に生かされ生きている

(みつ子)

私の句

欲生の回向に生きて生かされる

岡本 花匠

座右の句

夫婦相和して百まで踊らんか

(静 水)

私の句

こだわりを捨ててダルマは起き上がる

石原 淑子

座右の句

凡人へもつたいたなくも湯があふれ

(久米雄)

私の句

団結の石はD51受けとめる

中塚 礎石

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫 風)

私の句

にこりの溶ける温みよ亡母の膝

伊藤 寿美

座右の句

(新子)

私の句

れんげ菜の花この世の旅もあと少し

波多野五楽庵

座右の句

(荔)

私の句

千本を伐り一本の植樹祭

小笠原敏人

座右の句

(古川柳)

私の句

道問へばいちどにうごく田植笠

谷口次男

座右の句

(千代)

私の句

沙羅双樹わが結界にひそとあり

光井玲子

座右の句

(路郎)

私の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

栗林光夫

座右の句

(智子)

私の句

月見草ひとりの湖をもつひとに

町田達子

座右の句

(葭乃)

私の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

山本三郎

座右の句

(薰風)

私の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

藤原鈴江

座右の句

(天笑)

私の句

靴みんな磨いてあてのない日なり

小林トメ子

座右の句

(路郎)

私の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

田中笑風

座右の句

一日の重き軽さよ日記帖

(薰風)

私の句

ばつばつと行こうよ先は修羅の道 黒田 真砂

座右の句

人生はよいしょこらしよにとつこいしょ

(甲吉)

私の句

道草の好きなわたしの地蔵さま 一戸 ツネ

座右の句

大勢の中に味方が一人いる

(水客)

私の句

この道に行き止りはない立ち止まる 山口 美穂

座右の句

次の世があつたら妻よまた逢おう

(耕花)

私の句

苦しい時もあつたアハハの人生譜 小澤 幸泉

座右の句

日に疎くなれそうもなし母を恋い

(生々庵)

私の句

ごきぶりも出会いがしらは翔んで逃げ 岸本 豊平次

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

裁判に勝つて神には許されず 古谷 節夫

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薰風)

私の句

花束を投げると海の喪が明ける 椎江 清芳

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薰風)

私の句

口あけて妻の出す飴うけている 三宅 ろ亭

座右の句

一步出ずれば吾れ旅人となる心 (栞)

私の句

人生の縮図が見える駅勤務 川端 一步

座右の句

名曲ではないが夫婦の持つリズム (緑良)

私の句

美人ではないと言うから惚れなおす 中島 正博

座右の句

太陽の恵み竹の子竹になり

(小松園)

私の句

わが心にいつわりなしや墨の彩

古田 太虚

座右の句

妻はいま魚のウロコはいでいる

(三 窓)

私の句

正面に山ありゴミを焼いている

田 中 叶

座右の句

繋がれた犬を野良犬見て通り

(弘 生)

私の句

植えかえて大樹に育つ根を下ろす

吐 田 公一

座右の句

浮き草は浮き草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

路の臺夢の終わりのほろ苦さ

柳 原 秀子

座右の句

白い雨半世紀経た原爆忌

(薰 風)

私の句

八月の天いのつても祈っても

高 田 美代子

座右の句

ほつれ毛のながいみじかい生を享く

(千 尋)

私の句

もの凄く生きたくなっている 呼吸

中 原 颯人

座右の句

今嘘を書けばきのうも嘘になる

(千 代)

私の句

どん底に母の笑顔は変わらない

中 原 みさ子

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路 郎)

私の句

胸襟をひらけば素手で触れてくる

尾 れいじ

座右の句

夢のつづきへゆつくり歩くことにする

(町 紅)

私の句

目薬をさして男を確かめる

川 本 畔

座右の句

九十でまだ情熱がありすぎる

(紫 香)

私の句

思いやりあるがちよっぴり泥臭い

浦 辺 静江

有 本 泉 三

東 野 大 八

「昭和28年に、ふあうすと同人の灘与志男やはりふあうすと同人の奈多美代子ご夫妻が、新人育成のため、ふあうすと系の三好兵六、前川千津子に泉三さんら同誌同人に社外の方々のご協力を得て『ひなどり川柳会』を創立。中村東角・吉野瑛一・小林朝陽・大山竹二氏らの雑詠指導を受けました。

美代子さんは、フランス刺しゅうの研究家で知られている方で、白鳥川柳会並びに近畿女性川柳家有志より女性川柳作家育成につき感謝状を受けられる作句に熱心な方で、私は可愛い彼女の生徒でありました。

結局『ひなどり川柳会』は、昭和35年にふあうすと誌の同人欄が改善されたのを機に閉会したようです。」(前川千津子書簡)

千津子書簡に付された灘与志男略歴による

と、戦時中の昭和15年に姫路陸軍病院で麻生路郎を迎えての療養慰問大会で、その講演をきき川柳に関心を持ち、ずっと川柳雑詠やふあうすと誌に投句、戦後の昭和23年にふあうすと同人に推され、柳熱昂じて新人育成目的のためのひなどり川柳会の結成となったという。この消息書簡によると「私(千津子)が泉三さんと初めてお会いしたのは、この会です」とある。

「泉三さんと初めて会ったのは昭和28年ごろで、ひなどり川柳会の創立同人で(中略)前川千津子さん、井上比呂詩さんとも同様に泉三さんの死を淋しい思いで受けとられている事と思う。(中略)

この人とは会った時からすぐ親しくなり、泉三さんの世事に通じた話は実に面白かった

せいもあるが、私(三好兵六)より6歳年長者であるにも拘らず、私と同じに背をかがめてあたたく接していただいた。

その頃、泉三さんに雅号の由来を訊くと、

『兵六さん、僕の雅号は、何もセンゾーからきているんじゃない。実は泉山三六が好きでね、あの豪快さに憧れて泉三とつけた』

との返事が還ってきたことを思い出す」

筆者もこの泉三なる川柳人と二度、ふあうすとの記念大会などでお会いしたことがあるが、その控え目で、お若いのにおっとりとした人懐っこいお人柄は無類であった。この折も、雅号の由来の泉山三六の話をきかされてお互いにニヤリとしたことである。

泉山三六は第二次吉田内閣の大蔵大臣で、国会開催中のある日、酒に酔っぱらい女性代議士に戯れかけ「大トラ蔵相」でマスコミを賑わせたご仁である。

また、お互いが無類の犬好きであったことでも大いにウマが合った。きけば一回り下のトラどし生れで、本名は義郎だときいて、トラから名前も似てます、と大いに意気投合した次第だ。

「処理袋さげております愛犬家 泉三
犬に好かれておしっこもちびられる
尾を振ってうちは犬までお人好し 〃

掌に眠る仔犬よ心読めるのか 泉三

泉三さんは心優しい愛犬家の句が多い。そういえば、昔から外国犬の犬の名前をよく知っていて感心させられた記憶がある。

永年つれ添ってどこか抜けている 泉三

家電ピーピー老婆を追いまわす

ムード言う子等に勉強部屋が要り

子を叱るわが欠点を子に見付け

さらりとしたこんな句にも家族思いが感じ

られる泉三さんである。

そして阪神大地震――

平坦でないのに震度七が待ち 泉三

何も無くなって家長の泣けもせず

体調も生活もずれて余震なお

殺伐としてわが街角に声もなし

震災後久しい友の相かわる

三月から二カ月は元の東山町に戻っています。残務整理もしていますが、いろいろ情報も欲しくて……3/8付（以上『ふあす』）

三好兵六悼文抄録

「阪神大震災は、人間を悪相に変えました。図らざる天災とはいえ、人間密集地の阪神を襲うこの惨鼻をきわめた悪魔の仕打ちはなんとしても不可解です。呆然自失して瓦れきの中にただ佇つのみです」（泉三記）

筆者あての、あの呪わしい被災後の書簡は

なんと一カ月遅れで届き、当方とてもなすすべくもなく呆然、あ然とするのみ、三宮方面の知人ともその間、誰一人として躍起の連絡を続けても反応皆無だった。

「泉三さんと親しくなったのは、ひなどり句会の頃だったと思います。（中略）私宅が都市計画で、いずれ建て替えなければならなくなつた頃、泉三さんが殖産住宅に勤められていて、種々有益なアドバイスをして助かったものでした。その頃、私の職場にもよく足を運んで頂き、母など泉三さんに全幅の信頼をしていました。」（井上比呂詩悼文抄録）

前川千津子・瓦本ユキ・河田春草合同句集

「原色」は、昭和41年4月の発刊だが、故人の春草は別として瓦本ユキ（結婚して抜井姓）は被災して気の毒にも死亡、前川千津子も手ひどい被災で転居を余儀なくされた。

この句集のあとがきによると、ひなどり川柳会は、のちにぼんばり川柳会と改まり、ふあうすと主幹の鈴木九葉師の指導を受けている。

「芸術家的風貌で、ひょうひょうとした語り口調、眼鏡の奥のやさしい眸。この泉三さんにもう逢えぬと思うと淋しい。」（井上比呂詩悼文抄録）

この人は昭和39年発刊された「延原句沙弥

川柳句集」に大いに感銘したのか、しきりに句沙弥調の作句に専念している。

本名有本義郎・大正15年2月27日神戸市生れて、自営業などのあと得手とした殖産住宅の不動産部門の営業担当の会社員で過した。

趣味は前記の通りだが、年少の頃俳句も手がけた縁で俳画をよくした。この人の賀状はいつも淡白な一筆書きが多かった。

平成10年3月26日没。享年72、本従院法経日義信士。

犬好きも道理で、警察犬の訓練士でもあつたし、囲碁は二段の腕前とある。

「昔から泉三さんは菌が悪いとよくこぼし

ていられたが、晩年はリュウマチを患われたときいている。二十年前の泉三さんは細い目と可愛らしいおちよほ口で私に「兵さん、あちこち悪くてかなわんわ」とよくこぼしておられたのを思い出す。

七十余歳の死は、今の世の中では早すぎる。もう少し句沙弥志向を楽しみたかっただろうにと思つ」（三好兵六悼文抄録）

明日起きる楽しみのある恢復期 泉三

振り返る七十何かも淡し

「次号は「児島与呂志」

―― 61 ―

『恵比須講』

清 博 美

恵比須講は、陰曆十月廿日に主として商家が商売繁昌を祝つて行ふえびす神の祭礼である。

恵比須はご存じのように七福神の一人。その姿は風折り烏帽子を被り、狩衣・指貫を着けて、鯛を釣り上げている。そして商家の福の神として祭られる。

『守貞漫稿』に「十月二十日 今日京坂にて誓文払と云江戸にて恵比壽講と云 京坂にては唯呉服木綿古着等大小売ども蛭子神を祭り家内も祝之 又今宮等に参詣す也商にては不二祭祀一者多し 又今日呉服店等にて専ら小裁を売る古は縫裁の裁端をのみ賤価にうりしが買人多き故に近世は別に端物を小形に裁て七種或五色を付て売之 江戸にては正月十日に祭らず諸商家ともに今日毎戸蛭子尊

を祀り親族及び売道得意の輩を会して宴すること盛也しが天保以来全く廃せざれども前年に及ばず蓋し蛭子神に参詣する所無之 当地にても小裁五七種を紙に付て価金一朱或は一分に売ること二朱切れ一分切れと云然れども京坂ほど多からず」とある。

この恵比須講の前日の夜、大伝馬町から小伝馬町をつなぐ通りで、恵比須講に用いる様々な品物が売られた。例えば蛭子大黒の神像・汐の鯛・漬物・鉢植などなどである。やがてこの市はべつたら（浅漬大根）を売る市に変わりべつたら市或いはくされ市などと呼ばれるようになる。

太田南畝の『松楼私語』、これは遊里吉原での恵比須講の模様であるが、次のように記している。「正月」廿日は中の町の恵比須講

也。廿一日は内の恵比須講也。たいこもちだんな衆より合、下座敷をつちぬき素人狂言あり。内所にて膳をならべ、かみさんめしを盛る。高盛也。いくらかへても何ともいはず、本膳坪汁にさるぼうと牛房也。膾は海鼠、大こん、にんじん、九年母也。香の物は膳へくまざ、のををしきてをく。二の膳はあらひ鯉子つけ、二の汁は鱈にこんぶ也。此日ばかり、どんなにくふても小言いはず、焼物は塩引鮭に白酒をかけてひく。三味せんや（伝八）殿久しく出入る。片眼なり。おどりなどおどり、おかしき男、やき物をみなく、持ゆきし事あり。と、その賑やかな様子を記している。これは町の商家でも同じことであつた。

『東都歳事記』には、盛大な宴の模様、というよりはどんな騒ぎといったほうがいふような絵が描かれている。

当日は、親類縁者、知人友人、顧客などを招いて、音曲もにぎにぎしく、喰いたい放題呑みたい放題の無礼講の宴が設けられた。また席上えびす神の前で、家人が売手と買手にわかれて商品を売買する真似が行われ、千両・万両などとてもない高額の値を付け、「売りましたよう」「買いましたよう」といつて祝つたりもした。

『それをばえ』（著者・刊年ともに不明）

には、この恵比須講と將軍の鷹狩りの帰途の逸話が記されている。少々長くなるが紹介しておきたい。「江戸にて、將軍家の出行を御成といひ、焔館を還御と云ひならわす、(中略)さて、むかしは將軍家の御成も至て手輕き事にて、何代の頃の大樹公なりしや、十月二十日に、葛西筋へ鷹狩の御成有りし、還御は夜になりて、太伝馬町壹丁目を通行の時、道端に倒れ伏したる男あり、將軍自ら御近習に向ふて、何者の何に寄りて路傍に伏すや、と問ひ給ふ、御供の内に町奉行ありて、直に其者を檢するに、酒に酔ふてたをれしなり、

是は、今日花主なる太物店にて、ゑびす講の馳走に逢ひ、かくの如く熟酔したるなり、と答ふ、將軍の仰に、夫はめて度事なり、幸ひ今茲に狐の鴨有り、是をゑびす講のさかになとらずべし、との御意に、町役人出て、其所にて鴨一羽を拝領す。此鴨を太物店中に配分して、又夷講を祝ひしとぞ」と。

ところで、十月は神無月である。八百万の神が出雲に集結して、縁組みに精を出す月でもある。にも関わらず恵比須神のみ一人江戸に残つて商家の祭を受けるといふことになる。というわけで、

ゑんくミをかまわずゑびすのんて居る

天四梅 2

神たちのるすにゑびすのねたり喰
雲の出る国を蛭子ハついにミず

拾四 3
傍二 19

— 雲の出るで出雲。恵比須神は神無月にも江戸に居て、出雲には行ったことがない、となる。

大社ゑびすをいっそわるくい、

明三 5

— 何時も欠席で大社での評判は良くない。などの句も詠まれている。

再び恵比須講にもどつて、井原西鶴の『日本永代蔵』を開くと、「年中の誓文を、十月廿日のゑびすかうに、さらりとしまふ事あり。

其日は諸商人万事をやめて、我分限におうじいろく魚鳥を調べ、一家あつまりて酒くみ

かはし、亭主作りきげんに、下々さみて小哥・浄る。江戸中の寺社・芝居、其外遊山

所のはんじやうなり。上がたとちがひし事は、白銀は見えず、沓歩の花をふらせける。秤い

らずに、是程よき物はなし。人みな大腹中にして、諸事買物大名風にやつて、見事なる所

あり。けふのゑびす講は、万人肴を買はやら

かし、自然と海も荒て、常より生物をきつし、殊に鯛の事、沓枚の代金沓両式歩つゝ、しか

も、尾かしらにて沓尺二三寸の中鯛なり。是を町人のぶんとして、内証りやうりにつかふ

事、今お江戸にすむ商人なればこそ喰はすれ。」と描いている。

*
ゑびすかうだんなのこわく無い日なり

安四礼 4

— 無礼講の一日。

安元仁 2

十月の鯛もの、ふへ遠ぶざかり

— 商人が恵比須講のために鯛を買占め。武家方には品薄となる。

十月ハ十万両かめしを喰ひ

拾一 23

— 本句でも桁違いの単位。

とらまえて酒をのませるゑびすかう

天四満 2

万人も酔せてかへすゑびすかう

一〇 30

— 通りかかった人までも酒を振舞つ。

ゑびす講上戸も下戸もつこけへず

一一 6

— 呑みも呑んだり、喰いも喰つたりで。

ゑびす講姫のきてんがはつにしれ

明二礼 1

付声でゑびすの鯛は販へ売れ

拾一 23

— 付声は応援の声。嫁が十万両などと、小

声で値をつけたので。

五 19

ゑびす講おどり子を呼つむす子の代

富四 13

二代目ハ牽頭迄よゑびすかう

— 親が勤勉に一代で築上げた店も、息子の代になると危うくなる。

よく日ハゑびすのはねをひろうなり

安六義 2

ゑびす講四五日はねをしやぶらせる

一〇 25

— 翌日からは、恵比須講の料理の残り物鯛の骨などでの食事となる。

秀句鑑賞

同人吟 高須賀 金太

— 9月号から

編集長から十月号同人吟の秀句鑑賞を仰せ

付かった。同人の中には、名文家が五万とおられるのに……、と最初は断ったのだが、編集という仕事は日数と時間との闘いであり、私が断れば大きな迷惑をかけることは必定、こは恥をしのんで、拙文を晒すことにしました。

さて、最近の川柳はというと、現代川柳だか詩性川柳だか知らないけれど、非常に分かりにくい句が、一部でもはやされているようである。

また、これらの句の多くは、定型を無視したり、批判のない一行詩とでもいうべき、別のジャンルの詩型ではなからうか。川柳から批判精神が無くなれば、それはもう川柳とは言えないのではないかと私は思う。

ともかく、従来からの伝統（本格）川柳は低俗だなどという、偏見・蔑視は排除していかなければならぬだろう。

普通のオッチャンやオバチャンが、普通の感覚で作った句を大事にしていきたい。

ふるさとで見ても阪神負けている

前 たもつ

美味しい酒いつ飲めるのかタイガース

出口 セツ子

ひいき球団の勝ち負けに、一喜一憂できるのも平和なればこそ、あの無謀な太平洋戦争で、何人の名選手が散って逝ったことか。

戦争さえなければ、阪神・景浦と巨人・沢村の対決を、直接この目で見る事が出来たのに、返す返すも残念でならない。

さて問題の阪神タイガースだが、この稿を書いている八月二十三日現在、首位と二十四ゲーム差でダントツの最下位である。にもかかわらず関西では、連日テレビ放映はあり、スポーツ紙は一面を飾り、幸せな球団だと思ふ。

それに引き替え、昭和二十一年当時、近畿グレートリングと称していた、南海ホークスのファンである私など、球団は身売りでダイエーと名を変え九州へ行ってしまっわ、テレビ放映はめったにないわ、さっぱりわやです。

人間も話もあるのです

玉置 重人

表より裏の話が面白い

米田 恭昌

老眼をかけると裏がよく見える

川端 一步

川柳作句のマニユアルのような句。物事は正面から見ただけではよく分からないもの、上から下から、横から斜めから、あるいは裏側から眺めなければ、本質は掴めないということである。

お名前はかねがねなんて注ぎにくる

石原 靖巳

肝臓とよろしくやって酒二合

小寺 花峯

くすりが酒かやつぱり酒にしときます

梅田 宣司

体調が良くなる酒をのんでいる

土橋 はるお

梅雨冷えの夜は冷酒をほんすこし

安藤 寿美子

酒好きの私としては、どうしても酒の句に目がいつてしまふ。取り上げた五句それぞれが、私の思いを代弁してくれているようで、「川柳テいいなあ」と、思わず言いたくなります。

実は私も二十年余り前に、肝機能障害と診断されて以来、量より質へ転換した一人なのだが、本当にいい酒は高い。といって機械で大量生産されたものは、清酒風アルコール飲料とていうか、心が入っていない。

なお、冷や酒は体に悪いとよく言われるが、吟醸酒・大吟醸酒は絶対に燗をつけず、適当に冷やして飲まない、と、独特の吟醸香が飛んでしまします。また、原酒・生酒も冷やして飲まない、と風味が損なわれます。

正論を吐いているのに拍手なし

天正 千梢

正論を吐いた一人が輪の外に

小枝 ふさゑ

明日も振る尻尾ゆっくり休ませる

山根 めぐみ

頑張らずそろりそろりと生きていく

富山 ルイ子

わかるわかる。この国ではどんな世界で生きていくにしろ、少数意見は無視されたり、抹殺されたりすることが多い。早い話、国会にしてからがそうである。過半数を占める自民党が、数を頼みにどれだけの悪法を通してきたやら……。そこで、ええデがおます。

次の衆議院選挙で、皆さんの一票を野党に投ずればよいのです。

「寄らば大樹の陰」とか、表向きはどんな尻尾を振っておきましょう。その実、内心ではアカンベエと、舌を出してやるんです。ただし、くれぐれも尻尾を掴まれたり、尻尾を巻いたり、なさいませんように。

頑張ることは悪いことではありませんが、人それぞれに事情が異なり、頑張れと言われても頑張れない人もいます。

つい先日亡くなった、柳友のSさんは私に、「ちょっと頑張りが過ぎたわ、あんたも無理しなや」と言われたのがこの春、あれから僅か五か月足らず、医師の宣告通りだった。病名は肺癌、生まれてこの方煙草を吸ったことのない人だった。

頑張りは、無理につながり易い、ことわざにも「急いでば事は仕損じる」「急がば回れ」とあるように、お互い無理せずボチボチやりまひよ。

政治家の皆にかけたいポリグラフ

青枝 鉄治

見送ればボールを人は打ちたがる

川上 大輪

ブランコの下に限って水たまり

三宅 保州

さりげなく、さらっと詠んでいるように見えながら、三人の作品には、心引かれるもの

があります。

一句目、ホント私もそう思います。しかしながら、あつかましくて、恥知らずな彼らのこと、苔の生えた心臓、否、鉄のかたまりのような心臓で、ポリグラフを欺くことぐらいヘッチャラでしょうね。しかし一票というジョーカーはこちらが握っているんでせ。二句目、隣の花は赤い／隣の芝生は青く見える」とばかりに、本業はそっちのけで、金儲けにうつつを抜かし、挙げ句の果てはバブル弾けておじゃん。そんな輩にわれわれの税金使われては、たまりまへんなあ。

三句目、知に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、とかく人の世は住みにくい。

ご存じ、夏目漱石、草枕の一節である。この句を読んだとき、ふと頭に浮かんだもので、なぜ？と聞かれても答えようがない。的はずれと言われれば、そうかも知れないし、鑑賞文になってないやないかと言われれば、そうかも知れない。でも、どうしても私の心に引っかかるものがある、不思議な魅力を持った句なんです。

紙数が尽きました、他に。

先生が生徒に媚びてどないする

田中文時

水煙抄

河内天笑選

新潟県 高野 不二

いつまでも子供扱いする恩師
ぜいたくは寄付もしないで見る花火
苦労性貧乏性でポケもせず
言い出して自分で祝う誕生日
トマトにも独身主義か実をつけず

綾部市 藤田 芳郎

子がローン組むのに何もしてやれぬ
人間性悪監視カメラも自販機も
座禅水行読書百遍して迷い
金持ちが居ると歪になる会話
男子校化粧品なら一通り

大阪市 中澤 伽羅

動かないお尻に火イをつけてやる
夕食に強い味方の冷奴
よくしゃべるお金わたしの代りする
葬式の帰りやさしくなった妻
公園はゆったりたばこ吸えるところ

盆踊りおっ月さんも見てござる

札幌市 三浦 強一

老木の年輪に見る一揆の血
福の神も貧乏神も住むわが家
方言にこだわっている郷土愛
切り取り線何度それたか定年日

日立市 加藤 権悟

雷鳴は父の一喝かも知れぬ
札幌へ妥協河童の皿乾く
父さんにモンロー風まだ残り
八月焦土に耐えて来た助
麗人の日傘男を弾ませる

八王子市 播本 充子

勝ち馬に乗り換える度友が減り
陰口が怖くて会を休めない
惨敗に失うものがない若さ
限界を言ってコーチに叱られる
自分だけ歳とらぬ気の青写真

静岡市 大村 正雄

洗髪のままひとときの夕涼み
運転台どっさり吊す守り札
一代を草鞋づくりで胸を張る
ネクタイを結んでもらう敬老日
捨てなけりや拾わずに済む缶の山

横浜市 布山 嘉信

核を持つ国が実験非難する
歯ぎしりといびきが競う山の宿
山頭火あらわれそうな木曽の谷
盆おどり地元音頭も習わされ
カッコーがのんびりせよと鳴いている

横浜市 鈴江 純子

捨て難い夢を支えにして生きる
ひと波乱ごとに夫婦は丸くなる
新製品だが手引書に四苦八苦
ぬるま湯に浸り反省するばかり
ときどきは忘れてあげて丸い仲

横浜市 長島 亜希子

朝顔に夏の準備を急かされる
強引に白手袋に握手され
相談に乗ってのろけを聞かされる
巢立つ荷へ目覚まし三個入れておく
井戸端も不況対策論じてる

横浜市 福田 由美子

短冊に吊す子供の夢と欲
炊きたてのご飯で味をカバーする
夏休み明けて母さん昼寝する
つきあいの程度でおそろ分けをする
神様に愚痴を届けて看護する

川崎市 和泉 見早子

決めるのはわたしで破るのもわたし
撫で肩がショルターバッグに嫌われる
見慣れない靴があるなと靴を脱ぎ
マイペース流れに竿をさすばかり
花の咲くところを選ってる墓地探し

北九州市 岡田 幸生

もう肩は組めぬと笑ってる遺影
日に三度妻を乗せての通院車
雑魚なりの小骨をもって群れにいる
妻の吹く笛に踊りはまだつづく
満期くる妻に内緒の保険金

今治市 野村 清美

太陽の愛ふんだんにトマト熟れ
うたた寝に亡母が逢いに来てくれた
寝て起きて一人芝居の幕が開く
回り道ばかり歩いた苦勞人
悲しみを見せぬピエロの厚化粧

高知県 百田 幸

ミニだけどわたしの足になるバイク
定年後三年の肩たたき

ブレーキに手をかけてゆく通学路
どん底を生きた女はひるまない
健康で生きたい欲が歩かせる

出雲市 榎 ミツエ

せきれいが水あびしてゐるたまり水
ブランコを二人で漕いだ恋心
アジサイの玉の雫に虹を見る
琴の音で進軍ラッパ弾いてみる
新じゃがで友と二人で飲み交わす

鳥取県 西垣 美知子

飲酒事故反省してもおそすぎる
知恵くらべしてはカラスに遊ばれる
煮魚のくずれは何時も母が食べ
ネックレス短い首におちつかず
幸せだ大地を踏める足がある

高槻市 江原 秀夫

お社の裏で本音のお告げ聞き
いつまでも爪を隠して丸く住む
酔った振りちよつと本心言ってみる
眠る気で開いた本に目が冴える
平成の家風は嫁が持つてくる

尼崎市 田辺 鹿太

夏枯れの脳に冷房効きすぎる
平均のくらしと思うめしがある
不意に来る別れを予感するグラス
閑居して妻と欠伸をうつし合う
ウインクの上手な花はすぐ枯れる

尼崎市 森 安夢之助

音たてて政治不信の風が吹く
だあーれも僕を待つてゐる者がない
てきばきと上手に捌く子沢山
骨休みせよと歌舞伎の招待券
ちよつとだけ欲を残して八十路坂

兵庫県 仲井 素水

妻逝つて透き間ばかりの三十年
もつれ糸解けずに逝つた妻のこと
人生路背中合せの運不運
ふる里のイメージ変える川工事
ぜいたくに飽きて食べてるハツタイ粉

兵庫県 円増 純子

迫る古い胎児の型で昼寝する
勢いに乗った口許止まらない
死ぬまでは直らぬ癖に立ち向かう
手垢つくまでに馴染んで捨てられぬ
謎の面あつてロマンをかき立てる

兵庫県

植村雄太郎

河内長野市 妹背 尽呂久

カナカナをひねもす聴いている不況
衰えたなどとおくびも出さぬ意地
支払うてチョンとなつたら上出来だ
お裾分けしたい程ある健康具
銀行も定期せえとは言いにくい

羽曳野市

西村りつえ

藤井寺市 楠 昭子

息子の帰省下宿屋になるフライパン
バーゲンのブランド買って緩む頬
背伸びしたドレスアップに肩がこり
余裕ない時には見えぬ星の数
脱皮して少し明るいアイシャドー

大阪狭山市

伊藤尚子

大阪府 澤田和重

かぶと虫すず虫まつ虫子のたから
熱さめて何もなかった顔になる
足腰が弱り熱中するダンス
眠る児にちよっかい出している夫婦
生ごみにカラスが群れる繁華街

河内長野市

大西文次

和歌山市 吉村さち子

関白の座をリストラで明け渡す
振り向けば後ろ姿のほどでない
逆らつた挙句が労組委員長
ああ言やこうこつ言やああと外野席
妻の留守へそくりの額確かめる

信ずれば劇的に効くメリケン粉
退院を控えて月の影さやか
面食いが見事貧乏くじを引く
一通り商売したという自慢
教養と異次元らしい女好き
いい友だじかに苦言をいうてくれ
酒の酔い思わぬ人の裏表
口げんかスパイスにして老い二人
大小の恥をかきつつ生きている
憎いけどやはりあなたをまだ愛し
損させぬその一言に乗せられる
お父さんと呼ぶ語尾今日は荒れている
物腰はやりわり婦警手きびしい
健康です何を食べてもうまいから
ストレスを溜めた笑顔はぎこちない
夏燃えて所在を示すさるすべり
朝の陽の開花へ息をためる蓮
いわくありそう女ひとりの大ジョッキ
物体ないもつたないと片付かず
行く末はどうあろうとも翔ぶ構え

和歌山市 武 本 碧

何時誰が着るのと思うファッションショー

他人ならきつと許せるほどのこと

世の中を見飽きた金魚ふて寝する

実直な父がどうして裁かれる

人選を誤り船が山に乗り

和歌山市 森 口 美 羽

閃いたヒント大事に持っている

饒舌な影がだんだん長くなる

縦の物横にもしない不真面目で

影を追いやつとあなたに辿り着く

回れ右自分の影と向かい合う

和歌山市 水 田 秀 男

僕よりも背中まるめている子供

不安げに月が日本を眺めてる

公共工事に欲しいオンブズマン

いいようのない悲しみがたとある

むかしには戻れないんだ竹トシボ

大阪市 一 本 勇 太

それ見ろと笑われまいぞ影法師

男なら度胸でゆけと怖い妻

ギャル コギャル主役は街を夏にする

ダイオキシンそれから煙絵にならず

笑う風刺す風友の温い風

大阪市 中 井 正 秀

深刺りに捻りも入れる理髪店

出ると打たれ退がると押されどないしょう

どうもならんプラス志向で行くとする

ねむた目でラジオ体操続けてる

年金に寄付お願いと言ってくる

大阪市 小 泉 ひさ乃 (久子改め)

新総理 微かな望み掛けている

成り行きで縫った岸に陽があたる

コスモスが咲き乱れると人を恋う

美人かと聞かれ女は顔じゃない

今ならば雲ひとつなく逢える人

大阪市 三 浦 千 津 子

大根を刻む腹立ちをもきざむ

すげ替えの首が揺れてる日本国

核心を突くと微量の毒を吐く

晩酌で酔えぬ話を持ち帰り

行きずりの会釈で無二の友が出来

大阪市 亀 井 円 女

食べているものの命に手を合わす

月一度亡母にまむしを供えます

損しても妥協や根まわし大嫌い

こだわりを楽しみながら炊くこんぶ

もぎ立てのトマトは嫁のクール便

横浜市 保田 絹子

ただいまの笑顔に文句ひっこめる
ちよつとだけおしいたいで食む珍味
シースルー似合わないよと決めないで
満月に月下美人のひとりごと

横浜市 近藤 道子

蛇取りの是非が問われる日本丸
故郷の空やっぱり青がよく似合う
追憶をゆつくりたどる遠花火
極楽と決めて乗りますお迎え車

横浜市 伊藤 ふみ

朝顔の進軍ラッパに見送られ
朝顔の支柱倒れて花ざかり
それなりに四季の花咲く狭い庭
さぎ草が咲いて一日笑い合う

横浜市 小野 句多留

嫁がせてさあ明日からはなにをする
縄暖簾おかえりなさいの客で混み
手の届く平行線の夫婦仲
ウォーキング唯黙々と黙々と

横浜市 豊田 羊子

老人の意地が優先席を避け
日の丸が掲がる新首相の地元
タンゴ弾く戦後のバイト娘に聞かせ
終戦をお伽話と聞くピアス

横浜市 北沢 街湖

スマートに撮ってください斜めから
結ばれた人へ片目はつぶります
聞き慣れた耳へイビキもセレナード
干し物へすつ飛ぶ速さ俄か雨

横浜市 金森 徳三

スーパの野菜見てから行く八百屋
ガーデニングなんて今さら庭いじり
平凡に暮れて夕餉のコップ酒
朝顔に元氣いただく古希の夏

横浜市 山本 為佐子

不況でもミネラル水が売れている
車椅子に乗って捻挫がはしゃいでる
検診は旅を終ってから受ける
元氣な日またも薬を忘れてる

横浜市 秋元 和可

蟻が山車曳くように行く蝶の羽
歯がきれい言われてからの笑い癖
コーヒーをおいしく入れるあなた好き
青空をキャンバスにして飛行機雲

横浜市 田中 笑子

一善を心掛けては席ゆずる
休日をつりー切符の小旅行
七夕の夢へ短冊小さすぎ
楽しさを越えて苦になる長電話

東京都 井上 つよし

故郷のトマト トマトの味がする

遠雷に風鈴鳴らず庭に出る

裏表こんがり焼けて歯が白い

ティーショット順番待ちに草むしり

東京都 清原 悦子

留守電がウソの代弁してくれる

この酒があなたの本音はかしてる

ライバルがいてこそ欲が出てきます

ひたむきな恋に大きな花が咲き

八王子市 井上 京一郎

近道をする気の路地が抜けられず

ままごとの子のやりとりのリアリティー

善意でも悪意でもないお節介

お茶の間の終のすみかとなる金魚

千葉県 大川 晩翠

書齋にトイレゆっくり本を読む

貧乏が生活習慣吹き飛ばす

自販機のボトリと落ちて蟬が飛ぶ

瑞穂の国ガードレールに稲を干す

静岡市 中西 雅

点滴を数えていつか寝息たて

星祭り願いかなうと信じてる

かたくなに献体望む老いの人

夏草の小さく活けて蕎麦の店

滋賀県 中 宗明

不意つかれ思わず本音吐かされる

ささやきもセクハラですとおどかさ

ブランドの服と小物で目立とうか

無口だと言った本人よくしゃべり

檀原市 西本 保夫

妻にある勇気がいざと言う時に

くよくよはしない妻には救われる

妻の勘口の動きを見て話す

絶望へ妻は何とか立ち向かう

京都市 高島 啓子

蝶々になつて娘が帰らない

いたずらをする子と隠居仲が良い

地藏盆 子供の数が減っている

祖母がした昔話を子にもする

京都府 前上 英一

脇役に徹した母の座り胼胝

ためらいの残る重たい靴を履く

初恋の愁いを含む人も老け

底を見た男度量が広くなる

京都市 勝山 美千代

孫の婚ばあちゃん財布軽くなる

ばあちゃんのクッション家を円くする

難しい程よい距離のお付き合い

お墓には身勝手ばかり言いに行き

今治市 塩路 よしみ

風鈴がからから笑う風の乱
平坦な道ではないぞかたつむり

心太つるり涼しい音で食べ

りサイクル出来ぬ足です夢がない

今治市 中村 好恵

許そうと決めると風が凩いでくる

風鈴があなたまかせの彩で鳴る

豊かさに慣れて忘れたありがた味

お世辞言えぬ人で気楽につき合える

愛媛県 中居 善信

金策へ小さな脈を当てにする

二十一世紀に米の重さを知るだろう

街に行った子が帰らない村朽ちる

吠えられて手頃な石を握りしめ

愛媛県 黒田 茂代

悔いぬよう生きる余りに耐え過ぎた

疲れきったところに布団暖かい

気付かず人から受けた恩いくつ

何も言わないでわたしの持ち時間

唐津市 樋口 輝夫

名月がくれたお酒の免罪符

拘置所に錬金術の鍔が浮き

直言をばらまいて寝るコップ酒

返す金いつでもいいと二度言われ

唐津市 井上 勝視

無駄があり夢あり家族温かい

しあわせを追いかけて過ぎて病んでいる

拒否権を再三使う妻元氣

仏さま大変ですネ生も死も

沖縄県 杉谷 カズエ

ひとり占め窓から見える上げ花火

言うなれば大正の塾琴や舞い

くさらない物を詰めたというパツク

料理下手いわしの頭ちぎれない

大阪府 星野 ひさ

楽しいがちとさびしくてひとり住む

露草が根性見せるガレキから

平凡と言う幸せよ鮭茶漬

見据えたらにらむイタチの親子づれ

東大阪府 今岡 貞人

やりとげた自信が歩幅広くする

札束の味は知らずにいる靴

耐えぬいて来ただけ世間広くなる

余生なおやる氣死ぬまで守りぬく

大阪府 尾崎 黄紅

花屋でもわからん花が売れている

なるようになれがうまあくいきました

嘘言っているのに澄んだ目をしてる

土掘って埋めてやります萎えた花

大阪府 奥野義夫

漢方に頼りきつてゐる母の腰
口喧嘩妻が黙っている寒さ
目の玉で憎きを作る人形師
言い負けて父のさびしい丸い背な

大阪市 松岡千恵子

この月の月に会いたく里帰り
もみじの手お墓のお顔もゴシゴシと
つばりを甘く許して世は狂う
ふるさとで待つてくれた蟬しぐれ

大阪市 榎本日の出

カルチャーで遊びも覚え風にのる
還暦から月日の早さ倍になり
波風を立たせる元氣秘めたまま
イヤリングはずすと疲れ飛び出した

堺市 梶本哲平

くらつくらつと真夏日俺を焼くつもり
薬抜いた眼窩目刺しがかわいそう
洗濯を洗い直されもうやめた
きれいな過ぎ孫あるひとと思えない

堺市 村上靖雄

同窓会がき大将も好々爺
職安で顔をあわせる元上司
修禪寺の鐘の音聞いて露天風呂
昼飯を旅立つ友と駅で食う

堺市 矢倉五月

お相手をする気の猪口を持つてくる
元氣ならそれでいいのと切る電話
仏壇の前で渋滞話など
習慣のように愚痴言う酒の量

八尾市 與田明

健康を呼ぶジョギングで膝痛め
老僧の法話かきけす蟬しぐれ
盆踊り千鳥足でも良いリズム
盆踊りそろいのゆかた年不詳

八尾市 井尻民子

わたくしに生涯不安つきまとい
片思いする人出来ておしやれする
白髪にほのかなしみただよわせ
淡く紅ひいてひと駅通い妻

八尾市 田中トシエ

虫干しをする自治体の裏帳簿
大安なんて信じない救急車
栗イガのぼつりと落ちる露天風呂
カードより診察券が多くなり

八尾市 鷺見章

誕生日祝われて我はベッドの上
ローレライ我がなつかしの歌をきく
たそがれの姿美し生駒山
格別の用もないのにひげをそる

あれこれと被つて夏帽子買わず
八尾市 平川幸枝

踏み込まず向こう三軒両隣
ブラウスが帆になりペダル踏む軽さ
熱くなる祭り神様降りてくる

八尾市 山本宏

新しい帽子をほめる冷たい目
夏のことみんな忘れた秋の浜
腰痛で地球をさげて歩いてる
この度も仲よくけんか旅に幕

藤井寺市 太田扶美代

番犬が死んだら二人つきりになる
お幸せになんて嘘は言えません
母さんのてるてる坊主はとても効く
子のひとりを想う今宵の二時三時

藤井寺市 岸本寿代

夏祭り今日こそ愛を打ちあけよ
静寂の信貴の思いを風にのせ
見栄はらず自然で行けば楽なもの
ありがとう ごめんなさいを言える子に

羽曳野市 芦田絢子

回転木馬空しい助走くり返す
胸のうち明かさないのも思いやり
釣橋でポーズ笑顔が凍りつく
知能指数だけは計ったことがない

羽曳野市 安芸田泰子

長尻の客が忘れた日除け帽
帰省子へ母の厨が活気づく
老犬といたわり合つて散歩道
人違い作つた笑顔持て余し

羽曳野市 森田四三郎

リストラで年功序列反故になり
年毎に増える病名また一つ
カラオケの淑女と唄う枯れすすき
ポイ捨てを睨みつけてる水溜り

羽曳野市 川口信子

チグハグに虫呼んでいる夏の恋
留守電に溜息一つ入れた人
占いにこつて迷いが多くなり
ふれあいの輪が倍になるボランテイア

羽曳野市 徳山みつこ

叩く気になれぬのろまなゴキブリだ
ばあちゃんバアチャンと蟻にたかられる
クローンのルーツ毛を吹く孫悟空
第三幕へ甘いセリフを書き足そう

富田林市 大橋鐘造

ずぶ濡れの父の背中を見て育ち
輪を抜けて本音を吐いた独り言
四畳半淋しい鬼が一人住む
シナリオに無かつた今日の虹の彩

富田林市 山原昭水

秋祭り父が自慢のちゃんこ鍋
お寺より骨董市が目当てです
母が好きなホウレン草の種を蒔く
同窓会 猿・下駄・馬も集まった

富田林市 中井アキ

素直にはなれそうにない低金利
雑草のような二男に期待する
峰打ちにしたい相手が病んでいる
はずみから背中掻き合う仲になり

河内長野市 印藤智子

食卓で夫と黙とう原爆忌
盆休み犬のホテルは超満員
チョコレートのお土産増える夏休み
行くあてもないが世界の天気見る

河内長野市 木太久正一

熊蟬に好かれた庭のライラック
役所から長寿ふれ愛乗車券
運転免許ばちばち終り考える
生きている限り八月めぐり来る

岸和田市 井伊東吉

年寄りラジオ体操休まない
間食をつい欲しくなる戦中派
この暑さ経も短いお寺さん
不人気をはね返せるか小淵さん

具塚市 吉道時子

一言が多くて墓穴掘っている
札状が届いてばれたプレゼント
宗次郎の笛 大地の声がする
つまらない物だと言って土産来る

泉佐野市 稲葉洋

生水や寝冷え五十の子に諭す
同期会 生存率は五割弱
病弱のあの子皆勤社会人
力むことないよ山坂越した身だ

和歌山県 坂東和代

補聴器をつければこんな蟬時雨
雑草は炎天猛暑なんのその
米櫃が満ちて夫がやさしくて
仲人が離婚したとの通知くる

和歌山県 岡本八重子

風鈴もうとうとしてる昼下がりに
ツバメの子みんな育って安堵する
こわかったけど かずら橋渡り終え
さし芽皆根付いてうれし鉢に上げ

和歌山県 村中悦男

同室の旅で思わぬ友がふえ
道具借り専業農家に教えられ
古希迎え明日の計をねり直す
声ひそめ話す中味はほんとかな

和歌山市 上地 忍

自慢する話もなく芋を煮る

四十年鬼とお多福演じてた

母さんの散歩を犬に頼んでる

口紅を引くと何とかさまになる

和歌山県 中村君枝

命の温さを愛してやまぬひと

相談に老母はすんなり預金帳

何匹が生き長らえる亀の孵化

一言が波紋となって打ち返す

和歌山県 中後清史

欲を捨て吃水線が軽くなる

表札に褪せた男がぶら下がる

水換えてやれば金魚の宙返り

台風の中よくよくの事らしい

和歌山市 福重美子

磯笛が聞こえて元氣海女の夏

鈍そうで分け前先に取ってはる

期待せぬ子供世話になる老後

鈍行で余生ゆっくり行く二人

和歌山市 上地 登美代

やり切れぬ不安無心にレース編む

一生を貫き通す嘘もある

一杯のコーヒがくれた妥協点

厄年に赤ちゃん生まれ厄祓い

和歌山市 和田美寿子

空襲日戦時を偲び水供養

茶柱が立つて気づいた誕生日

喜んであとついて来る影法師

強がりと言って孤独の武者振い

岡山県 国米きくゑ

一匹の蟻でも変えぬ主義を持つ

早々と嫁にスイツチ姑カルチャー

嫌なこと忘れる性で胃も丈夫

名幹事音痴の歌で盛りあげる

倉吉市 大下智子

不景気な顔は出来ない子が見てる

砂浜に書いた真実波の中

思い出の中の両親若いまま

夕焼けを見たくて浜に二人きり

鳥取市 谷岡清子

やき茄子にほっぺもゆるむ旨い飯

はためて客呼びよせる宝くじ

花たむけ碑と過去語る終戦日

低成長手も足も出ぬ虎の子よ

鳥取市 西尾敬之介

夏祭り天瓜粉塗って孫出番

爺さまをねずみ火花が追っかける

炎昼の海にクラゲの舞い踊る

初鮎を家族みんなで分けて食べ

鳥取市 夏目健一

どんな豪邸でも寝るのは一畳
匙投げた個性やっぱり捨てがたい

残り火に似合う小さな風が吹く
冷ややかにされる彼女がまだ読めぬ

鳥根県 槻谷仲子

朝顔をほめて明るい朝になり
同病相哀れみの立話

用無しが人の年金気にかける
卵にも賞味期限の虫眼鏡

鳥取市 有沢せつ子

ファミコンを止めお日様と遊ぼうよ
腕白が肩よせ犬に襲する

ダイエットやる気にさせて夏終る
母さんは赤飯の日をよく作る

鳥取県 平井栄翁

雨止んで傘一本が重くなる
義理の顔出して居眠りして帰る

食事毎野菜食わせる妻の愛
さわやかな妻のリードで老いが来ぬ

米子市 猪森スミエ

ウラン抱く土に落着く場所がない
杭打って土は他人の顔になる

長持ちが寝そべっている歳の奥
日の丸の梅干しにある指定席

米子市 門脇晶子

サルの会議やっぱりボスの言うままに

車座で遊んだ鳩も老いて来た
盆休み大の字になる安らぎよ

ゆずられた梯子なかなかのほれない

米子市 池尾保子

仏さま運ぶ胡瓜と茄子の馬

先祖の話 祖母が自慢に語り出す
生きて行くためのお金は離さない

手の届く位置で子供は育てたい

出雲市 加藤スズコ

巡る夏南部風鈴旅ごよみ

海の日政治番組荒れ模様
梅雨しきり姉におそわり梅漬ける

死線越え手を取り合った友が近く

出雲市 故名原純子

億光年ちいさいちいさい吾
流れ星銀河のいじめられっ子か

天の川極楽星があるとという
大火花遠い記憶の焼夷弾

出雲市 加藤要子

子の帰省あふれるほどの市場籠
さつと来て憂さを晴らしてさつと去ぬ

来客が重い話をおいて去に
朝顔の数をかぞえて二人の茶

島根県 菅田 かつ子

あれからはカレー見るのも恐ろしい
こんなときむっとしてるとなお暑い
水面から見えぬ深さが恐ろしい
恋してる腹から蛍燃えて見せ

吹田市 三浦 憩

思ひ出へ豊かな刻が舞い降りる
やる事が沸いて来そうな天高し
目指してる夢へわたしを解き放つ
我がままを正論と言う投書欄

高槻市 執行 稲子

素うどんの素朴さが好きうどん通
あこがれは高嶺の花で終りけり
コースにアルトで優先されてます
一喜一憂ほどよく塗れる友が欲し

川西市 田中 喜俊

気まぐれにしたスケッチが入賞す
古い二人あのそれこれでわかる日々
いつまでも母とあがめてくれる嫁
草とりも老いのスポーツと精を出す

伊丹市 桎谷 郁子

天の川星降る夜の相聞歌

角度変え失った言葉聞いてみる

灯明ゆれる筈(しがらみ)ゆれる三回忌

三回忌亡夫の日記を読んでいる

尼崎市の場 十四郎

てきぱきと捌けた今日の充実感
人間も蟻も走っている真夏
アトリエの乳房眩しく梅雨明ける
少年の汗美しい草野球

尼崎市 尾宮 弘治

再職の夫割り切ったヘルメット
母ごろろ知らず聞いてた子守唄
大の字でながめる空が素晴らし
農捨てた妻が動かぬミレーの絵

尼崎市 松下 比ろ志

缶蹴って迷いとはせば蟬しぐれ
坪庭に過ぎゆく夏の日の匂い
足音を消せば影まで薄くなる
老いたれどまだ少々のマグマあり

徳島県 安宅 美代子

へつぱりの腰がもの言う阿波踊り
愛抱いて無口に冬の川眠る
行く末の杖になりたいなられた
十五歳女が匂うから不安

今治市 越智 青園

変形も大事に取った初トマト
鉢植えになつて野草が媚びを売る
同席をしたばかりに罪を着る
ハミングの嫁の機嫌につり込まれ

秋田県 湊 修水

夏祭り地獄に変えた青酸魔

あの日からカレーライスが遠くなる

風鈴のひそとも鳴らず熱帯夜

富山県 神 川 協

わが青春ピーマンほどの空洞が

フルコース食べて空しい人と居る

太平洋を借景とする居間がある

静岡市 増 田 扶 美

浄土まで届けとばかり火を送る

暮敵と打つ音冴えて夜が更ける

箸下ろし夕餉賑わす冷奴

東京都 吉 田 土 風

実力が無ければポスト重荷なり

狭くとも恋人と住む部屋のよさ

太巻きを食べるように食べる子等

横浜市 平 達 也

もう一つ体が欲しい恋をする

諦めた人とまた会う胸騒ぎ

禁煙を誓う私の原爆忌

横浜市 川 島 良 子

釣りにゆく私描く人食べる人

不景気が公立校へ行けという

忙しい忙しいヨとうれしそう

横浜市 三 村 八重子

献血を終えたペダルを軽く踏む

システムキッチンになった代替り

口にして意外な硬さミニトマト

三重県 尾 崎 勤

分け前を量る物差しみんな持ち

出し過ぎた歯磨きに子も磨かされ

即席にしては味良く値も高い

倉敷市 家 守 政 子

故里の風こいしくて帰省する

財布を少しゆるめて心洗う旅

おもてなし立派にしすぎ苦情出る

倉敷市 森 本 文 子

他人の口戸が立てられず冷茶のむ

初盆に提灯の灯を高く吊る

思い出の胸で輝く恋堂

岡山県 土 居 ひでの

清く正しく生きて不況も避けられず

気紛れを装う大物かも知れぬ

知恵袋広げときどき陽に晒す

岡山市 清 水 金太郎

当選のバンザイ公約忘れさす

悲しい日地球よ早く回ってくれ

平和を叫んで武器売る国があり

香川県 向山治延

ダムに沈む我が家絵に書くおじいさん

ポツクリ寺詣った人が長病

明るさで苦境を越えた老い二人

鳴門市 八木芳水

ひと言が欲しい無言でいる鏡

夜の海使に残しの嘘捨てに

淋しさも同化してゆくかき氷

高知県 桑名孝雄

秋の空妻が浮き足立ってくる

うるめ一匹三百円の顔しとる

人柄で勝ったが舵は重そうな

今治市 村上久美子

生き下手と思う浅瀬でアップアップ

都会まで運べば長者過疎の土地

ハイハイと二つも返事して忘れ

今治市 渡邊伊津志

前向きに生きる瞳が生きてくる

優しくて心休まる雲の峰

波という神に漁師は身を委せ

愛媛県 宮本末子

人並の位置が住みよいくらしよい

気にしない厚化粧は日焼け止め

共産党伸びて大将お国入り

愛媛県 安野案山子

切れそうな自分を叱る宮仕え

本物をどきりとさせる模造品

相部屋とごろ寝で喋る湯治宿

福岡県 本田忠男

子ができて結婚不妊よりはまし

目印が撤去をされて恐わされ

介護保険掛金そっくり損しそう

唐津市 岩崎實

只今と荷物が先に着きました

原爆忌永久の平和の鐘をつく

夜の散歩じつくり虫の音にひたり

唐津市 宗弘

被爆者の声と聞くなり蟬の声

台風が来なけりや夏が締まらない

呆ける前彼は頓智の人でした

鳥取市 宮脇道子

小心がバブルを避けて胸なでた

ひまわりが背のびしながら咲いている

イヤリングつけて句会に出る私

鳥取市 徳田ひろ子

頑固なひとに添い遂げているがんこ

食卓を素朴にさせているカルテ

むきになり過ぎた後からの虚しさ

鳥取市 松 本 つね子

生きた道やがてゴールの坂がある

生き生きと心の笑みを絶やさない

鳥取県 橋 谷 静 江

み仏はみんな優しい顔してる

たった今抑えた腹の虫動く

腹の虫すこし風をあてようか

鳥取県 山 本 益 子

妥協する時期を失い一人ぼち

偶然の相合傘を邪推する

阿弥陀さまのさわやかな顔こころ吐く

鳥取県 藤 山 弘 子

新聞のおくやみ欄を真っ先に

ダイエットひと泳ぎから始めよう

ワゴン車で西瓜めざして里帰り

松江市 松 浦 登志子

鞭よりもあめにつられてやる気出す

低次元嫁にとっては一大事

粘り気の強い夫婦という宝

松江市 山 根 邦 代

散歩です糖尿病ではありません

熱帯夜のがれふるさと別天地

褒められてその気になった蛙の子

ライバルに拍手を送る負けおしみ

出雲市 岡 あきら

大ジョッキ汗の敵をとるように

取り立ての緑を盛って朝の膳

鳥根県 松 本 聖 子

逆縁の友へことばが見付からぬ

日が沈む明日もお日様出るだろう

盆トンボ仏間へ来ました蜂もきた

鳥根県 武 島 ちよえ

急く心 病夫なかなか放さない

少年を論す私は及び腰

医者の前洗い晒しのままでいる

益田市 岡 田 たけを

手加減で作る料理はオリジナル

プライドを捨てて老後の灯を点す

おばあさんと呼べば返事がかえらない

尼崎市 岩 倉 キク子

焼肉会匂いを嗅いでいる入れ歯

彩りもほどほど添えてこそその美味

はいいいえ簡単なのに決まらない

尼崎市 軸 丸 勝 巳

古時計征きて還らぬ兄の声

十指皆動かしてみる朝の床

夏休み妻久びさの大車輪

石仏も引越したいよ蟬時雨

尼崎市 清水 久美子

他人のため流す涙を貯めている
黙禱のシーンにはえが飛び回る
電流が走って妻にしたらしい

尼崎市 河津 正治

虹色の汗を夢見る共稼ぎ

真実を吐けば吐いたで叩かれる

八起きめは派手に翔びたい夏の夢

尼崎市 野瀬 昌子

親の殻ぬいで後ろも振り向かぬ

鴈治郎見てる隣が眠ってる

ゴキブリ団子殺生な事いいながら

西宮市 長谷川 淳

ストレスをお酒に溶かす縄暖簾

公害の中に汚職が芽生えてる

再会の涙乾かぬまま離陸

伊丹市 延寿庵 野鶴

老眼に景氣の流れ曇り出す

ポケットに地図をしのばせ花紀行

流木に阿弥陀を刻む老いの幸

神戸市 船津 とみ子

クーラーが夏病むように故障する

ガタガタと取り外されてクーラー死ぬ

少し破れたうちわを大事がる夏日

姫路市 服部 一典

あと数歩過去の手紙を焼却する
人生の双六上がった後の余白
輪になって軍歌を唄う走馬灯

兵庫県 安達 厚

図書よりも避暑うれしくてくる館

五時起きでかぼちやに出会う日々楽し

さざ波のけんかは妻の勝ちにする

兵庫県 北川 とみ子

やんわりと急所つかれた火の匂い

老いの身がぬくい話にすぐ負ける

恋のささやき地蔵こっそり聞いている

兵庫県 徳平 毬子

剪定のすんだ庭には蟬しぐれ

年金にボーナスほしい退職者

娘も嫁も同じと思えぬ我悲し

三田市 北野 哲男

しばらくはまだ生ぐさいクラス会

先ず黙禱一呼吸して乾杯に

カチ割りを頭にのせて燃える夏

和泉市 横山 捷也

中ジョッキ憂さ晴らすに小さすぎ

うち合わせなかった妻の変化球

ビール呑む素足の長い嫁という

泉佐野市

大工静子

西瓜なら甘さ控え目とは言わず

定年の教授勉強まだ勉強

多情の娘祖母に白無垢見せられず

東大阪市

北村賢子

酔うほどにちよっぴり女にもどる妻

反抗は慕うころのうらがえし

終戦日もう十日だけ早ければ

寝屋川市

井上すみれ

待ち人は見えずみどりの風と行く

格好つけ帰りは靴がぎこちない

ミンミンゼミ櫓の木好きで合唱し

枚方市

大昇隆広

いい人は心の底に清い川

廃村に今日も変わらぬ陽の恵み

投票にメニュー貧しい掲示板

岸和田市

亀井皎月

投資したレジャー施設が倒産し

縄文の男にかえるネックレス

季は巡り元気なボラが川に群れ

岸和田市

不破仁緑

試食した時はずっとも旨かった

肩書きが付いて一層暑い夏

自棄酒も半分は居るビヤホール

河内長野市

水谷正子

お袋に似てるのか席ゆずられる

甲子園の雨がほどなく家へも来

バッテリー抱き合う姿青春譜

羽曳野市

川田晋

善悪に厳しく世間狭く生き

情報が世間の不安かきたてる

気がつけば意外に丸い妻の背

海南市

谷口義男

決断を迫り鳴ってる発車ベル

折れる事無いが折れねば打開せぬ

空襲の地獄を知らぬ子と同居

羽曳野市

山本たけし

幽玄の世界へ浸る薪能

ミスひとつ愚痴るな泣くなでかい夢

医師が敷くレールの上の二十年

大阪市

立蔵信子

がんこさをあなたのよさと思ってる

口げんかするとあなたがよく見える

何度でもすわってみたいカフェテラス

大阪市

平井露芳

霜降りの肉もコピーで間に合わせ

時々メダカの学校見た泥鰌

草刈られ宿を追われたキリギリス

大阪市 鈴木 トヨ子

介護の娘へせめてにつこりして見せる

私なりのプライド持ってつつましく

小言聞く覚悟を決めてする電話

吹田市 西岡 豊

赤紙を抱いて玉音聞いた過去

八十が頬紅塗っておてもやん

ずけずけと互いに言うて串齧る

豊中市 みき わきみ

孫たちと話が合わぬ日本史

核家族孫を抱きたい日もあるが

図書館が併設されてた新病院

豊中市 岸田 知香子

再会の友楽しみに若作り

伸び切ったゴムのようだね下半身

友の犬借りて散歩の道連れに

高槻市 左右田 泰雄

決めかねて話をそらす婿えらび

ぬけめなくつばをおさえた契約書

プランから出発までの夢気分

高槻市 乙倉 武史

八月忌海底眠る戦友^{とも}偲ぶ

やんわりと妻の辛口的を射る

酒に口借りて小憎い事を言う

鳥取市 福島 庸二

引く事も考え攻めのプラン練る

薔薇の美は刺の痛さも包み込み

米子市 小塩 智加恵

ガムかむ子話し相手を探してる

こっそりと遺族年金たしかめる

出雲市 川島 和歌子

棚の上荷物で埋まるバスの旅

何事も詮策しない母の愛

島根県 福岡 博利

長生きは腹八分などと脅すなよ

水切りで活かすつもりの花バサミ

島根県 谷岡 ふみ

花咲いてにぎやか蝶も舞うてくれ

稲刈りを見ているだけの老いであり

千葉県 那賀島 雅子

手鏡の裏面で老いが嗤ってる

人生の縮図をのせて発車ベル

横浜市 荒井 広和

一枚の辞令が招く家庭不和

機械化が吞む職人の技心

横浜市 山下 省子

葬式で惜しい人だと言われたい

思い出を小出しに玉手箱のぞく

盆踊りにわか撫子かつ歩する
照りつける太陽日めくりやせている

横浜市 岡田芳江
横浜市 生坂サト子

脱ぎ捨てた靴に我が家の安堵感
夢路まで夫のいびきが入り込む

横浜市 山梨雅子

塾クラブ 家族旅行は無期延期

京都市 高村吉之助

眉つくる少女おんなになってゆく

枚方市 二宮紫鳳

白黒をつける男で敵多し

八尾市 高橋明子

元気かい元気元気と医者通い

生駒市 川端きぬ子

年金の暮らしに合ったおもてなし

尼崎市 内田美也子

ペン先に思いが走る夏見舞

人生は運がつきもの捨てぬ夢

東大阪市 松山隆
軍隊の復唱癖が物忘れ
愛別離苦 釈迦の道にはまだ遠い

池田市 木村一笛

お渡りはお舟踊りが威勢よく
再会は大阪弁で会いました

兵庫県 谷田多美子

スーパールの陰で小店は消えてゆく

兵庫県 高見末野

独り居の窓に雀が二羽で来る

兵庫県 中野とよ子

試合にて敵の妙技を盗みとる

香川県 松村輝夫

還暦へ手ごろな椅子がみつからぬ

とき 12月5日

とき 12月5日 ところ 伊予市市民会館 事前投

句 忽ち・田中新一 米・濱野奇童 障子・一色美穂子 健康・早川双鳥 削る・塩見草映 各題2句

10月30日締切 当日投句 広い・渡邊南奉 光・兵頭かほり 投句料 2000円 投句先 東京都国

立市富士見台2 36 NHK学園伊予市川柳大会事務局

麻生路郎の作品とその周辺

大家のいゝろ

(93)

橘 高 薫 風

福田山雨楼は、この年しばらく「川柳パイロット欄」なる初心者向け批評を試みていたが、東京へ転勤となったので、その後を受けて川上三太郎が「川柳指導講座」を引き受け、わが子、わが親、わが生活、わが友達のテーマの応募句の句評を担当する。

第三回の講評時「葎乃さんへ送る」と題した文章のプロローグは三太郎色横溢し、かつての六大家の親密ぶりが推測出来て興味深い。

葎乃さん――。

御無沙汰してます。いや本当は御無沙汰をしちやいないんです。毎年大阪へ行ってるんですから。今年だって行きました。ところがそっちへ行くと何時も市内で友だちに引懸っちゃまって――その中に大概麻生君もいます。そうして酔いしれた午前二時頃あなたに電話をかけます。

「何うも遅くなって――御無沙汰致しました皆さんおたっしゃですか、有難う」（一寸も文句になつたらん）

「え、有難う。御愉快らしいですね。そ

うがお倦きになつたら家へいらつしやい」（こんな新聞小説の返事みたいなんじゃない、もっと純粹の大阪弁で、たとえば花王バートミたいにするすると出て来るのである）

然し結局は矢張り御無沙汰です。大体電話で声だけで物を言つたり答えたりするのは、会話じやない。顔のない会話なんてものはジョセフィンベーカーの居ない黒ん坊みたいなものである。

「三太郎はんはお酒飲まんと実に詰らんアホみたいな人や――」

と平生あなたは仰言つてるそうですが、素面の僕でさえ「詰らんアホ」である、況や顔のない電話の胴間声だけに於ておや――で。

下らない事を長々と述べたようですが、これが今月の課題「わが生活」の前奏曲になるんです。要するに「電話」では僕の生活がありません。今月の「わが生活」の集句中、僕の「顔のない会話」のような句がありはしないでしょうか。いま恰度十九日の午前二時です。十八日の僕の句会から帰りに一寸一杯飲

って帰宅、風呂に入つて机に向つたんです。静かな夜で電燈が蠟燭みたいにジューツと音を立てて更けてゆくようです。

厚顔なる僕は更に麻生夫人に対して、あなたは川柳のおばさんであると言いたい。そしてまたあなた位「わが生活」を句にしている人はありません、と言いたい。

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

浴槽へずらり立つたは皆わが子

生活がこの位句になる事、その幾つかの苦業の層が重なつた迫力、それを今月の「わが生活」の投句者に伝えたかったので、これを書き始めたのです。但し更に

客に合やすレベルピアノのキイのごと

こんなコワイみたいなおばさんである事もついでに教えたいために。（句評省略）

こころぎよ私も蚊帳で起きている

と川柳のおばさんが言つてる通り、僕も亦諸君の句を見るために午前三時に近き深夜、虫声を耳に膝を揃えて独りペンを握っているのです。

驚馬に鞭ち子を学校へやる

麻生君のこの句を見た時、僕はここに生活を真向から川柳している人間に、麻生君が居たと沁々感じた事です。

川柳のおばさん――また電話をかけます。



大文字亡夫が好きな位置にいる

京都市 山海友熙

準優秀作 第一席

奇を衒うものなし石臼の重さ

和歌山市 牛尾 緑 良

推薦句

小池 しげお

絞つてもしほりきつても灰汁がでる

大ぜいの仲間と橋を架けている 内海 幸生
高橋 夕花

準優秀作 第二席

折鶴の溜息を聴く深い闇

鳥取県 岩 崎 みさ江

小島 蘭 幸

奇を衒うものなし石臼の重さ 牛尾 緑良
大文字亡夫が好きな位置にいる 山海 友熙

山海友熙

こんなに大きな夢を見させて頂き、思いがけないことで信じられるわけがありませんでした。意義深い初盆を迎え、当日、大文字登山口で供養の護摩を受け、静かに気持ちを整める。生涯忘れることのできない送り火の行事。句に思いを馳せながら、挫折しそうな日々を振り返り、諸先生、先輩、柳友の方々の温かい激励を頂戴致し、その上このような素晴らしい受賞、感謝の気持ちで一杯でございます。有難うございました。

柳 歴
平成三年一月
平成四年七月

川柳塔誌友
川柳塔同人
塔の会会員

吉岡 美房

一滴の水の中にもある宇宙
帯という農婦に戻る安堵感
西口いわゑ
小白金房子

板尾 岳人

風狂の果ての貌して野の一樹
折鶴の溜息を聴く深い闇
木本 朱夏
岩崎みさ江

河内 天笑

大猿の刺戟があつて生きられる
から元気出してるうちに調子付き
鈴木 公弘
宮本かりん

情と知へおめでとう

橘高 薫風

二賞の中間発表では、句の内容、表現共に多彩広範囲に取り上げられる候補句も、十名の選者から最後に上がってくる二句ずつとなると、まことに窮屈だ。選の対象は各賞十句ずつ、男女別、地方別に片寄りがあつて、今年度は東北、北陸、九州の作者は皆無である。

路郎賞山海友熙さんの句。

年々夫と見た大文字を今年は一人で見る。夫は送られる側にいるのだ。しかも、大の字の第二画のはじめ、一番高い所を占めて安らいだ顔でいるのが見える。生

平成十年度 川柳塔賞



社説書く人大臣になって欲し

西宮市 長谷川 淳

準優秀作 第一席

おかわりを言わぬ仏へ

てんこもり

今治市 野村 清美

推薦句 宮口 笛生

ひとときの至福本屋で本を選ぶ 田辺 鹿太
おかわりを言わぬ仏へてんこもり

準優秀作 第二席

真心を軽い私の武器にする

和歌山市 山根 めぐみ

川 島 諷云児

合鍵は一つ夫婦に距離はない 大野 蒼流
何時の間に一人になった縄電車 野村 清美

淳

この度、川柳塔賞が戴けるとのこと、本当に有難うございませう。全く夢のような気が致します。これと言いますのも、十年前には川柳の「せ」も分からなかった私をご指導下さった橘高薫風、片岡つとむ、永田晩風の諸先生ならびに周囲の多くの同人の方々や柳友の皆さまのお蔭と深く感謝しております。これからもよろしくお導き下さいませようお願いします。

柳 歴

平成二年 「朝日なにお柳壇に投句

平成五年 「あかつき川柳勉強の会」入会

平成六年 朝日カルチャー川柳入門受講

淳 平成十年 川柳塔社誌友

長谷川

前から誰よりも上にいるのが好きな人だったから。

川柳塔賞の長谷川淳さんの句。

科学文明の発達で世界は複雑混乱するばかりだ。かつて新聞は一日一題で足りていた社説も、今は二つ三つと取り上げられる。なるほどと頷けるものばかりだ。この筆者のような政治家が、論説通りの政治を実現すれば、世界はずい分と良くなる。

今、庶民のいらいらは極限にあるのだ。二賞は情と知の句が占めた。路郎先生からの路線を引き継ぐ成果である。

各賞受賞の皆さんおめでとう。来年度から選考の形が変わります。

福本 英子

可も不可もなく定位置に夫婦箸 吉村さち子
汗知らぬ金で一生棒に振る 大西 文次

榎本 吐来

探し物から一日が動き出す 和泉見早子
社説書く人大臣になって欲し 長谷川 淳

小林 由多香

過去は過去姑にやさしくしてあげる

真心を軽い私の武器にする 森安夢之助
山根めぐみ

受賞作品

富田 林市 池 森 子



池 森 子

罪状もなく身の丈ほどの我が塔よ
寒椿 わたしも両親も離婚
一人暮らしの首に吊り革温かし
万策が尽きて白さを売ることに
昨行で転んでからの遺書がない

評 年間を通じての抜群の句の塊から池森子さんを本賞に決めます。塔の大きな存在です。更なるご精進を願って止みません。
桜井千秀さんの喪主の席、ゼロをつなぐ鎖こそ川柳と思わせます。
三宅保州さんの真実をふまえた語り口は高度のおかしみです。
木本朱夏さんの句は最近地味になりました。ほんものの句いす。
和歌山は凄いですね。
川上富湖さんは、普通を句にしている非凡です。輝いています。
政岡日枝子さんは人間を直視しています、鋭くて熟れた表現です。
とにかく驚きました。これはもう非常に怖い選でした。

(八木 千代)

川柳という一つの器の中で、川柳に使える時間と質を追究しながら懸命に生きてる自分を想うとき、切ないほどの一途さに、我れながら感動することがあります。そんな一途さに頂いた渺湖賞の受賞だと大変嬉しく思います。これからも「一句入魂」厳しくて優しい視点と感性を磨きながら川柳の海へ空へと漂泊したいものです。ありがとうございました。

準賞作品

和歌山市 桜井 千 秀

喪主の席これが最後の妻の席
つないだらゼロも鎖になるだろう
砂埃立って広場は人嫌い
水草の靡く狭間に潜みまし

佳作

女には髪振り乱す髪がある
奥の手を使うと喉に引つ掛かる
旅人として黙祷の列につく
冬野菜ほのかに甘し母はなし
水平線の縫い目で水が洩れている
茹で卵あなたは何時の世も偉い
むき合えばどちらかが持つ紙礫
合わせ鏡に映る後ろ首の油断

柳 歴

一九八九年 川柳塔賞
一九九四年 路郎賞準優秀作第二席
一九九八年一月 「川柳公論」 蒼塔
賞作家賞

受賞作品

倉敷市 小野 克枝



小野 克枝

結び目の中に答があるだろう
天才と言われた人の小さい墓
炎の橋を渡り終えると駅に着く
人生の午後を考えまいとする
雑木林を抜けると哀しみも抜ける

評 ペテラン作家小野克枝さんは今回は群を抜く最高
点で茴香の花賞にいただきました。中でも巻頭二句とい
う栄光。それは川柳に対する不動の情熱と精進でありま
しょう。僅か、五・七・五の短詩型でかくも骨組の整っ
た姿には絶句いたしました。準賞の方もそれぞれ同格で
優秀がありません。女性のコーナーらしく今回は七名の
作家で賑やかに飾らせていただきました。(宮西 弥生)

準賞作品

名も知らぬ花がはげます花の色
雑学をたつぷり吸っている軍手
ケーキ屋の苺の旬は何時だろう
一歩引くことも覚えた古い靴
足跡のゆがんだ所で得た知識
沈黙考石もいつしか息をする
花が散るプライドひとつずつすてる

米子市 木村 富美子
和歌山市 川上 富湖
藤井寺市 高田 美代子
大阪市 三浦 千津子
熊本市 永田 俊子
西宮市 奥田 みつ子
岡山県 矢内 寿恵子

昭和六十二年の新年号より晴れやかに香り始めた、女
性だけのオアシスとも言うべき「茴香の花賞」受賞の栄
に浴し喜びを隠し切れません。薫風主幹初め諸先生方、
又、当地の先輩諸子のような様方の温かい御指導のお陰と
感謝の念で一ばいでございます。これを機に精進を重ね
牛歩でいいから生きた証となる「命の一句」を残すべく
頑張りたいと思います。有難うございました。

柳 歴
昭和四十二年 川柳たましま社へ入会
昭和四十三年 川柳道場(水粉千翁先
生主宰)
昭和四十四年頃 川柳塔社誌友
昭和四十八年頃 川柳塔社同人 今日に至る
昭和五十八年 岡山県文学選奨「川柳
の部」受賞

受賞作品

藤井寺市 高田 美代子

仲直りパンがふつくら焼けました

評 今回は両名が選んだ各五句のうち、なんと三句までが一致したにはおどろきました。

受賞句は、パンづくりに託して、ほのぼのとした夫婦愛が優れた作品となつて結晶し、正子さんの準賞句は、エスプリのきいた秀逸な表現、そしてたず子さんは、余生をユーモラスに描いています。

(田中 正坊)

ちよつとしたことで離婚となるケースがこのごろ多いようですが、この奥さまはお料理はうまいし、頭の切り換えも早い。平易な言葉で省略のきいた見事な作品に脱帽。このたびは、女性群が上位を占めました。準賞の二句もすばらしい作品です。

(河内 月子)



高田 美代子

たった十七音字の中から最大の表現が出来る。人間の句いをぶんぶんさせて一句の中に私がい。春夏秋冬をこよなく愛しながら自然体で仕上げる、そんな川柳に何時の間にか浸ってしまったようです。此の度は皆様方からの贈りものとして一路賞を戴きます事は、言葉を大切にきてきてよかったと嬉しく思います。仲々優等生になれない私です。が心より御礼申し上げます、有難うございました。

柳 歴
昭和四十八年
平成三年
平成十年現在

川柳を始める
川柳塔賞準優秀作
第一席受賞
川柳塔社理事
川柳藤井寺副会長

準賞作品

米子市 鷺 見 正子

プライドを捨てたらただのおばさんだ

西宮市 門 谷 たず子

余生とや陽気に生きて歌おどり

候補作品

名水を汲んで気付いた山の愛 福田 登美

風雪になじんだ傘が干してある 上田 俊路

求め合うひとつはあろう欠け茶碗 一本 勇太

右側をいつでも歩いてくれる夫 吉川 寿美

受賞作品

尼崎市 長浜澄子

断ち切ったはずの心が揺れて秋

評 受賞作、準賞作共外見からは窺い知れない胸の内を表白していて共感する。人は誰しも心に密室があり、その中に閉じ籠っているも一人の自分が何かを企んだり、或は扱いかねる存在になったりする。(宮園射月芳)

秋風は魔物、心にけじめをつけたことを、また蘇らせ心をゆすることになったのは秋風のせいでしょうね。心のかかぶりが鮮やかに画かれています。準賞の句、妖しい策が練られようというのか？ (春城武庫坊)

澄子さんの句は、すらっと無理のない表現で、女性らしい心の揺れを句にされ共感呼びます。失った人に心の整理は簡単につけられるはずはありません。準賞・候補作品ともどもおめでとうございます。(奥田みつ子)



長浜 澄子

「各地柳壇賞おめでとう」の葉書を何度も読み返し、嘘でしようと思直しました。私が川柳を初めたのは十年前、前娘が大学受験目前で落ち着かぬ毎日、そんな時現尾浜会長からのお誘いに軽い軽い気持ちで始めたものの、日を追って迷い悩みの作句に一区切つける時期かなと考えていた矢先だけに驚いています。この機を励みに一から始めねばと考えています。本当にありがとうございます。

柳歴

昭和六十三年 尼崎尾浜句会へ投句
平成二年 川柳塔水煙抄欄へ投句
平成九年 川柳塔社同人

準賞作品

米子市 林 荒介

鍵をかけた部屋で火薬を混ぜている

候補作品

七十のロマン電池を入れ替える 原 章峰

生き延びる嘘の数だけ手を洗う 楠 昭子

針のない時計をもつて夢買いに 西出 楓楽

言い分は聞かずに花は散っていく 岡 あきら

沙湖抄

八木千代選

空は公平 一人に青いわけじゃない
目を瞑るだけの柩の名演技
一億円でも売らぬわたしの花畑
虹の立つあたりブランコ振り切れる
今宵こそ盗んでやろうグリの髭
大好きよ明日が歪んでしまうほど
魂がころんで私が起きる
滝壺を思わす如きクリスタル
朝顔のリズムで皿に目玉焼き
峰は仰ぐもので越そうと思わない
前へ前へ出口近くに立っている
汗をかくことも真夏の仕事なり
真実を提げてうろうろするでない
砂時計だから過ごすサラサラ落ちる
女ゆらり風と熱交換をする
よく転ぶ私に徳がないようだ
風の便りを見たものはまだ居ない
繕ってばかり頷くだけの首
出発に花一輪の重いこと
マグカップわたしの一番好きな場所

西宮市	奥田みつ子	和歌山市	桜井 千秀	和歌山市	鳥取県	新家 完司	和歌山市	古久保和子	同	大宮市	新井 朋子	島根県	松本 文子	海田市	三宅 保州	東京都	佐藤 季穎	米子市	鷺見 正子	藤井寺市	高田美代子	鳥取県	鈴木 公弘	岡山県	小林 妻子	西宮市	牧瀬富喜子	富田林市	池 森子	八尾市	高橋 夕花	松江市	川本 畔	和歌山市	川上 富湖	鳥取市	坂田和歌子	藤井寺市	太田扶美代
-----	-------	------	-------	------	-----	-------	------	-------	---	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	------	-----	-------	-----	------	------	-------	-----	-------	------	-------

こんなにも重い墓石 要らんわい
八月の焦土にいつか青い蟬
花の季のうつろい蓮も描けぬまま
負け方を知った男の手の置き場
あまり我を通すと小さくなる影絵
弱法師ながらも風を読んでみる
楽しくて便利お金の要る社会
飛ぶように売れるハートの内視鏡
連れ舞いの足が時々棒になる
ひまわりの腋花 墓が九基ある
丸を描くつもり四角のもののおもい
蒸し暑い日が続く毒カレー以後
パンジーにまでアカンベーされている
変わってはほしくないものだけ変わる
空っぽになった頭の骨拾う
ひまわりの大群海を向いて立つ
わたくしは蜥蜴の背も発光す
母らしいやさしさがある唐がらし
マクドナルド日本の舌をなめんなよ
夾竹桃の白は異端者かも知れぬ
飼われているなどと猫思っている
コスモスを揺らす微風が存在感
昼の月みんな勝手なことをする
傾くと零れてしまう友の数
集まって食べる何でも良いのです
引き分けた赤もみどりも美しい

青森市	漆戸凡々子	和歌山市	野々 圭子	八尾市	高杉 千歩	松原市	小池しげお	尼崎市	長浜 澄子	和歌山市	牛尾 緑良	出雲市	竹治ちかし	唐津市	山門 幸夫	米子市	政岡日枝子	鳥取市	武田 帆雀	寝屋川市	森 茜	和歌山市	川上 大輪	横浜市	菱田 満秋	鳥取市	石上 悦子	兵庫県	大谷幸次郎	和歌山市	木本 朱夏	羽曳野市	吉川 寿美	砂川市	大橋 政良	豊中市	田中 正坊	和歌山市	福本 英子	大阪市	本間満津子	弘前市	斉藤 島	倉吉市	野口 節子	枚方市	海老池 洋	吹田市	山本希久子	米子市	白根 ふみ
-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-----	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

草花と同じ視線の人が好き
 陽が沈むもう譲っても良い境地
 ひと皮ずつ剥けてはなくなるってくる
 言うことをきかぬ心に業煮やす
 信念の如くに膝を崩さない
 樹の陰の椅子に未来を座らせる
 ワンルーム玉手箱かもしれないぞ
 近くいてみ仏さまの眼が怖い
 守るものあって谷底歩いてる
 ご先祖に習って蒔いた柿の種
 社長のリード ウハウハか倒産か
 大賀蓮の池に源氏の君がいる
 寝ていても汗が出るほど元気元気
 蝶はうっかり身の上話する
 目を閉じて移る話題を聞いている
 鬱の字を辞書で確かめている鬱
 戦争も真の平和も尚知らず
 悲しみすぎてお便りが書けませぬ
 煩惱の種かな知らぬ間に生える
 まだ着地 考えてない子のジャンプ
 分かっではもらえぬ真意秋の風
 みぞおちの痛みまだまだ続きそう
 幸せの坂は一気に登れない
 昔々憧れていた門構え
 引き潮が続く自分を見直そう
 指先に力のこもるいい握手

鳥取県	谷口	次男
羽曳野市	川田	晋
鳥取市	徳田ひろ子	
横浜市	山下	省子
鳥取県	上田	俊路
富田林市	藤田	泰子
和歌山市	楠見	章子
寝屋川市	井上すみれ	
富田林市	中井	アキ
米子市	野坂	なみ
寝屋川市	江口	度
米子市	林	瑞枝
鳥取県	土橋	螢
今治市	塩路よしみ	
鳥取県	橋本多哥由	
美面市	岩津ようじ	
唐津市	井上	勝視
米子市	茂理	高代
鳥取県	乾	隆風
今治市	矢野	佳雲
鳥取市	春木圭一郎	
米子市	石垣	花子
羽曳野市	田中	透太
米子市	光井	玲子
寝屋川市	籠島	恵子
西宮市	西口いわゑ	

有頂天になり両耳を捨てている
 誰も居ぬところであうたう愛唱歌
 不老薬残り時間に間に合わぬ
 いつまでの夫婦と思う傘をさす
 ひと人を人と思わぬ怖さかな
 人生の死角に咲かす赤い花
 スピードを落とす狭霧の晴れるまで
 紙おむつ世話になるかも知れないな
 一言で揺れる私は秋桜
 つるつると未来まで呑む心太
 ずぶ濡れにもう急がない木偶の道
 放心の日から蜚はねむれない
 猫的な生活からの怠けグセ
 淵まではあぶない方へ行ってみる
 相手から小さくノーを聞く風
 遠景はみんな桃源郷に見える
 首タテに振って疼きがとまらない
 自立するためにシルバーカーを押す
 丸い愛探す旅です無駄じゃない
 足跡の薄さつらいが僕のもの
 はずれくじもう慢性の夫婦仲
 光りもの全部は少しした終電車
 よう伸びるこの木天まで登る気か
 嘘なのね嘘のまんまで眠らせて
 笑い袋つくろいながら老いの坂
 蜘蛛の糸いつも下がると限らない

岡山県	富坂	志重
鳥取市	植田	一京
高槻市	乙倉	武史
高槻市	川島諷云児	
寝屋川市	平松かすみ	
出雲市	園山多賀子	
香川県	木村あきら	
八尾市	大内	朝子
寝屋川市	坂上	高栄
和歌山市	山根めぐみ	
横浜市	清水	潮華
日立市	加藤	権悟
八王子市	播本	充子
大阪市	立蔵	信子
寝屋川市	太田とし子	
米子市	青戸	田鶴
枚方市	濱田	良知
鳥取県	さえきやえ	
鳥取県	西原	艶子
八戸市	島田	昭治
京都市	都倉	求芽
大阪市	津守	柳伸
八尾市	吉村	一風
鳥取県	石谷美恵子	
岡山県	矢内寿恵子	
富田林市	大橋	鐘造

迷路から早く出て来いかつむり

茶毘おわる無口 泰山木の花

妻の掌の広さ踊るに丁度よい

かくれんぼ細い窓から鬼がくる

父母の風と感じる時がある

年輪の歪みは私にもあろう

窓全開 消化不良の通り雨

角砂糖ポトリと落とす外の雨

花と水あげてお願いばかりする

小引き出したくさん持って聞いてくれ

他人だからやさしく甘くしてやれる

陽が落ちるいのちが眠る木馬たち

葉書なら愚痴も短く書いてすむ

ローテーションを変えて軌道に乗ってくる

とばされた帽子に風が味方する

沙羅の木を揚げば亡父の声がする

好きなのよ線香花火の明るさが

絵日記に綴じこんである蟬時雨

うっかりを集めて出来た夜の膳

花言葉覚えてからの弾みぐせ

終身雇用 擬餌には弱い男たち

姥桜だつて見頃はありました

ポップスを聞いても感じなくなつた

経験の結果目測にも自信

凌ぎ癖 戦後を生きて来た自信

過去形にすっかり変えた古い傷

弘前市 中山 雅城

熊本県 高野 宵草

松原市 玉置 重人

弘前市 一戸 ツネ

河内長野市 水谷 正子

和泉市 中川 楓

川崎市 和泉見早子

茨木市 藤井 正雄

米子市 木村富美子

大阪市 小糸 昭子

堺市 志田 千代

奈良県 鍛原 千里

唐津市 仁部 四郎

貝塚市 池田寿美子

高槻市 左右田泰雄

富田林市 片岡智恵子

鳥取市 富山横柳樹

泉佐野市 稲葉 洋

岡山市 福重 美子

岡山県 山本 玉恵

吹田市 石原 靖巳

倉吉市 米田 幸子

鳥取県 田村きみ子

和歌山市 宮口 克子

倉敷市 田辺 灸六

鳴門市 八木 芳水

発言を許してくれた議長席

友の文 こまめに故郷の浮き沈み

反応が一步後れて蹴っている

有名になれば名刺は要りません

黍畠 見張りお岩木山まかせ

わが妻に家事見習いを強いられる

喜寿の身へ電池交換やってます

会合を重ねて耳をふとらせる

名と金を捨てて素顔をとりもどす

皮下脂肪なんて知らない戦中派

裸一貫ここが私の始発駅

老いという言葉が嫌い字が嫌い

熱さめて気付いた事が多すぎる

正論を正論とした日の若さ

タイムカプセル煙の出ない浦島太郎

八月十五日 黙祷の中の誕生日

太陽が鏡の中に満ちた日よ

鳥取県 乾 喜代志

米子市 小塩智加恵

鳥取県 西川 和子

黒石市 相馬 一花

弘前市 葎苗 果林

唐津市 岩崎 實

吹田市 西岡 豊

米子市 門脇 晶子

和歌山市 青枝 鉄治

唐津市 市丸 晴翠

倉敷市 井上 富子

横浜市 山本為佐子

羽曳野市 酒井 一壺

札幌市 三浦 強一

八尾市 宮崎シマ子

唐津市 浜本久仁於

岡山市 川端 柳子

奥田みつ子さんの青空は手きびしいけれど真実です。勿論自分に放っているに違いない言葉で、思ひ上がりは慎もうと作者らしい表白です。空だつて許容量があります。けれど空の青さに救われるのもまた真。少しだけは甘えましょうか。桜井千秀さんの演技技と言わざるを得ない気持ちしがじんじん沁みてきます。凍りつくような辛い瞬間はまるで奇術だと思えません。目を瞑る、それだけの演技で幽明の境を越えてしまったのです。千秀さんの名演技の眩きは絶対のものです。新家完司さんの花畑は男にも女にとっても守るべき神域でしょう。売らないと書かれた句主の気が伝わります。心の花畑に咲き続ける花々を見せて頂く日もあろうかと思ひます。

水煙抄

秀句鑑賞

—9月号から

高橋 夕花

バツイチが自己紹介へ悪びれず

田中 笑子

そうです。バツイチを、ハンデにすることは
ありません。他人の目を気にせず新しい倅
せを求めて下さい。スカッとして気持ちのよ
い句です！

パン屑をやつた鳩の方へ撒き

焼け過ぎたパンを取り込む妻の皿

井上 つよし

作者の温かいお人がならねばこそ、おくさ
まの深いふかい愛、句をとおしてご夫婦の、
ありかたが見えてきました！

奥さん美人子が秀才で許せない

藤田 芳郎

許せない、と言いきれる程相手はすばらし
い環境です。多分友人のことでしょうか。そ
の裏の羨望、友情も含めて揶揄している男の
句。女性ならそうはいかないのです。

午後三時人魚になつていく私

川島 良子

真夏のいちばん暑い刻、思考もゼロになり
ふと人魚に涼を求め空想の世界に引きこまれ
ていった良子さん、ロマンチックですね。一
抹の涼を頂きました。

ひまわりがでかい目で呼ぶオイ水

西村 りつえ

自慢げに夏を誇っていたひまわりも水不足
の暑さに身のおきどころがありません。すべ
て漫画的で楽しい。雨乞いでもしませうか。

お化粧をしたら表へ出たくなり

中澤 伽羅

家事の汗を洗いながして、メーキャップ、
たちまち美しくなった顔。主婦を脱いで表へ
でて人に会いたい！可愛い女ごころ。

中一を見上げて叱る強い母

家守 政子

親の背丈を越えても考え方なす事は子ども
自分より大きい子を見上げながら叱るお母さ
んはご立派、若い樹に惜しみなく拍手を。
道具屋に見せると捨ててあげましよう

山梨 雅子

小父さん！これは大へん高価なものですよ
価値観の違いかそれとも時代のずれか、捨て
るなら当方で捨てますわ、と言いたいところ。

羽目外す事でバランスとっている

大下 智子

普段余程きびしいお仕事でも。お酒を飲ん
だりカラオケ、また高価な物を買って自分を
慰める。羽目とバランス、よく効いています。
みけんにしわよせず生きましよう余生

北村 賢子

泣いたり争ったりはもうご免。余生なんて
すもの。楽しく美しく鏡に向かってニコリ。
人形の正直すぎる瞳がこわい

田辺 鹿太

人形の黒い瞳にあうとハッとしますね。人
間正直に生きてても人形の瞳にかいません。
こわがらずに愛してやって下さい。

満ち足りてからは読めない風の向き

今岡 貞人

満ち足りて感謝の日々、どんな風が吹こう
と気にしない。しかし羅漢さんのようにはい
かない、自衛も必要です。じつくりと風をみ
つめて下さい。おおらかな余生の句です。

人間味出せばこの川渡れない

吉村 さち子

人間味で接するとこのきびしい川を渡れな
い。やさしいさち子さんはジレンマに苦しん
でおられる。時には人間味から脱出して自分
なりの川を渡って下さい。ちょっと深刻な句。

尚香のむ

西出楓楽選

許す気の胸に涼風ごときもの
家族つていいなまるごと西瓜買う
失せ物を探す余生の旅つづく
疲れると元氣な姉に電話する
老眼鏡かけて外して忙しい
悪口を言わぬときめてむずがゆい
追伸はやめてきつぱり封をする
ダウンしてそれから見えて来た家族
価値観の違いで変わる空の青
若いつて何時もお腹がすいている
キリトリ線もう振り向かぬ事にする
振り向けば作り笑いは消えている
謎解いて生きてゆくのが面白い
情熱の賞味期限が切れそうだ
ほんとうは淋しがりのカスミ草
パラソルを回し過ぎたか逃げた夢
見ていると沖の方から来るあした
年金で猫をぶくぶく太らせる
一石を投げて騒ぎを倍にする

和泉市 中川 楓
あきの市 佐藤 季穎
西宮市 門谷たず子
和歌山市 上地 忍
鳥取県 西原 艶子
横浜市 山本為佐子
尼崎市 春城 年代
鳥取県 西川 和子
尼崎市 長浜 澄子
和歌山市 木本 朱夏
西宮市 牧渕富喜子
鳥取市 福田 登美
鳥取市 植田 一京
鳥取市 岸本 孝子
和歌山市 吉村さち子
熊本市 永田 俊子
米子市 鷺見 正子
富田林市 藤田 泰子
倉吉市 米田 幸子

ときめきの橋は今でも揺れている
変身願望まず錨広き帽子購う
試着して氣にいらぬのは値段だけ
芸術になろうなろうと秋の雲
かたつむりあれで慌てているのかも
袋縫いどなたも傷をつけぬよう
真っ白い日傘頼りにされている
美しき人美しい嘘をつく
落しふた言うて聞かせることがある
抱くようにして持ち歩く内緒のかたち
わたしさえ我慢すればと抱くマグマ
ポナナスを待つてチラシをためている
人間の喜怒哀楽に酒がある
手を繋いで下さい橋がよく揺れる
補聴器が噂話を聞きたがる
雑巾を白くして見る空の青
心揺らぐ時はお花に水をやる
神様のタクト好きないように振られ
相手には不足はないが強過ぎた
だまされたような顔して生きている
ゴキブリが出るとフアイトが湧くなんて
青春を埋めた浜辺がみつからぬ
病床で計画だけは練っている
慎重になって墓穴を掘っている
半端には出来ない釘がまた曲がり
正直な人だ仮面をおいて行く

富田林市 中井 アキ
大阪市 三浦千津子
大阪府 大森 年子
和歌山市 川上 富湖
米子市 白根 ふみ
和歌山市 福井 桂香
大阪市 神夏磯典子
富田林市 片岡智恵子
羽曳野市 吉川 寿美
米子市 政岡日枝子
八尾市 大内 朝子
横浜市 福田由美子
西宮市 西口いわゑ
和歌山市 福本 英子
松江市 佐野木みえ
大阪市 松尾柳右子
藤井寺市 太田扶美代
芦屋市 黒田 能子
寝屋川市 坂上 高栄
寝屋川市 太田とし子
和歌山市 古久保和子
米子市 木村富美子
和歌山市 福重 美子
八王子市 播本 充子
大阪市 日阪 秋子
岡山県 大石あすなろ

言い足らぬ言葉が雨の音になる
イベントへ人の流れについてゆく
曇天も晴天もある胸の中

どちらかが序で墓参と美術展

ひび割れた愛のボンドが見付からぬ

言っておかねばならぬ言葉と旅続く

夢があり手ちかに辞書が離せない

言葉尻ばかりしておくも思いやり

辛口の批評が時に心地よい

通勤の車で朝の顔になる

無口な人のその一言が持つ重さ

スパイスをきかせて謳歌する余生

長雨に心の乾き癒やされず

予約した席のとなりに倅せが

道草のあれから磁石狂い出し

逆ろうた父の背幅の広いこと

血走った目には何にもうつらない

宿題を解く子も親も頭痛する

しきたりもモラルも要らぬ新世代

健康美あなたの素顔に惚れました

忘れてならぬメモしたメモを探すはめ

丁寧な挨拶遠いひとになり

お財布の都合で行こかやめとこか

涙腺がゆるみっぱなしのよい話

また今日もせんならん事たんとある

誰よりも猪口一ぱいが力呉れ

岡山県 山本 玉恵

川崎市 和泉見早子

米子市 中井 ゆき

八尾市 村上ミツ子

横浜市 豊田 羊子

吹田市 山本希久子

米子市 林 瑞枝

奈良県 鍛原 千里

西宮市 奥田みつ子

倉敷市 撰 よしこ

大阪市 本間満津子

横浜市 近藤 道子

横浜市 三村八重子

八尾市 高橋 夕花

米子市 石垣 花子

岡山県 福原 悦子

岡山県 富坂 志重

岡山県 森 茜

岡山県 矢内寿恵子

倉敷市 家守 政子

倉吉市 淡路ゆり子

鳥取県 石谷美恵子

羽曳野市 徳山みつこ

大阪市 板東 倫子

和歌山市 玉置 当代

大阪市 渡部さと美

骨量の検査を受ける古希になる

煎じ薬匂う思い出母の部屋

たとう紙の中に明治の母がいる

橋のない川で人間泳いでる

エコノミストも株で失敗したと言ひ

ワンルームの窓が気になる物干し場

これだけは言うてはならぬ人の道

蜂にすりや正当防衛だっただけ

わたくしの邪心をとくすカキ氷

買物の成果コーヒー屋で競い

寝る前の薬に朝を保証され

枯れてなお人刺すバラの性哀し

すつとんきような声もきこえる夏休み

神戸市 船津とみ子

寝屋川市 堀江 光子

鳥取県 土橋 睦子

河内長野市 植村 喜代

横浜市 長島亜希子

和歌山市 楠見 章子

藤井寺市 高田美代子

大阪市 大川 道子

八尾市 宮崎シマ子

横浜市 山梨 雅子

横浜市 清水 潮華

羽曳野市 芦田 絢子

吹田市 栗谷 春子

楓さんの句―人を許すことの難しさが巧みに詠まれている。

完全に許し得られれば涼風が立つのだが、ごときであるところに、作者の割り切れない胸のうちが垣間見える。下五の使い方がこれ以上ないほどの的確。季頷さんの句―核家族しかも少子化で、西瓜を丸ごと買える家庭はなかなかない。こんな家族の中にいる親は「嫉は学校でお願いします」などとは、間違っても言わないだろう。「いいな」がこの句に奥行を作っている。

たずさんの句―もうこれでよいと満足したところで、進歩はなくなる。自分自身に妥協することのない厳しさが「失せ物を探す」で、余すところなく表現されている。作者の前向きな生き方がうれしい。忍さんの句―妹の電話の声の調子から察し、姉さんはいつもさり気なく、元気づけてくれているのかも知れない。親や子供たちと、また一味違った姉妹のいい味の関係が、読み手の心にしみじみ響いてくる。

しばらく

三宅不朽選



しば出すまではしばらく泳がせる
美しい嘘にしばらく騙される
水鏡しばらく亡母と対話する
アルバムの中でしばらく若返る
好きだからしばらく逢わぬことにする
しばらくは弱火で煮込む豆の艶
しばらくと待たせ窓口忘れてる
トンネルを抜けてしばらく続く風
しばらくの声が大きい電話口
しばらくと言われしばらく考える
しばらくが満期除隊まで勤務
しばらくはカレーの話遠ざける
買いかぶりしばらく出方見極める
しばらくは無職もいいか羽繕い
しばらくのシンボウ耳にたこができ
そういえばしばらく街へ出ていない
言い勝ってしばらく胸に抱く傷み
久しぶり君は二十の魔女だった
素敵な人をしばらくここで見ていよう
俄雨しばらく客になりすます
孫たちの来ない日にちに指を折る
捨て駒を打って減びを待つ美学

啓子 朝子 京子 美代子 螢子 多賀子 潮華 重人 強一 順風 鉄治 旋風 仁清 節夫 島 乃 子 洞庵 扶美代 登美 満秋 芳郎

親父だけ腕組み解かぬいい話
ビビッと来たのはたしか二年振り
失敗をしばらくたつて替される
円安にしばらく眠るバスポート
しばらくしてから多数決の手が上がる
しばらくの足を主治医に叱られる
しばらくは妻にもあった角隠し
夫婦別姓しばらくこのままでいよう
しばらく待つて自動ドアでないと知り
正直者だから暫く待つてやる
しばらくは充電しろと言う左遷
しばらくはほんやり見てる昼の月
暫の限取りつつを忘れさせ
しばらくは知らない事にする離婚
切り札としばらく別居してみよう
佳
しばらくは張り切っていた定年後
しばらくは時給いくらで試される
しばらくは造花になじむかすみ草
やりますとしばらく経ってから返事
しばらくは当ったくじを喋らない
人
リストラかしばらく休暇をとれと言う
恭昌
地
御無沙汰を叱ってボチが吠えている
風樹
天
やと秋しばらくでした広辞苑 海老池 洋
軸
水琴へしばらく腹の子とかこむ
勝視 計光 忠男 杜的 白光子 大輪 妻雲 佳雲 しの 勇太 正剣 よしこ 倫子 緑良 保州 充子 志重 清芳 日枝子 恭昌 樹 洋
あずま 杜的 白光子 大輪 妻雲 佳雲 しの 勇太 正剣 よしこ 倫子 緑良 保州 充子 志重 清芳 日枝子 恭昌 樹 洋

ほめる

清水利武選



書道展読めない文字をほめておく
セールスがほめた子供は隣の子
男まさりとほめて男は遠ざかる
風の絵をほめられ糸がのびてゆく
将来を見込んだ弟子ではめてやる
ほめられてゆっくり軍手脱いでいる
ほめられた男が渡る丸木橋
ほめ言葉へすぐにとびつく耳である
ほめ言葉まんまと乗って蹴落され
褒めてから寄附金募る古狸
朝顔をほめて会話のある夫婦
ほめられた子供いきいき目が光る
ほめ殺されれてにやける甲斐性なし
ほめている口と顔とがそろわない
その時は隣の孫をほめておく
ほめられて言いなりになるお人好し
棒グラフのつべんをゆくほめ上手
紙袋除けて見事な桃をほめ
ボロクソに言うのは夫のほめ言葉
ほめられて手抜きが出来ぬ肩の凝り
ささやかな善意をほめる募金箱
上役の子を如才なくほめておく

智加恵 志洋 勇太 東雲 京子 重人 愛論 輝夫 京子 旋風 恭昌 狸村 一壺 省子 風樹 英王 子 倫子 鉄治 英子 雄々

老婆のやりくりはめて共白髪
表彰の祝辞内助の功もほめ

ほめ上手子供にやる気起こさせる
孫ほめて嫁を貶した笑い皺

辛口と言ふ批評家にほめられる

褒められて登った木から運が向く
気配りがとても細やかウチの嫁

努力はめ母はどの子も期待する
ほめ上手叱り上手で子が育つ

大切な人だそつなくほめておく
ほめられた言葉土産にして帰る

叱るよりほめる言葉で子は伸びる
セールスガリソゴの出来をほめてゆき

玄関の花より器はめられる

佳

はめられて稲はだんだん穂をたれる
猫ほめておけば機嫌のいい女

はめられてほめて夕餉の茶がうまい
死んでからだった国民栄誉賞

枝振りをほめては知恵を借りている

人

おとなしいお子やとバーマ屋がほめる

地

いい仕事してますねと壺をほめ

天

金屏風背に長生きをはめられる

軸

お駄賃をあけてはめてる子の猿

勝 視

凡 々

武 史

和 歌

普

潮 華

寿 美

たもつ

洞 庵

蘭美代子

ちかし

扶美代

柳 弘

登 美

島

シマ子

蘭美代子

柳 弘

保 州

寿恵子

重 人

志 洋

竹治かし

油

最上和枝選



一滴の油でよみがえる絆

油切れ皺を鏡は見逃さぬ

身の回り石油が化けたものばかり

火のついた油のようなストーカー

あちら立てこちらも立てる潤滑油

油断かも知れぬ背中矢を受ける

一言の油断ボロりと出て奈落

天婦羅屋油をぐいとひとにらみ

居酒屋で週に一度は油さす

一口を競い軽油を売る世界

油照り続いて恨むエルニーニョ

才覚で美濃を盗んだ油売り

油田から仕掛火花に似た戦

油屋の娘なかなか喋らない

油さすように抹茶をもう一杯

小刻みの歩幅の敵に油断する

油売り今日は何処まで行ったやら

石油掘る夢食い散らす僕がいた

泣きに來た海が終日油風

アンパンも油で揚げてヒットした

アマチュアのマジック鼻の油つけ

あぶら汗流したあとで笑わねば

昭和史にオイルショックという隘路
油にも水にもとける妥協ぐせ

したたかに生きて潤滑油を注ぐ

セクハラの男油を絞られる

石鹼にリサイクルする古油

女狐へわざと落した油揚げ

邪魔になりそうで油を売ってくる

散髪屋油のいらぬ客が増え

へそくりも油冷汗かいている

あゝ不況膝の油が切れそうだ

油売りながら情報キャッチする

ジェラシーのように天ぷら油跳ね

夏風邪に油断している夕涼み

苦勞性灰汁も油も浮いてくる

あぶら汗流し虫歯を抜いてます

佳

その嘘に続きがあったあぶら汗

油物あかんとか叱る聴診器

なごませる花におれの油かす

何にでも効く札束という油

悪友にまたも油をそそがれる

人

善人の油断母屋を乗つとられ

地

じわじわと油に汚染される脳

天

方円に添って水だの油だの

軸

油断した肩を濡らした通り雨

岳 水

寿恵子

隆 風

よしえ

正 子

仁 緑

俊 路

まさと

はるお

次 男

充 子

緑 良

登

蘭美代子

妻 子

しげお

重 人

智加恵

満 秋

鉄 治

日枝子

藤田 芳郎

初歩教室

題 — 輪

吐 ^は 田 ^だ 公 ^{きん} 一 ^{いち}

「一句を残せ」これは川柳塔の祖師麻生路郎の言と聞く。

川柳を作句するということは、取りも直さず自分の足跡を残すことだ、と私は確信している。ですから、仮令それが初歩教室の課題吟であっても、そこにご自分の全神経が傾注された作品であるとき、その技法の巧拙とは別に、その作者の軌跡を知ることが出来、私は感動を覚える。

一句一句を倦むことなく、推敲を重ね、真摯に取組む時、自らの道は拓ける。このことがやがて開眼の一句となり、生涯をかけた一句が生れる土壌を培うこととなり、生きた証の一句を残すようになるのではあるまいか。

添削句

○花一輪静かな部屋に春を呼ぶ

忠男

この一輪を擬人法として詠むと

▽一輪の酌を期待の四畳半

○メダカの輪はずれてからの不登校 要子
からのとするより対象を入れるといい。
メダカの輪の着想はよい。

▽メダカの輪はずれた孫の不登校

○輪投げる我が根性に似てござる てる子

中七以降が川柳とは言えない。波紋〓輪

▽一言の波紋広がる群雀

○輪の中にも一人うるさい虫がいて 四三郎

下五が悪い。原句を活かすと

▽輪の中にもいつもつるさいのが一人

○輪の中の一人が抜けて足がつき 美子

下五の表現が粗雑。舞台を活かす登場人物

の設定も句には必要

▽輪の中の一人のユダがそとと抜け

○障害者手を取り合って心の輪 真一

中七が言わずもがなの表現

▽障害に負けぬ心の輪をつなぐ

○三猿の輪の中で先ず安堵する 政子

先ずは不要

▽三猿の輪にいてつつがなくらし

○盆踊りキャミソールまで輪に入り 勝久

前後を入れ代えてみると

▽キャミソールのままで輪に入る盆踊り

○輪投げて遊びしい時代の子 静子

表現の問題だけ。変化をつけること

▽輪投げなど死語になつてゐる時代の子

○輪の中は温い筈だよ父母が居る 郁子
表現にひとひねりほしかった。

▽父母がいて笑顔が絶えぬ家族の輪

○輪になつて踊る浴衣の河内節 泰雄

単に踊りの様子を詠んでいるだけ、説明句

▽河内節二人が消えた踊りの輪

○好きだからチエの輪だけははずさない アキ

人間関係が詠めていない。

▽知恵の輪が解けてあなたに逢いにゆく

○輪廻転生俺に似た子が家におる 慕情

下五が問題。直球ばかりでなく、時にはカ

ーブも必要

▽輪廻転生俺に似た子と似ない子と

○開店の花輪が交友誇らしげ 敬之介

着想はいいが、表現技法が単純

▽交友の広さ誇っている花輪

○扇風機まだ輪が回る風がくる 隆

扇風機の羽根が回って風がくるのは当たり前のこと。これでは説明句で川柳ではない。

▽扇風機の輪がガタガタと老いの家

○輪を広げ核実験に反対す 晩翠

○反核の輪に国のエゴが邪魔をする 晩翠

核実験反対とすると音節が長すぎる。反核

という言葉を活用する。この二句を時事吟

として印・パを想定すると

▽反核の輪が拉がらぬ原爆忌

○年輪を刻んだ皺が物語る 益子

年輪の歪みで物語るの内容がわかると思う。

▽年輪の歪みに古疵思ひ出し

○空中に輪ゴムを飛ばす一人ぼち 省子

いい情景を詠まれたが、上五の表現を二考すれば佳句

▽青空へ輪ゴムを飛ばす一人ぼち

○煙の輪一日千個吹かしてた 哲平

喫煙の量というより退屈を強調された句意だろうが、このままでは誤解を生む。

▽定退することもし紫煙の輪

○親も子も人の輪中で育ち合い みやこ

下五が安易すぎた。

▽人の輪の中で育ったまあるい子

○詰め寄ってバズル解く輪の家族愛 美也子

句が固い。キバリすぎ。肩の力を抜いて

▽輪になってバズル解いてる盆休み

○古看板年輪浮かせ守ってる ふみ

下五が遊離している。

▽年輪を刻む老舗の古看板

○孫かこむ笑いの輪にも波があり トヨ子

囲む〓輪と解釈すれば

▽初孫を笑顔が囲む歩き初め

○片隅に一輪たくす粹な母

上五が冗漫。インパクト不足

輝夫

○シドニー五輪見るためお金ためてます セツ子

ストリートに詠みすぎる。

▽シドニーの五輪夢見る貯金箱

○かごめの輪初恋の味ほろにがい 芳水

順序を変えてみると

▽初恋の味ほろにがいかごめの輪

○店開きばらの花輪を送ります 寿代

原句はやや単調。贈る間柄を詠めば

▽新装へ花輪贈った友の店

○園児達輪になり小ばたふり歩く タツエ

小ばた以下が冗長。暑さにも負けず一生懸命の園児を表現すること

▽暑さにも負けぬ園児の踊りの輪

○かごめの輪小さなお手集まらず サト子

原句もいいのだが、今様に詠むと

▽今はもう昔話のかごめの輪

○輪の中に一人すねてる幼稚園 智加恵

見付けはいいのだが、一人すねてるとあるのがやや気になる。

▽輪の中にすねた児もいる幼稚園

○川風に香うパーベキュー輪の並ぶ トシエ

下五は沢山来ている意でしようが冗長

▽パーベキュー囲む一家へ川の風

○一期一會声かけあつて輪に溶ける 側信子

並べ代えて口ずさんでみることも必要

▽輪に溶ける一期一会の趣味の会

○輪の中へ入って行つて一人酒 美寿子

中七の表現がまずい。

▽輪の中ですねてるような独り酒

佳句

輪の中でホープホープとおだてられ

親に輪を掛けた無口な子を信じ

父親に輪をかけているお人好し

おしゃべりの輪に入れない更年期

輪を抜けて遊び足りない子を宥め

朝顔を一輪挿して朝の膳

少したけ美田残して内輪もめ

(上五がやや気になるが)

輪になって遊びを知らぬ塾通い

(現代っ子の姿を如実に)

一抜けて二抜けてかごめの輪が歪む

(人生の縮図をうまく)

輪の中で同じ思ひの画を描く

(こんな仲間が欲しいですね)

花いちもんめあなたがほしい輪の中に

(恋の絵図を見事に)

両輪の動きも合つて共白髪

(中七の表現がいい)

ライバルが浮輪ひとつを投げてくる

(着想表現共申し分なし)

私の句

責任を擦り合つて内輪揉め

本社 九月句会

九月七日(月)午後五時半

アウィーナ 大阪

時折残暑をぶり返しながら、確かな秋へと移りゆく気配の中、九月句会は七日夕、百十一名という緑起の良い数の出席者を得て、定刻開催された。

お話は川島諷云児氏。最近の世相を「何でやねん」と嘆く。特に腹立たしい事件は七月和歌山で死者を出した毒物混入事件を発端に、各地で模倣犯罪が起っていることである。一日も早い事件の終焉と犯人検挙を願う。

軍人であった氏が、八月戦友の忠魂碑のある高野山へ参詣した折、目にとまった「呆けたらあかん」の詩を紹介し話を締めくくる。

次いで天笑理事長が、十月七日の川柳塔まつり、十日の川柳塔奈良創立句会、十一日の鳥取県大会等へ多数の参加をよびかける。

初出席に高島啓子さん(京都市)を迎える。月間賞は田中正坊氏(豊中市)に輝く。

(司会)朝子(記名)月子・いわゑ(受付)いわゑ・弥生(清記)希久子

席題「大臣」 坊農柳弘選

堺屋さん次の執筆大臣を
左大臣右大臣もいるわが家
妻は大臣家のローンで四苦八苦
大臣が笑いとばしていたページ
バッジ一つ付けて大臣ですという
大臣になるには金が必要らしい
大臣も答弁あやふや核弾頭
大臣を大量生産世紀末

席競う時のみ燃える金バッジ
大臣になつたら私財あばかれる
原稿を読まぬ大臣なら信じ
棒読みで総理の椅子にしがみつ
大臣が寝言でウソを言ってます
大臣の真ん中へんがばやけてる
大臣の大まででかい顔をする
大臣をほろくそに言うコップ酒
大臣の噂を縛る縄がない
大臣のポケットにいつも飴がある
大臣のレール赤坂から敷かれ
顔と名が代つて何も変らない
原稿を読む大臣がかわいそう
離壇のどれも見飽きた顔ばかり
椅子取りゲーム大臣も会長も
飴が嫌い大臣にはなれませ
集合写真どの大臣も嬉しそ
大臣が先ず外遊のプラン練る
大臣も只今お茶漬け中の夜半

大臣になつたら私財あばかれる
原稿を読まぬ大臣なら信じ
棒読みで総理の椅子にしがみつ
大臣が寝言でウソを言ってます
大臣の真ん中へんがばやけてる
大臣の大まででかい顔をする
大臣をほろくそに言うコップ酒
大臣の噂を縛る縄がない
大臣のポケットにいつも飴がある
大臣のレール赤坂から敷かれ
顔と名が代つて何も変らない
原稿を読む大臣がかわいそう
離壇のどれも見飽きた顔ばかり
椅子取りゲーム大臣も会長も
飴が嫌い大臣にはなれませ
集合写真どの大臣も嬉しそ
大臣が先ず外遊のプラン練る
大臣も只今お茶漬け中の夜半

英王子 重人 恭昌 典子 仁清 鬼遊 美子 隆盛 典子 千津子 鬼遊 克治 恭昌 利武 金太 啓子 三男 いわゑ 寿美子 愛論 鹿太 蘭昭子 格蘭吉 蘭美代子 大臣

災害地へ大臣はやい作業服
大臣の人氣聞くたび下り坂
大臣の作業服は汚れない
大臣ののらりくらりを手が真似る
大臣になれぬ輩がすぐゴネる
大臣は仕事をしない部屋にいる
大臣に美人配している組閣
党内の序列へそろそろくる大臣
蔵相の顔色みてる小淵さん
作文をとてもし上手に読む大臣
大臣の妻でさんまの値を知らず
総理より平成おじさんが似合う人
押しくらまんじゅう大臣ごっこしてござる
総理より偉いお方がいる隣
ユーモアの解る大臣なら会おう
軸
ぼくんちの総理大臣お母さん
兼題「体調」 藤田泰子選

たもつ 頂留子 夕花 柳右子 章久 しげお 茜 柳宏子 セツ子 まつお 希久子 倫子 義子 章久 月子 柳弘 アキ 充子 和子 セツ子 伽羅 森子

体調不良妻の旅行が長すぎる
 体調のよきそんな日におねだりを
 体調の悪い日猫も心得る
 健康法しすぎ体調こわしてる
 体調が良くて一言多くなる
 情熱の老化を風に笑われる
 風邪の神に大事な旅が逃げました
 ウイルスにとつても強い雑魚でいる
 体調がいい日開けないコンバクト
 体調維持いつもしてます花時計
 体調がよくて遺言見合わせる
 体調が良すぎ小石にけつまずく
 もう少し涼しくなるのを待つ胃腸
 体調がよいから時計進ませる
 体調は良いが素顔が病んでいる
 体調は充分ですが無職です
 体調不振妻のルージユが恨めしい
 健康管理満点妬心たぎらせる
 体調のところでどこに夏の疵
 ショックから立ち直れない偏頭痛
 早く帰るとどこが悪いが妻が聞き
 ばちばちですわ商売も体調も
 体調がよくてでつかい叱り声
 体調が文字に出ていて母の文
 鶴を折る母の体調聞いてより
 体調を弁解にする負けいくさ
 腰痛へ年や年やと言いきかせ
 体調の良し悪しを知るボタン穴

恭昌 千代 啓子 周信 達子 文 隆盛 富湖 靖巳 まつお 伽羅 夕花 瑠美子 千代 千秀 希久子 寿美 賢子 天笑 絹子 狸村 いわゑ 朝子 楓楽 文 澄子

体調によつてはいけずになる義妹
 佳
 ほととしたところで体調崩れ出し
 太陽を掴まんばかり気力満つ
 敗因を体調などと言つてはる
 体調が良過ぎ良からぬこと思ふ
 体調の良すぎると遊ばない
 人
 体調がもどり大きなにぎり飯
 地
 体調も薔薇のボプリも秋の中
 天
 体調がよいので今日は大掃除
 軸
 体調の命するままに食べ歩き
 兼題「告白」 桜井千秀選
 いちじくが熟れて告白状届く
 告白に踏みきるまでの深い闇
 居酒屋で軽い告白聞いている
 好きな人がいると突然妻が言う
 本心を打明ける目が動かない
 離陸してそろそろ言おう胸の内
 告白の重さにゆれる恋心
 告白をします観覧車の中で
 告白してすつとした気になはれ
 告白に尾ひれをつけて翹ぶ女
 告白の今をしつかり掴まえる
 子の告白母は待つてたように受け

寿美子 楠昭子 雅文 ダン吉 仁清 啓子 美代子 森子 月子 泰子 和子 剛治 富湖 楓楽 しげお かすみ 狸村 正坊 頂留子 計光 千津子 一風

真実を話してからのさめた仲
 教会ですつかり縋りつく懺悔
 告白の愛へヒロの面を脱ぐ
 告白をして朝顔に水を遣る
 真剣な告白だから背をのばす
 自首告白罪一等を減じられ
 コスモスの中の告白忘れなれ
 何もかも打ち明け見るの腑軽くなる
 告白が出来ず斜めに胃の世間
 受け皿になつて告白聞いてやり
 告白を神が聞き耳立てている
 追いつめて告白させてから悩む
 告白をすると懺悔になつてくる
 しまいまで聞いたらのけられていた
 胸の内みんなさらけて茶がうまい
 なまぐさい告白らしい女文字
 八月に懺悔の部屋が混むらしい
 仮面取りじつくり話す裏話
 告白の陰で糸引くのは女
 十字架に告白外は深い霧
 告白を聞いた気がする風の中
 告白を隅で聞いているちち虫
 正直に話してからのすきま風
 佳
 打ち明けて六根清浄空高し
 告白にゆつくり謎が解けてくる
 さりげなく告白をする夕茜
 告白をしてぐつすりとおぬる夜
 神様に告白したら漏れていた

恭昌 洞庵 朝子 森子 狸村 久峰 みつ子 たず子 柳伸 隆盛 とし子 寿美 楓楽 天笑 いわゑ 雅文 啓子 萬的 勇太 正雄 正坊 千里 市子 高栄 澄子 鹿太 笛生 比呂志

人

口にせぬ告白を持つ絵の具皿

勇太

告白をして指切りが軽くなる

英子

告白を冷凍にして時を待つ

武庫坊

同衾の告白灯り消してから

千秀

兼題「捨てる」

高須賀金太選

どう見ても使える家具が捨ててある

剛治

捨てて来た故郷を舌が恋しが

正子

少年が仮名にされて捨てられる

四郎

ゴミ捨て場家具一式が揃いそう

仁清

平和とは捨てたいものが捨てられる

弘一

マンガ本捨てたらなんと広い部屋

樹千代

使い捨てでできぬ戦争世代です

セツ子

欲捨ててから福引きがよく当る

泰子

空き缶も男もボーイと捨てられる

石舟

捨てたのと捨てられたのと戎橋

英子

粗大ゴミ山ほど捨てて病んでいる

たもつ

子の自慢するとき夫捨てている

千里

雑兵の汗にべもなく見捨てられ

洞庵

名が通り女旧姓捨てられぬ

啓子

マネキンはおもちゃミソール脱ぎ捨てた

保子

錯覚を捨てると見えてくる自分

希久子

捨てものなんにもなくて困ってる

いわゑ

捨て石が十手先から生きてくる

靖巳

肩書きは捨てる蛙の子は蛙

しげお

人間を捨てたいときもありました

梨里

プライドを捨てると頭下げやすい

諷云児

枕鐘にのせて大厄捨ててくる

隆盛

核捨てると勇気あなたいにありますが

ダン吉

何もかも捨てて翔びたい時がある

賢子

捨て駒が怖いと金になって来る

重人

捨てられてたまるか妻にしがみつ

朝子

アルバムに捨てた昔が生きている

鹿太

四捨五入私はいつも四捨の中

倫子

まだ捨てたものではないと鏡見る

正一

保険屋も見捨てる齢になり候

洋

わだかまり捨てると海が風いど

たず子

これだけのゴミを捨てたら川も死

まつお

大型ゴミ俺も一緒に出してんか

東雲

無位無冠私に捨てるものはない

鹿太

国民は捨てても銀行守ります

まつお

定年後妻に捨てられないように

楓楽

価値観の違いで妻が捨てた本

正雄

捨てて来た女の吐息背にある

洞庵

客観視すると捨てなくなる自分

楓楽

風呂の栓スパツと抜いて今日捨てる

ますみ

夏はもう終わったさくら貝捨てる

美代子

虚飾みな捨てた素顔が美しい

たず子

捨てられぬように努力はしています

金太

兼題「まぐれ」

榎本吐来選

実力をどこかに秘めているまぐれ

剛治

まぐれだと謙虚に思つ内は良い

庸佑

まぐれからはまぐれだらうか昼の月

アキ

逢えたのはまぐれだらうか昼の月

みつ子

まぐれ当たらに期待を込めてくじを

靖巳

入学はまぐれだったと知る四月

三男

まぐれかも知れぬ夫と五十年

まつお

気まぐれを心で詫げる鳳仙花

朝子

占いもまぐれで当たるから怖い

澄子

まぐれですと言え余給がにくらしい

鹿太

気まぐれをおこし戻らぬブーメラン

倫子

フルムーンへ秋気まぐれな雲が飛

克治

まぐれだとその目決して言うてない

萬的

まぐれだと思つていないのは妻だ

ダン吉

抜擢をまぐれと嫉妬する輩

典子

阪神が勝つとまぐれと言いやがる

正雄

気まぐれと知らずに女ついて来る

弘一

まぐれですと満更でない顔をする

梨里

まぐれでおまんこやつかりカン

紫香

まぐれではないぞ辻褄合ひすぎる

千歩

あの人このころ摺んだのはまぐれ

大輪

まぐれではないと母さんだけが知

瑠美子

気まぐれな帰宅待つ目がつり上

満州

まぐれだと言いつつ鼻がうごめ

周信

まぐれでも抜ける川柳止められ

紫香

まぐれだと他人が言えば腹が立

洋

まぐれでも一度は天を取ってやる
心臓が鐘を鳴らしているまぐれ
妻の気まぐれ松茸を買ってくる
まぐれだと言われたくない積み重ね
まぐれで誰も努力を信じない
まぐれではない精進のホームラン
まぐれだとあっさりかわす実力者

住 徒

もう二度と枯木に花は咲きません
パチンコ台まぐれに賭ける母子家庭
しんけんに生きてまぐれを信じない
まぐれにもクイズ当った便り来る
まぐれ当りのくじに人生狂わされ

人

きまぐれに染めた茶髪で覚えられ

地

まぐれでは百歳までは生きられぬ

天

まぐれだと言われたくない陰の汗

輔

まぐれ当たりが虜になった宝くじ

吐 来

セツ子
典子
度
冬 葉
千 歩
茜
靖 巳
仁 清
久 峰
たもつ
笛 生
たもつ
かすみ
弘 一
恵 子
子 来

兼題「飛ぶ」 橘高薫風選

まだ飛べる蜚が籠の中にいる
上昇気流目に焼き付けて紙の鶴
雲海の機窓へ心広くなる
シャボン玉飛んだ私もいそがねば
本当は飛ぶのが怖いブーメラン
K点がいつもこころの視野にある

螢
和 子
充 子
ダン吉
鹿 太
保 子

飛ぶのなら借りを返してからにして
飛ぶようにわたしが売れた頃がある
飛び散った思い出集めたい句集
蟋蟀がいちばん電車に飛び跳ねる
決戦の桂馬は飛車の前に飛び跳ねる
バーを飛ぶ青空と風抱きしめて
死闘する汗飛んでくるリング下
引き当てるクジが飛ぶ気にさせてくれ
大人になつたら飛ぶなくなつたキュービッド
飛びかたを知らない恋に秋の色
飛べなかつた老母に背中を押されてる
初孫へ飛び立つ思い髭を剃る
笑い飛ばしてひと言の刺を抜く
毒舌を飛ばし妥協に応じない
飛ばされた任地水雨に迎えられ
飛ぶ鳥を落した過去を裁かれる
まだ飛ぶ日あるべし老いの辞書を繰る
六法全書下手に翳つて飛びそこね
飛んでいた羽根定年へ置いてくる
不本意な噂だけ飛ぶ元スター
蛙なら飛んで急場をしのぐだろ
ときどきは妻の死角で飛んでみる
草笛を吹けば信濃路雲が飛ぶ
地平線までは飛べます草の種
コンドルが飛ぶアンデスの空の碧
いつ来ても鶴は王妃の顔で飛ぶ
飛び魚の風に乗るよな恋もせん
乱舞する蜚の中で恋になる

住

重 人
舞 夢
比 呂志
セツ子
石 舟
頂留子
大 輪
信 子
仁 清
満 州
愛 論
正 雄
勇 太
周 信
風 里
頂留子
典 子
石 舟
萬 的
典 子
雅 文
洞 庵
瑠 美子
文

花 梨 会 柳 川

宮 木 一 夫
岩 多 輪 多 朗
浅 井 青 山
青 木 夏 生
前 田 一 枝
石 上 悦 子
杉 本 あき子
坂 田 和 歌子
福 本 栄
澤 田 よう子

事務局及び投句先 〒680-0044
鳥取市御弓町40-3 坂田和歌子
☎0857-23-3248

今日恋をしました羽が生えました
掌を開き小さな希望飛び立たせ
ミサイルが飛んで日本の熱い空
マツタケが来ずにテポドン飛んで来る
飛ぶ鳥を落としたころの誤字脱字

人

暖衣飽食飛べない鳥になつてゆく

地

宇宙船 船先を神が飛んで行く

天

亡き妻が飛天となつて違いにくる

軸

飛の一字凝視 テポドンと化す

薫 風
正 坊
弘 一
楓 楽
美 子
愛 論
鬼 遊
ダン吉

老地樹壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

かたつむりいつかはきつと樹に登る
落ちこぼれ大樹の下で息をする
大木になって會長引き受ける
少年よ型にはまらぬ方がよい
試験場みんなが出来るように見え
延長戦みんないらい甲子園
憂さ忘れせて踊ろや皆の衆
なんのかのみんな地球汚してる
みんなは黙って身辺整理する
何もかも掃いて捨てたくなるだるさ
故郷の庭ひさかたの竹箒
箒目が生きて名利らしくなる
自己批判消しゴムの滓掃いている
雑念を掃いて夜空の月見上げ
散歩でもしたらと妻に掃き出され
原爆の恨み掃いてる八月忌
緑台に話題土産の掃省客
一斉に蛙が騒ぐ夕時雨
あつさりと言われればんやり引受ける

賞罰は気にしていない山ざくら
酸素ボンベ抱いて川柳に明け暮れる

川柳高知

川竹

松風報

明光 杜的

指切りを信じて眠る子の寝顔
爪染めた指がお米を研ぐ不安
からむ指世界は二人だけのもの
人に向く指が冷たくないてすか
曲り角曲つて石にけつまずく
他人なら許せることが許せない
人情をたつぷり貰う里帰り
レース編み女に早い季がめぐる
叩かれて叩かれ少年脱皮する
叩かれた肩に重たい荷をもらい
正論が叩かれている多数決
温もりが伝わる友の肩叩き
叩かれる奴が笑っている不気味
注文をつけた小兵の勝ち名乗り
注文の多い女でまだ独り
真心に触れた病衣を懐かしむ
仕方なくオーダーにする肥満体

テルミ 良雄

和江 主風

千恵子 菊野

竹萌 有佳

京子 功

酒仙 幸

快風 孝雄

佳風 朱坊

松風 松

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

八・一五まだき臭い地球号
戦争は終れど息子帰らない
わだつみの声遙かなり終戦日
蟬時雨一際高く終戦日
玉音が八月十五日を斬る
ひまわりの首つなだれた敗戦日

頂留子 賢子

洋 弘直

祥一 千里

白旗を一本八月十五日
わたしだけ普段着だった祝賀会
ちぐはぐを気付かぬ人の長談義
ちぐはぐのサンダル気付く救急車
ちぐはぐの意見まとめる聞き上手
ちぐはぐを悔んで添って五十年
ちぐはぐを上手につなぐ母の耳
北壁踏破吹雪が吠える自信
場数踏む男の顔にある自信
踏み出せばあらたな風にきつと会う
原っぱがない影踏み声がない
踏切りがゴメンゴメンと降りてくる
他人には踏ませたくない影ぼうし
踏み込んだ森で脱皮をして帰る
母がまた涙を見せる父の墓
夏休み孫が手を引く墓まいり
家と墓建てて男の顔になる
青い目の彼と詫びてる花手桶
お小言を聞きつつ母の墓洗う
兵の墓いまだに整列崩さない
連綿と試験を刻む血の重み
蛙の子は蛙になってゆく安堵
点滴のリズムに合った血の流れ
血に飢えたナイフを早く有めねば

欣之 度

春子 弘一

一風 森子

半蔵門 秋子

朝子 シマ子

弥生 夕花

扶美代 ますみ

柳弘 柳伸

とみを ダン吉

柳宏子 年人

たもつ 隆盛

美代子 倉吉川柳会

松本よしえ報

ちよ子 秋人

康志

和室には昔ながらの和紙建具
薬を打ちムシロ作って一服だ
ご先祖は和紙に説き継ぐ人の道

手作りの和紙に本首を書いておく
虫喰いの和紙国宝の字が読めぬ
和紙の美に優る女をまだ見ない
冷や汗がどっと出て来た指名され
滝の汗流して体増える謎
冷や汗をかくて仕事を覚えてく
ワンダフル和紙人形が海渡る
せめてもと遺すロマンの和紙を選る
卒業の証書は和紙に決めてある
何の祟りか真綿が僕的首締める
Ｕターン雪降る里で和紙を渡く
和紙の手触り確かめながら障子貼る
美味いのか紙張り虫が和紙を食う
盛装の似合わぬ妻は木綿好き
藁人形にされないように伸直り
僕の汗人の汗より塩からい
汗をかきすぎて刑事に疑われ
腰のある和紙だが浮輪にはならぬ
包装の和紙溜めているおばあさん
骨肉を真綿でくるみえびす顔
喝采のかげに涙の汗がある
妹にやる麦藁のはたる籠

川柳塔打吹

米田

幸子報

智子 雄々 艶子 民枝 紀美子 天雀 西喜美子 康子 かつみ 季芳 ゆり子 玲子 和歌子 睦子 きみ子 一夫 次男 和枝 よしえ 石花菜 節子 螢

そわそわと妙につくして怪しまれ
そわそわと隣の嫁が若づくり
姑となる人にそわそわいに行く
酒が出ただけでソワソワしてしまう
試着室そわそわ待つてゐる旦那
時間なし男そわそわゴミを出す
竿やさお呼び声のどか昼下がり
晩学はつづら折れた長い道
父さんそわそわ遊びの虫がさわきだす
曲りなりやとすませた親の役
ノール賞狙ってみるか晩学で
腰曲り地を行く蟻と仲がいい
お迎えが来る晩学の卒業日
札束に曲つた事を教えられ
ニッポンが一本釣りをされている
晩学を向い風まで邪魔をする
デートかな古稀の父でもそわそわと
一夜千し竿につるして猫がまつ
そわそわしはみ出しちゃつたばめの子
晩学で呆ける暇ない忙しさ
晩学と言つてはおれぬ介護教室
次の角曲がれば君が待つてゐる
待つてゐた牌が来たのかそわそわし
公約が竿一杯に広げられ
八つ裂きにされても意地は曲げられぬ
川柳ねやがわ 江口

克枝 一夫 和歌子 完司 睦子 きみ子 セツ子 しろ子 順子 康子 芳光 信子 勝見 かつみ 石花菜 雄々 逸子 善江 孝恵 玲子 一京 松盛 節子 幸子 度報 冬葉 勇太郎

心頭を減却できず生ビール
ブライドと二人三脚してひとり
ブライドに生きて老舗を守り抜く
ブライドを空の財布に隠してゐる
野に下りいまだブライド捨て切れず
ブライドが邪魔して神に近よれぬ
贈りもの異かも知れん受けとれぬ
誰にでも贈るスターの投げキッス
ちよばちよばの見栄競い合う贈り物
贈られてだんだん好きになる扇子
あの人に贈る言葉は飾らない
贈られて贈つて無駄を惜しまない
炊事道具生命のように光らせる
要りもせぬ家財道具で狭く住み
古くとも自分になじんでいる道具

住句地十選 (9月号から)

山根 めぐみ

大方は見えて見ぬ振りをするナイフ
潮時に気がついてゐる足の裏
泥んこになつても守るものがある
後ろから押ししてくれたらふっ切れる
骨壺の中で漸く伸直り
軽石が沈みこの世の嘘が浮く
世渡りへ一円玉も意地を持ち
どの壁も抜けた健康だったから
女百態あなた次第のうらおもて
正論は裸になつて押し通す

順三 朝子 光子 日出子 庸佑 三郎 たもつ 一途 透太 一風 とし子 ルイ子 高栄 亜成 晋吾 拓治 秀男 保州 鹿子 鹿太 洛醉 佐代子 柳伸 信博

道具箱に乾杯花の棚が出来
不器用なわたしと知っている道具

道具箱ようやく出番きた不況

職人の道具迂闊に触れない

定年まで会社が無事にあるやろか

丸ごとで買ったスイカの頃もあり

うれしさはきれいに食べた皿洗う

のんびりと行こう無職の影法師

缶ビール拳手をしそうな兵の墓

よう産んでおいたもんと娘との旅

延長もPK戦も無い人生

傾いてゆくこの人のやさしさに

杉の木が唄うと天が高くなる

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

蟬しぐれ内証話の邪魔をする

長崎の鐘が響いてこの平和

不意に來て愚痴と涙を置いてゆく

絵に描いた餅を夫婦で語り合う

壇の浦つわもの共の夢の跡

惜敗の涙がしみる甲子園

天気晴朗今日も汽笛がよく響く

不意突かれ取り戻すに骨が折れ

万緑の蔭で休めば蟬しぐれ

家計簿にずしり響く消費税

キントン雲に乗って飛びたい夏の夢

勘違いばかりしている遠い耳

靴音高くよろこびの使者が来る

頂点で叩く太鼓がよく響く

英壬子

恵子

博泉

小路

文秋

かすみ

仁清

洋

あやめ

弘一

磯

度

江美

富世

まさ

鹿太

モトコ

満寿蔵

正治

いわお

六浦

勇次郎

弘治

すみ

昌子

夢之助

影踏みが上手になった余命表

当分は妻のメニューにないカレー

声ばかり復活減税響かない

峰打ちを不意にされると気絶する

打てば響く賢い嫁にくたびれる

川柳後楽吟社

從野

健一報

どこだろうずつつと探しているあなた

D51の炎に映る男の詩

リーダーになって西陽に晒される

向日葵にご苦労さんと水をやり

入道雲まだ許せないことがある

はくそ笑む河童胡瓜の当たり年

父の背にのぼると光る海が見え

蜂の巣と車が同居のうちの車庫

少年にもどり仏の母と寝る

思いっきり飛びたい夢をもつ蛙

ぬるま湯の中へ元気が溶けてゆく

自信喪失せつせと包丁を砥ぐ

風邪癒えて昼はうなぎで夜はテキ

仏壇の父母も汗掻く熱帯夜

精一杯生きさるきよの蟬しぐれ

内緒事暑さに弱く栓を抜く

仲直り二人でスイカ平らげる

弁当を作れと星が降る夜空

ゴミ捨てに見事な花を咲かせた大地

パラソルをかるく回して拗ねている

職場では見せぬ本音の屋台酒

何くそと思えど耳が遠くなり

澄子

石舟

十四郎

紫香

柳宏子

幸子

佐加恵

健一

秋月

道博

青銅

桃風

敏明

正秀

哲郎

吉則

美智子

照路

金吾

柳五郎

博友

忠成

浄美

拓治

邦季

まさお

吟平

さくら紙ふわりと森へ飛び立った

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

親方のコピーと違う新料理

自慢気にコピーばかりのコレクション

大袈裟に逃げた魚の拡大コピー

コピーされたらしい無口なモナリザ

料理本おいしそうだとコピーする

手放した土地コンビニの灯が明かい

土ふまず昨日のいたみまだ癒えぬ

植え替えた土の捨て場に苦勞する

被災地の土は謀反を考える

燃えつきた父母の土だよ故里は

ふるさとにまだ柔らかい土がある

三角だ四角だ相手決まらない

初心者はとくかたち気にとられ

きまじめな三角形のにぎりめし

かたちより入りにて深きは茶の湯かな

仕合せなかたちで洗い髪を干す

生きてゆくかたちでけさも目が覚める

不揃いのきゅうりに愛の味がする

待つことに慣れて減税声ばかり

あと五分待つてみようよ花時計

突然に蟬鳴き止んだ甲子園

げんまんの指が覚えていたあの日

釣り人が一人リストラの風の中

天気図に妥協はしない雲の峰

瀬戸際に立てば男は皆白紙

句帳手に汽車に乗り継ぎきまま旅

草風

弘治

一笛

義芳

芳子

節子

日出男

昌子

愛

武庫坊

千恵

富美子

歌子

久子

ヤス子

正子

とみ子

年代

静

十四郎

比ろ志

紫香

澄子

昭三

求芽

伊三郎

光穂

砂を掘る鎖の先の夏の犬

大原川柳社

矢内寿恵子報

薫

へそくりを隠し忘れて大騒ぎ
夏ばてを知らずに過す肥満体
酔うとまた楽しい嘘が言える人
優しさに慣れて骨まで弱くなり
耕してまた地にかえず農の汗
青田吹く風に黄金の夢をかけ
カラオケ仲間二つ返事でよってくる
人も野菜も恵みの雨に背伸びする
ばあちゃん古い話に蓋をする
燃えつきるまでと二人は好き同士
就職難何の奇跡も起らない
百歳の笑顔の中にある奇跡
諦めきれず縋る思いで待つ奇跡
稲の出来亡夫に告げる仏間の灯
諦めていてもベッドで待つ奇跡
茶柱の奇跡信じて紅を引く
助手席で欠伸のみこむ思いやり
後十秒の奇跡に賭けるのもゲーム
九死一生神は見捨てていなかった

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

絹子 静子 あすなろ 和子 ひでの はるみ みさえ こふゆ 敏子 巴子 喜美子 悦子 辰江 昭子 あやこ 玉恵 さちこ みづえ 寿恵子 かつ子 聖子 恵美子 好栄 ちよえ

カスミ草添えてはなやぐ床の花
一枚のカードに足をすくわれて
あつ／電話やつぱり彼女だうれしいね

争いがお金でなくてホツとする
たかがカード一枚人生狂わせる
争点のはっきりしないもどかしさ

京都塔の会

松川

杜的報

呆け防止老母と綾取りしています
あやとり糸がもつれたかごめの輪
あやとりがもつれたまんま秋に入る
あやとりのとけてもつれて姉妹
遠い日のあやとり今も胸に棲む
あやとりに興味をもっている仔猫
平静になれぬ男が横にいる
平手打ちそれから彼に魅せられる
平均寿命まあばばといきまひよか
平凡の中に雅の香を焚く
痛いところかれて平気ではおれぬ
平凡は歩き疲れること知らず
平べったい顔はまさしく僕の子だ
ごつそりと脱いで帰省の顔になる
男ごころをこっそり持つてゆく女
退職金ごっそり持つて妻家出
スパーに根こそぎ客を持ち去られ
咎めまいごっそり減った食べ盛り
ごつそりと溜めてるらしい門構え
ニッポンがごっそり持つていかれそう
兄弟が磁石のように弾き合う

英子 英子 鈴江 博利 清泉 白汀 柳安子 百合子 正坊 吉之助 紫香 露 求芽 友照 白溪子 欣子 福子 とし子 豊次 波留吉 英一 飛鳥 芳子 庸佑

母の磁石危ないものはみんな吸う
冥途への長い旅にも要る磁石
進路は北へ男磁石を信じ切る
三人の夫はみんな逝きしそぎ
森閑としてルームの窓は赤鳥居
赤いシャツとうとう着ずに過ぎました
梅雨三日買った花の名浮かばない
青い目の親戚わが家も国際化
ふりかえる過去など私にはないと言う

ローズ川柳会

山崎 君子報

ひもすがら鳴く郭公よ果も持たず
まわり道ひまわりさんに会いたくて
ひまわりと背比べ風が笑ってる
再建の庭にひまわり凜と咲く
光るもの集め輝く果をつくる
休耕田ひまわり植えて村おこし
ひまわりも木陰を恋つた午後四時
ひまわりがニコッと笑ひ梅雨明ける
それぞれに果へ想いあり蟬しぐれ
果の側の難に免じて許した日
疲れても帰る果のある終電車
傾いた果にもそれぞれ歴史みる
ひまわりは陽を追いつながら首をふり
ネクタイを結び直して子の果立ち

富柳会

池 森子報

典子 典子 諷云児 とみ子 笑女 杜的 年代 武庫坊 美穂 水客 哲子 藍 貴代子 澄子 いわゑ はつ絵 民平 笑女 雅子 文子 三和子

竿売りの声懐かしい雨上がりに

ギザギザの鞭で打たれている奢り

豊かさのかけにかくれた大きな負

歯車の歯の一枚に僕がいる

一本で急所はすずぬプロの釘

気分転換紋白蝶の浴衣着る

傾いた棚に絆の釘を打ち

入門書ばかり飾って軽い棚

冗談が効かぬ男の孤独感

ライバルと昨日と同じ棚に乗る

医者よりも母のキンカン風邪に効く

効くまでは張りつづけるサロンプス

使つべし境界浄化に効く一票

まごころの届かぬ人と見る牡丹

結局は何が効いたかわからない

その内に効くかも知れぬ糠に釘

組に毎日乗っている命

汚してはならぬ祈りが棚にある

川柳塔おとり

原
みさを報

正直に生き貧乏を恥とせず

堂々と唄えばそれなりに聞え

堂々と閻魔の前で嘘を言う

昭和一ケタまだ堂々と恋もする

堂々としての割には気が小さい

浮世坂避けて通れぬことばかり

お互いに避けるつもりが意気が合い

若夫婦鬼門を避ける設計図

知恵熱が一度も出ずに終わるそつ

方子

冬虹

宏

勇太

りつえ

和歌子

紅紫朗

アキ

義清

鐘造

昭水

登子

(佃) 勇

夕花

花梢

美代子

欣之

森子

舍人

和子

黙光

艶子

千秋

佳子

庸二

清子

風花

平熟のときに遺言書いておく

晩学へ余熱をみんな注ぎこむ

ユダの血が騒いで熱がさがらない

情熱の賞味期限が切れそうだ

政治家に大臣病の熱が出る

熱潮が五臓六腑を駆けまわる

聞き役をふと味方だと思ひ込む

聞こえないふりして全部聞いている

さく事はすつかり聞いて領かぬ

話だけはすつかり聞いて金出さぬ

追伸は逢つて聞くより胸を刺す

母さんの声が聞きたく墓参り

釈迦の声奈落の底で聞かされる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

鯉ちりと冷酒一合あればよい

好きでない鰯時々食べている

熱帯魚のような娘が街泳ぐ

トロ造り熱かん前にもう待てん

南十字星また見にくく決めている

南から北からも来たボランティア

はねつ返りが今は一児のママでいる

試行錯誤いびつな鞆がよきはねる

据え膳をはねる勇氣はない私

雨降れば雨のリズムではねる靴

見覚えのはねる癖字で来た返事

人の気も知らずにはねる鳳仙花

多くは言わぬけど父さんの目が温い

宏章

由多香

雄々

孝子

小生

崇

せつ子

ゆきの

幸次郎

伝住

登美

道子

みさを

透太

能子

江美

哲嗣

義子

正坊

ヒサ子

香子

萬的

周信

風云児

富喜子

鹿太

石舟

母に似て髪が多いはありがたし

ふる里で見つけた星の多い空

野次馬が多くて喧嘩やめられず

鬼千匹軽くおさえた腕も萎え

遠くから昨日の札を言う会釈

封を切る指が感じたよ予感

朝顔の数を自慢の露を踏み

お互いに甘え過ぎてた綱渡り

幸せな財布銅貨で重くなる

蟬時雨私も元氣負けられん

お入りよ日傘のまわりの赤とんぼ

通販の根氣にいつか押し切られ

ありふれた言葉に揺れるイヤリング

また今日も磨いています欠け茶碗

多情仏心花それぞれの彩をもつ

顔色がよいと安心してくれる

いずも川柳会

園山多賀子報

羽化が始まる緑の風動く

枯落葉あれが緑のなれの果て

ハイカラな緑レタスが濡れている

わたしの壺赤も緑もよく似合う

丘に旗立てた亀かに教えられ

思い出の丘はみどりに塗りつぶす

丘の上からピアノの音が降りてくる

丘の上幸せそうな声がする

思いっきり二人で歌う丘の上

母さんと歌う夕焼丘を越え

再婚の駅から発車したドラマ

とみ子

紫香

曙蝶

いわゑ

日出男

トミエ

絹子

文

房子

松煙

信子

柳宏子

澄子

みつ子

たず子

しげお

章峰

青湖

故純子

文子

きみえ

寿美

昌枝

多喜

おしえ

芳枝

叮紅

助走路が長くて再婚踏みきれぬ

再婚の決意心の紐をとく

再婚は愛の一すじ汗の道

先の世も嫁をとらずに待つてゐる

再婚の話に聞いてみる

再婚の接木に愛の花も咲き

愛などはいらぬ死なれては困る

うっかりと愛想笑いをしてしまふ

何時までも小出したの愛の妻でいる

母の煮た愛のこもった豆の味

じつくりと話聞くのも愛だらう

花束に愛の証が込めてあり

うろこ雲熱い想いをたたみ込む

片思い心残りのちぎれ雲

忘れてはならない雲を語り継ぐ

雲動く行方見守り鉄洗う

ちぎれ雲母へ届けるメッセージ

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

喧騒を嫌って湖畔まで逃げる

日中は湖畔賑わすサーフィン

鈴虫の声をききれいに聞く湖畔

湖畔から夕日ながめて血がたぎる

しじみ舟湖畔の歴史乗せている

一輛の湖畔を走る歴電車

ホテルから元気に届く孫の声

仕掛花火見えるホテルを予約する

ホテルの灯つし湖面のおだやかさ

宍道湖が見える部屋かと念を押し

多賀子

房 子

蘭 水

義 良

満 江

玲 子

れいじ

あきら

草 丘

まこと

圭詩朗

禮 子

久 子

治 代

ちかし

水 煙

篤 子

友 子

静 江

早 苗

雄 々

忠 憲

幸 子

ひふみ

久 枝

邦 代

草 丘

四つ星のホテルが招く異国の夜

ホテルから幸せですとハネムーン

人間の欲の深さを聞く地蔵

地蔵札打って亡母の霊悼む

さようなら素直に言えた地蔵さま

念仏の声重なつて地蔵盆

トンネルを抜けたと地蔵さんに会う

背の低い地蔵に小さな花あげる

夏雲になぜか不況の色を見る

夏は来ぬ少女にもどる同期会

散髪をして爽やかな夏の顔

昼寝して居れない初夏の陣

汗だくになつて真夏のアルバイト

夏祭り下駄の緒少しゆるくなる

年金の枠で遊びがうまくなる

遊びたい時もあろうに蟻の列

旗翻し野良犬になつて遊ぶ

豪遊のあとにはむなししい空財布

水鉄砲孫と遊んで暇つぶす

遊ぶこと知らない塾へ急かされる

はたる川柳同好会

井上

直次報

ぶぶ漬けでもと言われ帰るに帰られず

戸を開けたまま帰つた捨て台詞

みおつくし帰る家なきホームレス

回り道やっぱり帰る妻のもと

もう一度念を押して帰る妻のもと

優勝旗持って凱旋燃えた夏

保育器の児の大あくび見て帰る

茂 美

与根一

芳 枝

房 子

螢

登志子

きみ子

博 子

邦 康

日出子

義 良

多賀子

静 恵

み え

桂 子

太 泡

すみこ

畔

米 子

町 紅

直次報

螢 柳

ただし

博 史

直 次

正三郎

柳 童

喜美子

膳の緒も極に入れて帰り逝く

帰りぎわやつと切り出す頼み事

上げ底は土産ばかりでない世相

苦勞したるに野暮な旅土産

土産より土産話が妻にうけ

故郷の母育てた野菜背負い来る

土産など買わぬ男の一人旅

丸刈りにすべてを賭けるジャイアンツ

もう年だすべてが家内に任せます

浴衣着てすべてが踊る阿波踊り

すべて吐き出さねば虫が納まらぬ

我が生涯罰罰なしがすべてです

全てから解放された日の虚ろ

揺らいでもみなお見通し水中花

川柳大阪

坊農

柳弘報

ソムリエが味わう為のぶどう狩り

週刊誌イニシャルだけで迷惑し

川柳の友人にいつなれますか

聞かれたら答は一つ元気です

いいよなあ人の心がわかる奴

健康かなファミリ作り老い二人

宮詣で健康が願う千歳飴

友人は何と逃げ足早いこと

健康かな足車内ではじやまな足

戦争の無惨な様子伝えねば

友人の域に頑固も輪をかける

静か過ぎ気になり覗く祖母の室

日記にはイニシャルだけの謎の文

和歌子

まみ子

祥 風

勝

眞 昭

セツ子

雪 子

馬 洗

正 安

竹 二

よろろ

敵 子

桂 子

久 子

須賀夫

芳 子

高¹ 圭

まゆ子

信 醉

喜 楽

末 坊

照 月

多 香

青 道

雅 巢

かよこ

敏

玄人の極意呼吸にあるらしい
さすが玄人おとこの骨を抜いてはる
健やかに傘寿卒寿と欲が出る
不機嫌な様子足音高くなる
涼しさを女の素足に見つけたり

少年の瞳が健やかに問いかける
大阪を離れゼンソク消えました
無医村も健やかだから気にしない
青竹に負けじと折る健やかさ
健やかな老いをいじめる消費税
健やかな地球に核はいりません
いろいろな人いろいろと不況策
波が消すイニシャル失恋の渚
先ず様子見ようと主治医慌てない
初恋の君のイニシャル抱いたまま

川柳塔鹿野みか月

土橋

久しぶり幼時のままのクラス会
久々に第五鈕を開けて干す
久びさに逢えば綻び縫えていた
久しぶりと責めたりしない仏さま
赤とんぼ久しい人を連れてくる
眠りから覚めてお金の山は消え
嬉しいな今朝も普通に目が覚める
痩せ我慢やめて眠った方がよい
空瓶がゴロゴロ眠くなってきた
友達顔で捨て大ついてくる
私の背駝のようなこぶがで
SOSの信号を見逃さぬ

川童 朝子 一歩 まつお 洛醉 一風 柳宏子 希久志 比呂志 鉄心 ダン吉 本蔭棒 金太 重人 柳弘 螢報 菊乃 節子 和枝 ひろ子 節子 房子 和子 野草 くに子 弘子 幸枝 幸子

愛のシグナル出しているのに気がつかぬ
信号と付き合い今を生きている
初めての出会いに信号待ちでした
信号を見て中ジョッキで我慢する
かなしみを識る信号に叱られる
信号に余白などない渡り切る

最後まで読めない信号があった
水筒に酒入れ山に行くおとこ
備前の筒が気に入りの花であり
封筒の札の厚みを読んでいる
筒抜けに悪いニュースが流れてる
筒音も絶えた平和に手を合わせ
一銭の重みを竹の筒に聴く
筒抜けの話が好きなおばあさん
感謝状筒の中から苦笑い
筒咲きの花バツと咲きバツと散る
竹筒に一輪挿して侘び住まい
火筒の響きする処にプレイバック

川柳塔からつ支部

久保

小さい手が支え横綱土俵入り
七人の敵もそれぞれステテコに
空港で孫の笑顔待っている
ときめきの薄れた故郷は遠くなり
頃合いはよしとおもむろ背を叩く
孫連れて娘お客の顔で来る
夏地蔵世間は寒いと言いなさる
よく喋る老化防止の未亡人
潮どきを見て動くのは五十まで

美恵子 かつ乃 かつみ 実満 諷人 富久江 孔美子 保子 汲香 御宣子 睦子 八重子 隆風 富恵 公子 きみ子 石花菜 螢 正剣報 晴翠 弘 夕ミ 幸夫 實 勝視 久仁於 あき 虹汀

徳島へ今年も阿呆になりに行く
松頼と語りあかすか安吾の碑
頼杖を解いて財布を開け直す
ドーナツの穴が大きくなる不況

川柳ささやま

酒井

靖子報

健康に暮せて花が美しい
投げ売りというのに人が集まらぬ
まっすぐに投げたつもりで大人です
靴下の強さへ女うろたえる
老いらくの恋愛やかに夏帽子
還暦を過ぎて世渡り体験す
いつ来ても母が手を振る土橋あり
土の香の匂うふるさと気も緩み
安らぎのなかった亡母へ土を盛る
七転びした人生だから強くなる
ふり上げた鎌によろけて土笑う
強風も時には欲しい女の炎
花手桶今度来るまで泣きませぬ
飽食へねずみ忘れた猫の艶
今度こそ強くなるよという日記

竹原川柳会

時広

一路報

ダイエツトあなのためにしてみます
シャボン玉と遊ぶ童話の中の私
ラストダンスは貴方の腕の中にある
結局は弁の達者に踊らされ
見る阿呆いるから弾む踊りの輪
笛吹けと踊ってくれぬ景気策
静風

七十になつても踊る雀の子

輪の中に入れぬ踊りだつてある

お人好しの私がいづも踊らされ

雲と踊つて少女のままでいたとか

自家製のナスやキユウリはよく踊り

われ米寿すずめ百まで踊らんか

夾竹桃広島の夏祈り満つ

お互いに暑いですすねでつ挨拶

挨拶は暑いですすねえだけでいい

鳴く方もさぞ暑かろう蟬しぐれ

花嫁の金欄緞子は暑くない

暑いから北を網戸にしておこう

暑くなり下着フアッション増えてくる

その上に禁煙やり場のない猛暑

ふるさとの風が恋しい熱帯夜

暑いのにドキドキさせるキヤミソール

平凡な暮らしふたりで皿洗う

結んだままで落ちて離れぬ松葉かな

あじさいも七色ふたりの恋すすむ

小宇宙二人だけだよ蚊帳の中

二人三脚転げたなあと笑い合え

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

透明になるまで懺悔繰り返す

力入れすぎると丸く描けない

儲ける時はストレス感じない

終焉の切符は神に委ねてる

傘寿まだ明鏡止水に遠く居る

透明でないから人間してられる

正宏

節夫

貞子

笑子

白狐

夏喜

淑舟

力

喜美子

喜久恵

八重美

幸子

不朽

菁居

令子

一枝

カツ子

房子

蝸牛

一路

不透明で先が見えない小淵丸

透明なところは神もお見通し

透明な心ほしくて花を買う

透明に生きて私の堅い椅子

政治家の透明誰も信じない

力溜めてハードル越えな蛙の子

取り立てて力はないが世事に長け

核の数それを力という神話

力むなという監督が力んでる

嫁はんは減法弱い力こぶ

母の愛に勝る力が見付からぬ

少し力抜けば周りが見えてくる

力余つて男帆船から落ちる

ハイハイの裏でストレス溜めている

手料理に今日のストレス癒やされる

少年のストレス悪夢誘い出す

灰皿にストレスたまっているいくさ

子には子の切符を持たず改札機

檜山への切符がわりの保険証

天国行きの切符は神に預けとく

乗り換えるのきかぬ切符を握りしめ

不器用でチャンス逃がしている切符

ストレスは消えず二次会三次会

岬川柳会

八十田洞庵報

危ないことわざとしたがる天の邪鬼

汚染する地球の中で逃げられず

夜逃げした危ない元氣今はしい

呑天

豊太

英子

精子

三枝子

富美子

重治

利治

ダン吉

正博

良

千寿子

紀久子

とみ子

公子

稚代

佐代子

寿子

紫香

萬的

三男

紀美女

君枝

克子

年子

ミヤコ

令子

田舎道赤信号も突つ走る

関関が全て握っている人事

序の口でこれが全てと見得を切る

帰省して逢いたい人に花供え

父母の墓参促すように彼岸花

バスツアー危ないからと保険かけ

塩焼の串が危ない娘の手つき

頼つたメーバンクの金つまり

一回は危険な橋も渡らねば

サーカスは危ない技で人気呼ぶ

危ないと承知で乗った泥の舟

家の中危ない足元病んで知る

ときめいて危ない橋を渡る恋

崖つぶち立たされやつと本気出す

婚約時バラ色でした何もかも

危険だな青いリングの火遊びは

子の船出操る權も危なくて

カナ文字の便り全てを許す母

サークル樺標

小林

一夫報

キヤミソール時の流れが闊歩する

流れても流れても歌持つている

無党派が政治の流れ変えはじめ

人の流れ誰もわたしに気がつかぬ

流れ流れて嘘がまことになっている

聞く耳を持たぬ背中を流している

感謝して座る椅子あり日に三度

ひもじくて本を沢山買すぎる

流れ読み右に左に椅子を変え

八重

幸子

鉄男

和美

通江

孝子

悦子

伸博

ミチエ

庄六

朋子

みつ子

里子

ユミ子

とみ

淑子

洞庵

勇

房子

あずき

正坊

みつ子

いわゑ

喜美子

希久子

楓楽

雅子

老人医療あなた老いたと届けられ
まつり終つて校庭に雨降りだした

智恵子
一夫

城北川柳会

神夏磯典子報

夏つばめ一行ですむ伝言板

難問が解けたら自慢したくなる

お隣と仲良くしたい低い堀

聞く耳は持たぬと固い座りよう

白線を堀に格式ほこる寺

同じような運命と知つて堀がとれ

あでやかに粧つ心裏で泣く

なにくそとブライド持つて生きようぜ

華やかに自分史少し嘘を書き

ブライドの中身は赤いガラス玉

ブライドの吃水線が重くなる

ワールドカップ世界の堀は高すぎた

小引出したくさん持つて聞いてくれ

採血は下手だが若さに我慢する

好奇心受けついで行くのも遺産

回遊館魚に顔を覗かれる

なるようになるさと気持ちとりなおす

華やかな舞台の裏にもある嫉妬

いい噂聞いて鏡も笑い笑顔

襲名の舞台にずらり五つ紋

耳病んで花の吐息を聞きもたす

ブライドも包んで贈る胡蝶蘭

水琴窟耳を澄ませば心和らぐ

ブライドを捨てると腰が曲りだす

夫婦茶碗茶しに語る今日のこと

華やかな過去追憶の走馬灯
驚いて話そらした急カーブ
じつくりと解こう二人のもつれ糸
うたかたのいのちを燃やす恋蜜
ブライドを保つて父は勝ち譲る

三幸川柳教室

三宅

行儀よい記念写真の膝小僧

八起き目の力を膝にためておく

日光のぬむり猫より膝のぬこ

立膝の紅い咲阿が小気味よい

無理させた膝の謀反に泣かされる

母の歳越えてもう泣く膝がない

膝詰めで迫る正義という刃

ようやくに悟つて遊ぶことにする

傷跡をようやく埋めたのは時間

未完ばかりでようやくという時がない

神の手に委ねようやく風いである

軋む音にようやく慣れてきた命

エプロンを外しようやく私なり

生きぬいてようやく纏う花衣

年金が長生きせよと旅に出る

合掌でサンドイッチになる邪念

い加減くたびれました笑い皺

呼吸とめて体重計の上に乗る

ピンボケの方が美人でお気に入り

ねむれない夜はヘソクリ出してみる

知りもせぬあの世とやらを説く僧侶

大物のクシャミが株価狂わせる

倫子
とし子

保州報

正甫

起世子

桂香

朱夏

町子

かず子

百合子

靖子

秀男

和代

公子

正一

昭枝

初子

美寿子

美子

当代

めぐみ

章子

三千子

嘉平

和子

全国に何か所もある日本一
逆立ちで見てもおんなじピカソの絵
形状記憶されていつもの道帰る
母の座にいつもの母が居る安堵
水面下いつも蠢く影ひとつ
貴方が頼りいつもその手で嵌められる
母さんにいつもかなわぬ慰加減
徹からいつも消えない懺悔録

うぶみ川柳会

西村

冷蔵庫の中まで不況風が吹く

窮地に立ち冷静さまで揺れ動く

敵討ち称賛された日の悪夢

俺に似てルースな癖が映つてる

しみじみとガラスコップに映すかお

あのときの悲しみだけが目に映る

控え目に映る一途な愛もある

鏡からわたしいくつに見えますか

白鳥の影水面に映えて梅雨さなか

雑巾が奮闘してる梅雨晴れ間

若者に負けぬと卒寿奮起する

包丁の興奮あとのある刺身

敗戦の苦杯を糧に奮い立つ

奮起する薬酒屋で買つて飲む

ガラスコップ汗をかいてる琥珀色

渡されたガラスのくつに足合わす

裏切りの心で曇りガラス拭く

カーテンが開かぬ隣のガラス窓

すりガラスひとの心がよみにくい

保州
さち子
登美代
鉄治
千秀
みね

健三郎

黙光報

鬼桜

あづま

葉土人

喬水

一夫

睦子

きみ子

雄人

和歌子

登美枝

ユリ子

宣子

良雄

黙光

天雀

正和

彰夫

ひろ子

螢

冷やつことつても好きなガラス鉢

川柳岩出

小倉

アサ報

華子

握る手に語る言葉を秘めている

塩焼きの姿になった鮎の顔

若鮎のようにありたい夢多彩

瀬を上がる鮎を待つてる竿あまた

握る手の捌きも賞味するお寿司

同窓会握る手と手が過去を呼ぶ

川底で値踏みされてる稚魚の鮎

ふるりの無い養殖の太い鮎

絵日記に鮎も泳いで夏休み

鍵っ子の願いは温い握り飯

握る手に見とれて逃がす好きな皿

鮎よりも縄張り競う解禁日

ほろ酔いで握るマイクで疲れとる

握手して心と心重ね合う

無器用でハンドル握ることもない

淡泊で人に好かれる鮎の味

一匹の鮎に涼気を与えられ

川柳東大阪

森下

愛論報

告げ口は首を洗ってからにする

神経質と思われほど手を洗う

大根を白く洗っている無欲

さからって自分を主張する息子

菜園のわが家の匂をお裾分け

財布から今日の機嫌が顔を出す

正直 ふみえ 和子 重徳 昌一 昌子 愛子 精子 保子 春子 正義 哲男 智恵子 たねゑ 英子 アサ

告白をすれば視野から逃げて行く

少年の視野に酸素を送らねば

視野にない男にもらう花の束

進化論の視野にDNAがある

親の愛たつぷり受けて寄り付かず

大和路でたつぷり受けて寄り付かず

合格をしてから芯が太くなる

ビー玉の芯に幼き頃の空

正直な男に堅い芯がある

殺し文句の一つに揺れる花の芯

天空に伸びてキノキオ鼻の芯

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

一片の土器へ復活する歴史

復活をすればライバル増えてきた

復活をした薬(ひこぼと)に明日の夢

禁煙のさてそれからの手のやり場

あと五分待つ気煙草の火をつける

吸殻が増えて相談まだ続く

ポスターがあつたね煙草すう美人

灰皿が溜まつたほどに知恵が出す

極楽に行くには舌が長過ぎる

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

精出した西瓜畑の露光る

旗立てて西瓜の車送り出す

七夕に西瓜も飾り星眺め

夏バテに西瓜水分補給する

ワゴン車で西瓜めざして里帰り

治也 緑

朝子

元紀

恭昌

萬的

東雲

雅文

正博

湖風

愛論

あずき

欣史子

シマ子

田実子

弘直

能子

香住

喜美子

清芳

公美枝

信敬

鈴枝

静江

弘子

冷えるまで井戸で西瓜が水あびる

いい汗をはめる西瓜が冷えている

初生りの西瓜仏へ先ず供え

名水に冷やした西瓜舌つづみ

童心の笑顔がさねて西瓜食う

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

いにしへのロマン塗り込む寺の壁

八十路にも彩塗る自負が生きている

塗る紅にかくし切れない老いの坂

塗り薬で夕べの傷は癒やしとく

泥舟と知って乗るのも親の愛

あがなえぬ思いを託げる紙の舟

年追うて案山子も派手になる田圃

派手に演じて派手に倒産した会社

あこがれているから全部好きなのよ

余命表あこがれだけは持っている

夢にまでみたあこがれのユニホーム

人柄に惚れてあこがれ持ち続け

甲子園あこがれだった夢だった

北方領土日本に戻る日を憶う

することがないから猫は欠伸する

パイアグラ貰って使って死なはった

人と土いつかひとつの風になる

ひまわりのような友から聞く悩み

うれしさも派手さもパリーの夜と昼

自分史に派手な歴史が見当らぬ

一世一代派手にやっても知れたもの

嫁はんをとるときき替えてみたくなる

康女

智恵子

久子

和代

雄々

満寿藏

ゞ女

よ志子

波留吉

靖巳

澄子

大輔

とし子

一笛

諷云児

泰雄

レイ子

晴美

紫香

砂輝守

柳宏子

比ろ志

スミ子

茶の子

克治

秀夫

鬼遊

服替えてみても短足そのまんま
性格を替える薬はないものか
畳替え十円玉も出てこない

笑い袋の種とり替えて病んでい
る
寅さんにあこがれ真冬でも素足
あこがれをいっぱい持ったシャボン玉
何もせぬ夫口出しばかりする
さりげなく生きさりげなくひとと会う

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

貧乏神同棲する気が出てゆかぬ
電話では言えぬ無心の便り書く
震度三ぐらいで置こう痴話ゲンカ
正座して心澄む頃孫が来る
通り雨物干し竿が走り出す
人間味あるから部下も従いてくる
車間距離取りつつ仲のよい隣
父さんの弱い処を兎がしゃべる
忘れたりわすれられたり夫婦箸
有り金をはたいた株が天下落
限りなく大きな母の思いやり
梅雨晴れにチョッピリ見せた虹の橋
自立して命日だけは世話になる
湧き水の澄んだ流れで葉を洗い
貴方さえ居れば私は生きられる
追い風をじっと待ってる竹トンボ
竹トンボ幼なき夢を乗せて飛ぶ
人生の垢も刻んだ笑いジワ
先輩の過ぎ去りし影追いかけて

あやめ 稲子 節子 石舟 重人 白漢子 白洋 捨楽 マツエ あきら 吟笑 正雪 かおり 文仙 坊太郎 いさむ 放任 節子 輝夫 治延 ひかり はつ恵 よしみ くに子 なみ子

子育ても済まして学ぶ夜の筆

岸和田川柳会

長谷川呂万報

流言飛語と知りつつ耳をそばだてる
流石だな話術鮮やか元弁士
流言も逆手にスターのし上がる
流言に輪をかけたのはおばちゃんだ
着いたなら電話一本しろと母
口笛が三ついそいそ窓があく
医者に友作って置こう古稀の春
連絡網ついでの話に花が咲き
異常なしこの連絡を待っていた
初孫の産声聞かす電話口
A入院Zが聞いたご臨終
携電をわざと忘れて家を出る
連絡橋出来て汽笛が泣いている
紅白の綱で安珍鐘の中
五十年妻のロープに踊り生き
ロープとムチが彼女の部屋に置いてある
引き返す勇氣も持っていたザイル
ひとすじのロープへ命あずける海女
港には女がいますもやい綱
とりぶんはきつちり持った二日酔い
捕り物帳わけまえ不服な奴を追え
わけまえのもつれてギャンケ仲間割れ
わけまえたお方ばかりで息詰まり
わけまえがすつたもんだの奉加帳
あざやかな服着て祖母がパチンコに
あざやかに客を騙してはくそえむ

チカエ 盛之 俣子 すみえ ダン吉 洋 白光子 敏光 苑子 路子 一齋 蛙城 愿 富志子 美津江 辰郎 松風 洞庵 さよ子 金太 信博 美智子 東吉 甚一 狸村 和歌子 東雲

天神の祭あざやか船渡御
あざやかに妻が飲み干す大ジョッキ
まなつらに亡母あざやかに生きている

川柳塔ぶくべ

橋本多哥由報

幸福を運ぶ女神が微笑んだ
喧しく言えば子供は貝になる
案するよりうまく運んで離縁した
夏の海光り若人よんでいる
夏の夜に浴衣で二人地酒飲む

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

雲に乗りあの世とやらを見学に
総理には誰がなつても雲の中
似た人に出会いちよつと声をかけ
W杯ちよつとバリーへサポートしに
ちよつとの間検査入院してきます
若い娘とリズム合わない年になり
鐘三つ鳴らした唄にあるリズム
遅起きはバイオリズムのせいにする
私の余白時々雲が出て困る
ちよつとだけ味が違うな姑の腕
ちよつとした仕事も女ニューハーフ
長刀が雲を突き刺す京の夏
八月十五日忘れぬものにキノコ雲
シーソーのリズムが合わぬ二人です
お小言をリズムを取って聞き流す
指からめちよつと好きですおさな恋
ちよつとだけ焼けたところでつまみ食い

昭二 呂万 ひで 輪多朗 春恵 寛子 信子 多哥由 道子 風子 真由美 清澄 好治 富美子 久美子 郁子 夢之助 吉昭 満寿蔵 柳宏子 加寿老 晴子 喜久造 英雄

指揮棒に想いを込めて取るリズム
コンキチンいつものリズムが夏を呼ぶ
雨になる雲の姿を孫に言い
雲隠れ肌を焼かずと頬被り
梅雨空の雲にゆうたん剥がしたい
レオタード野心の汗がちよつと飛び
出る前に娘の口紅をちよつと借り

堺川柳会

河内

月子報

幻の弧影を天に虹の橋
晩成を信じて親の汗つづく
銀婚の頃はまだまだ甘かった
軽やかな話が好きなパイプ椅子
マイペースと決めて走ったことがない
手を繋ぐそれが虹かも知れません
鈍行で座ってこういう宇宙まで
仲良しの喧嘩相手が病気で
思いきり夫叩いて蚊はひらり
鈍くてもたまにはヒスを起こします
貧乏ゆすりの癖が直らぬ古い椅子
鈍いのを売り物にして生き延びる
思い出に残る今宵にしませんか
狙われるくせに油断の金運び
笑われるくせにも知らず笑ってる
生命線君に合せて引き延ばす
決断の甘さへゆれる段梯子
笑い声で兎小屋が揺れている私
鈍いから大事にされている私
末っ子が一番好きな父の椅子

東園 やすよ 鐵雄 京子 久子 野鶴 鈴子 春蘭 勇太 泰子 りつえ 美代子 扶美代 みつこ 冬虹 かりん 満州 昭子 半銭 哲平 健吾 舞夢 日の出 寿美 洞庵 伽羅 柳宏子

鈍そうに見えても不倫まめでんな
幸せて儲けばなしに鈍くなる
考えとくと言われて返事待っている
愚痴らぬと決めたら俺が見えだした
胎教の頃からかけていた期待
アサリ貝今宵限りの命吹く
ふかふかの椅子で錯覚させられる
狙われる程もないのに腰に巻き
向い合う老後の椅子を修理する
決心がついたポストの底の音

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

ポンポンと叩かれ西瓜値が決まり
説教に誠を砕く愛がある
石棺の中に砕けた刻がある
砕かれて砕かれてまだ生きている
明日もまた心を砕く土砕く
地球儀のどこかで夢を砕く音
香水瓶砕いて殺意眠らせる
子の居ない西瓜一つを持って余す
猫だけが知ってる今日のメロドラマ
太りすぎ猫はネズミをもう追わぬ
安来節どじょうを掴む芸に沸く
草むしりぬるりとみみず顔を出し
泥化粧おんなごころの燃え盛る
猫舌で熱かんを飲む義理を飲む
朝帰りこっそり猫の足になる
猫の爪でやられた傷とこまかされ
ぬるぬるになるまで我慢するサウナ

東雲 アキ 鐘造 つづや 妻子 寿恵子 小雪 梓 五月 紀美女 凡天子 銀波 一艘 良介 島 ぶさゑ ツネ 愁女 北歩 よしのぶ 慕情 隼人 花匠 順風 井蛙 一花

猫の髭離婚話を聞いている
子の数に切った西瓜の賑やかさ
情念をこまかく砕く酒もある
故里の言葉で西瓜売りに来る

横浜おおば川柳会

菱田

満秋報

色褪せぬ女でいたいネジを巻く
鍵掛ける子供部屋にもある主張
牧草をロールに巻いて冬を待つ
終戦日あの日の僕を巻きもどす
部屋からの富士に値段がついている
善と悪 私の中で渦を巻く
合併に悲願のポスト泡となり
せり勝ったポストもただの通過点
新盆で亡母の部屋にも笑い声
糸巻きへお膳の脚も使われる
お飾りのポスト女性に一つだけ
包帯が優しい言葉掛けさせる
家中の期待集めて晒し巻く
大部屋の夢が実った助演賞
目標のポストへ野心まだ捨てず
思いきり部屋片付けてから不便
燃えかすの心に残るネジを巻く
一隅に老いの権利が生きている
単身の部屋に忘れたいふりの紅
鉢巻とソイヤに神輿身を委せ
すねかじる手紙ポストにお辞儀する
落ち込めばネジ巻く人のいる安堵
定退の錆びつくネジを妻が巻き

黙人 しげる 花峯 五楽庵 良子 笑子 雅子 徳子 道子 和可 絹子 充子 芳江 歌子 為佐子 亜希子 純子 広和 見早子 街湖 羊子 句多留 鈴美 三郎 ただお 十三子 政勝

北側の部屋で再起の爪を研ぐ
ポストまで先ずは病後の足慣らし
疑ってポストへ入れた手をかまれ

南大阪川柳会

吉川

寿美報

人情は紙泥酔はほつとかれ
泥酔で転んだ傷は黙ってる
泥酔を回収してゆく終電車
泥酔の出来ない訳が胸にある
世渡りへ内助の功という手柄
自分史のどの頁にもない手柄
定退の刑事手柄は口にせず
セールの汗は手柄の棒グラフ
お手柄は苦節に耐えた足の裏
お立台影のヒーローたえてる
相槌が適切すぎる敵だらう
適切なところで手を打つ妥協ぐせ
適切な露出度知らぬキャミソール
レモン齧ってさて適切な策を練る
初舞台十年の刻無駄でなし
欺されて拍手送っている手品
雲は手品師いろいろな顔をする
手品より話術で客を魅了する
マジシャンの手際へ鳩も花もたせ
ミスばかり夫の手品で和む夏
連休へ出好きの母のお供する
北も南もつまいコーヒー知っている
からんころん出歩き好きならびた下駄
出好きだが一人の旅は寂しいね

潮華 あらた 満秋 章久 正博 頂留子 道子 朝子 信治 柳宏子 志華子 ひさ乃 道子 楓楽 千里 八斗 萬的 直子 透太 重人 文秋 憲太郎 叙子 庸佑 東雲 白洋 咲

職退いて妻の出好きに驚きぬ
泥酔がバトカー止める北新地
目分量身につけている母の匙
少子化に嫁がお手柄三人目
下積みの手柄上司に陽が当る
化粧の皮すっかりはげた美女の酒

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

かわい娘が夜店のラムネ立ち飲みし
ヘルメット二つ並べて涼をとる
灼熱の夏が好きだという若さ
自慢げに子あじばっかり釣って来る
そうめんのやさしさ夏の喉通る
ママの愛ほしくて反抗してみせる
新しい帽子をはめる冷たい目
ちよんとのせると行き先知っているベレー
バラソルにおいてきぼりの夏帽子
炎天下矢張りよろしい夏帽子
貸農園むぎわら帽の一年生
八十余年歩きつかれた夏帽子
和解できはつとひと息夏の雨
あれこれと被って買った夏帽子
万馬券当てたらお墓買うつもり
墓掃除しながら亡母と話する
父の肩の踏み台にかしてやる
夏帽子暑さしのぎと禿かくし
風鈴が我が家に夏をつれて来る
反抗期遅いですよと妻六十
夢でした大きな庭のマイホーム

凡子 たもつ 雅文 慶一 柳伸 春江 知佐子 美代子 民子 明宏 八寿子 剛治 ミツ子 道子 春江 君江 一風 幸枝 隆盛 寿代 信子 司 友甫 逸子 美智子

ひまわりも帽子がほしい炎天下
夏休み今年はどこへつれてやろ
ヘルメット暑さに耐える二度の職
よく似合う祖母の帽子は素敵です
顔に合う帽子無いのかぶらばる
うらおもて無くして浮気すぐばる
偽札からおもて見て釣りを出す
にぶい人恋のアクセル強く踏む
縦縞の帽子が弱い甲子園

川柳藤井寺

高田美代子報

二三日考えますと逃げておく
軽い病気やってくるうちに傘寿なり
リストラの嵐に耐える軽い椅子
軽輩に職責だけは重く課し
軽い男だ二転三転して消える
軽すぎてジョークは風に乗り切れず
心電図命の軽さふと思ふ
指切りを軽くないなしている熟女
妻の留守空気が入れ替え深呼吸
あの人があるとき空気が動き出す
山の空気が仲良ししてるアバンギャル
空気のような軽い返事は妻の声
ふるりの空気に傷を癒やされる
妻のこと空気がなんて減相な
たっぷり空気のなかで飢えている
根回して空気がだめている会議
孫が来て初老の空気が吹き飛ばす
花一輪摘んで小さな祝い膳

朝子 一 道 ますみ トシエ まさと 祐子 明子 鬼遊 敦子 宗一 和樹 史郎 和子 悦子 花梢 アキ 三郎 かつみ みよ子 恒雄 政代 六点 扶美代 鐘造 桂子 昌子

芽を摘んで私の過去を消すつもり
蓬摘む彼岸の夕陽好きだから
摘み草で飢えをしのいだ事もある
つまんではみるけど買ったことがない
私の心摘んだ男を日に晒す
伸びる芽を摘んだか覇気のない子供
不況の芽摘みと策が空回り
何ともなかつたように今日を摘む
灰になるまでの喜劇を摘んでいる
摘み切れぬ罪を余生に抱いたまま

川柳会製花

坂田和歌子報

出発の一步を額に入れておく
誘蛾灯おもしろい話ばかりする
明るくて眠れず橋の下へ行く
太陽が吠え雷が鳴り出した
日本晴れ今日の式典実を結ぶ
ざくろの実女の味方してくれる
集まれば笑いの渦に巻き込まれ
集いの中に気になる女がひとりいる
栗の実が弾けて異議を申し立て
柿の実を猿に取られてくやし泣き
スタンドが明るい宿で眠れない
太陽に今日を預けるほかはない
新婚の門出に米が降ってくる
川柳の実を食ってから狂い出す
明るいが大きな事を言う酒だ
明るくて迎え火に酔う新仏
どんぐりの本音が集う店開き

治子 春蘭 昭子 正一 大八 絹歌 志洋 美代子 美輔 公房 宣子 悦子 大漁 螢 一夫 月子 輪多朗 和枝 石花菜 夏生 公弘 東雲 鬼桜 遊子 蟹郎 陸子

出発の背なへ期待がのしかかる
太陽を画面いっぱい元氣な子
太陽と日傘くるくる仲が良い
新顔へ期待がかかる出発だ
水着が集う浜を望遠鏡で見る
孫が描く太陽いつもよく笑う
実力でパパは大きな手になった
何にかこつて人間群れたがり
としげに集う虫にはキンチョール
その道にちよつと明るい土瓶口
秘め事を語るに部屋が明る過ぎ
明るさは営業してる証です
退屈が集い噂に花が咲き

翠洋会

児玉

笑顔の中にかすかに見える娘の涙
夫から男を見る眼教えられ
四十年いまだ夫が解りません
しみじみと夫の寝顔みる夜更け
傾けた耳へ噂をうつされる
傾いた屋根にも一つ流し台
美人妻めとり夫の苦勞性
医者が首傾ける日の尿検査
四季報を載せたら棚が傾いた
肩書きが消えた夫が円くなる
何も出来ぬ私に傾くやじろべえ
男なら泣くな監督目に涙
リストラの夫あれから帰らない
賑やかに婦唱夫随のバスツアー

節子 正和 一京 典子 きみ子 季芳 玲子 天笑 勝見 ひろこ 幸子 行男 美恵子 蛙報 暁子 洋子 孝子 蕉子 志華子 絹子 久峰 正雄 靖巳 周信 真砂 正坊 佳秋 喜美子

夫とは無二の戦友かも知れぬ
涙すぐ出せる女にだまされて
夫の座あけた儘です七回忌
おいしかったとお義理で箸をおく夫
パレットに祭りの彩がためてこない
一分で泣ける涙をためて
感謝祭ばかりしている百貨店
傾いて現物給与社の事情
孫ふたり泣いて笑って益かえり
夏祭り淡い思い出よみがえり
産卵のカメの涙と思いたい
これが夫かとしつと見詰める時がある
傾いた政治危惧の鐘が鳴る
傾いたままの日本ですまされぬ
神様が昼寝している夏祭り

かわはら川柳会

上田 俊路報

はめられてハープ作りも自信もち
ほめ合つて暮す夫婦で睦まじい
かわいいう子はめて叱つてしつけする
姑はめてひとつあがった嫁の地位
はめすぎた言葉落ちつく場所がない
朝顔の花も実になる秋近し
被爆地の平和の願いいつ届く
原爆忌当時を偲び千羽折る
八月に被ばく手帳が語りだす
はびきの市民川柳会 安芸田泰子報
大殺界ですと明るい声が言う
縷子 道子 茂登子 静子 悦子 泰良 秀子 ふじ子 總 俊路 澄子 千梢 会美 千歩 義雲 宣司 恭昌 叔子 日出子 さと美 蛙 照子 光子 鬼遊

落着いて聞けば何でもない話

大臣の首が變つて先ず減税

息子ならどうするピアスした茶髪

海越えて子に大ぶりの握り飯

明日の夢信じて歩く裏通り

くたびれた割符が胸で病んでゐる

自信の足も老いには勝てぬ万歩計

八月の誓い私は生きること

宴たけなわ父の脳裏に幼い日

スケジュール見ればどの日も金が必要

マンションがいやだと大が家出する

直球を投げられまぶしいなと思つ

通り過ぎ戻つて買ったサマージャンボ

肩書きをつけて派閥の支持固め

お喋りの孫と退屈せぬままに

風鈴がじつと待つてゐる夏の風

單身赴任豆電球を消さず出る

禁煙に挑む明日を待つてゐる

当確が出ると別人かと思つ

接待で背骨一本抜いておく

接待の中に潜んだ罠ひとつ

利権などない接待にある和み

接待の酒なみなみと注いでくれ

釣りマニア不在投票して出かけ

いい趣味と譽めてマニアへ機嫌とり

休日とは古物の埃と暮す彼

大橋を渡つて今年も見ると阿呆

短冊に景氣回復託し添え

ベテランの主婦が刻んだ葱を買つ

晋

利武

重人

みつこ

志洋

りつえ

四三郎

ダン吉

和歌子

和歌子

僕 杏

敦子

信子

俊男

末一

美喜

辰子

久仁雄

吐來

一壺

昇

庸佑

たけし

二南

専平

忠宏

桂子

かつみ

昭平

泰子

弓削川柳社創立50周年記念
紋土600号記念・岡山県芸術祭参加

第50回西日本川柳大会

参加吟行のお知らせ

とき 平成10年10月31日(土)・11月1日(日)

集合 10月31日午前9時・JR天王寺駅東出口

ところ 倉敷大原美術館・チボリ公園 見学

宿泊 大原美術館近くの民宿

「かも井」(電話086-422-4898)

11月1日朝、倉敷を出発

川柳大会会場(岡山県久米南町中央公民館)

10時半出句締切までに会場到着

費用 二五〇〇円

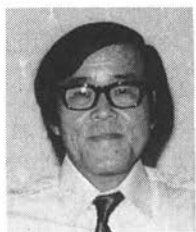
募集人員 三〇名(先着順受け)

募集締切 10月15日(木)

◎大会の詳細は本誌裏表紙(表四)に掲載してあります。

申込みは川柳塔本社事務所まで

担当 板尾 岳人



福崎しげおさんを偲んで

井上 喜 醉

福崎しげおさんは、今年になってから体調を崩されて検査入院をして手術され、その後は自宅にて療養中でした。本人は病名も知り悩んでいたようで大変な心中であったと思いますが、退職以来一度も会って居らず、病気を知り友人と共に六月十五日に自宅へお見舞に参りましたが、交通局退職後十二年振りの再会でしたが病床というのは残念でした。ただ、同氏の表情が明るくて雑談もでき、これなら大丈夫だと安心をして帰りました。それが急変して天国へ逝かれてしまい残念でなりません。柳人の友情として私に出来ることは同氏の作品を少しでも発表することで、柳人の皆さまに本人の柳歴を紹介したいと思います。

私が同氏と知りあったのは大阪府交通局時代に同じ職場で顔を合わすようになってからでした。当時は職場川柳も人が集まらず困っていました。偶々、同氏に声を掛けてみる

と快く承諾していただき、それが福崎しげおさんの川柳のスタートだったようです。それから職場で顔が合えば指導と言うよりも川柳の事ばかり話していた記憶があります。私と同氏と職場で川柳を出来るのは一年程しかないで、私が定年になるまでに川柳大阪と和歌山川柳みかんの方へ投句の道をつけ、川柳上達のアドバイスといたしました。

それから同氏は川柳の楽しさを投句の中で発見されて、柳人の仲間入りをされ自分自身の川柳の世界を築かれたようでした。常にコツコツと作句、天狗になることもなく、投句のみの楽しさで川柳を愛されたようでした。特に川柳みかんへの投句は燃えたものでしょう。昭和六十年の川柳みかん第一五三号から平成三年の第一九五号の終刊まで投句されています。みかん集の中より同氏の作品五句抜粋させていただきます。

酔いざまし心づくしの柿一つ

列島が平面図になる空の旅

善少し積んだ気になる赤い羽根

窓際も住めば都の日向ぼこ

裏のない男で軽く見られてる

七年間の川柳しんぐう吟社への投句が終りましたので、私が勤務していた大阪府公園協会文化部の川柳はまでらへの協力を平成三年九月よりお願いをいたしました。その時代の同氏の作品は生活と家庭を描いた平和な句が沢山ありました。

川柳はまでら自選集より五句

さわやかな峠を越える駄馬の背な

関白と良い気にさせて妻利口

土踏ますいじめて明日へ備えてる

豊かさの不幸は美味いと言わぬ箸

社長より医者が上座のクラス会

川柳大阪への参加は昭和五十九年からですが、活躍があればこそ川柳塔社同人へ推薦されたものと信じます。

將軍の氣持で砂丘の馬に乗り

母の味グルメの世界に無い温み

川柳大阪三五〇号までの「雫」より

以上、同氏の柳歴を紹介させていただきましたが、川柳を陰で支えて頑張った故人の霊へせめてもの供養になればと思っています。

合 掌

第49回市民文化祭参加 西宮市川柳大会

と き 11月1日(日) 正午開場

ところ 西宮市民会館4階中会議室
(市役所南隣)(阪神西宮駅
5分・JR西宮駅15分)

兼題(各題2句・席題なし・午後1時半締切)

「不気味」 村上氷筆 選
「慌てる」 松本正とし 選
「ショック」 内藤光枝 選
「粘る」 門谷たず子 選
「玄関」 石井冬魚 選
「おっとり」 福島直球 選

会 費 1000円(作品集郵送)

投 句 10月20日までに80円切手7枚を
同封、便箋1枚に6題各2句、
計12句連記して下記へ

〒662-0023 西宮市城山12-8

水無瀬富久恵宛

主 催 西宮北口川柳会ほか

第25回堺まつり・川柳堺350号 記念誌上川柳大会

題と選者

「ひびく」 池 森子・岩佐ダン吉 選
「差」 板野美子・中田たつお 選
「岬」 川上富湖・波部 白洋 選
「太陽」 春城年代・河内 天笑 選

用 紙 川柳塔柳箋または同じ大きさの
用紙に1題2句連記で、左右に
(A・B)(A・B)と書き分ける。
(1題ずつ別々に合計4枚)

投句料 1000円(郵便小為替)

投句締切 平成10年10月10日

なお、川柳堺10月例会にかわるものとする。

投句先 〒593-8305

堺市堀上緑町2丁16-3

河内天笑方

堺 川 柳 会

第45回文化芸術・芸能祭 八尾市川柳大会

と き 11月3日(祝) 正午開場

ところ 八尾文化会館4F第1会議室
(近鉄八尾駅下車・西武デパート東隣)

宿題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「貴」 三崎規正 選
「内」 河内月子 選
「音」 杉森節子 選
「木綿」 高橋夕花 選
「信」 高田美代子 選
「頭」 梶川雄次郎 選
「河(川)」 土田欣之 選

会 費 2000円(作品集・鉢植花・軽食呈)

懇親宴 3500円(当日受付)

主 催 八尾市・八尾市教育委員会
八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会

後 援 八尾市民川柳会
川柳クラブ「わたの花」

寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(祝) 正午開場

ところ 寝屋川市立総合センター4階
(京阪寝屋川市駅下車・バス西口
①③乗場より)

兼題(各題2句・席題なし・午後1時半締切)

「好物」 里 小路 選
「輪」 門谷たず子 選
「スランプ」 岡 良三 選
「互角」 玉置重人 選
「対策」 山本翠公 選
「輝く」 橋高薫風 選

会 費 1000円(記念品・入選句集呈)

賞 各題秀句に賞状と記念品

投 句 10月末まで必着(郵便券400円)

投句先 〒572-0063

寝屋川市春日町9-9

高田博泉内 川柳ねやがわ宛

川柳塔奈良創立句会

と き 平成10年10月10日（土・祝）
開場午前11時・午後1時締切
ところ 王寺町「やわらぎ会館」
JR大和路線・王寺駅下車徒歩2分
王寺町役場西隣

おはなし 川柳塔相談役 西田 柳宏子 氏
兼題と選者

「奈良」 奈良市 米田 恭昌 選
「ひとり」 大阪市 西出 楓 楽 選
「夜明け」 堺市 河内 天笑 選

○各題3句以内・当日席題あり

参加費 500円

投句のみの方は9月30日までに
切手300円同封の上、事務局まで

事務局 〒636-0144

生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23
中原比呂志（電話0745-75-3655）

岸和田市文化祭参加 第48回 岸和田市民川柳大会

と き 10月17日（土）正午開場
ところ 岸和田市立春木市民センター
（多目的ホール）

おはなし 西田 柳宏子 氏
兼題と選者（各題2句・午後1時半締切）

「生きる」 大内 朝子 選
「責任」 川上 富湖 選
「子約」 中田 たつお 選
「バランス」 奥田 みつ子 選
「咳」 阿 萬 萬 的 選
「ひとすじ」 橘 高 薫 風 選

○席題なし・欠席投句拝辞

会 費 1500円（参加賞・軽食・大会誌呈）

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞ほか

主 催 岸 和 田 市
岸和田市教育委員会

東大阪市文化祭参加 東大阪市民川柳大会

と き 10月18日（日）
正午開場・締切1時
ところ 東大阪市立社会教育センター
3F（近鉄布施駅北へ5分）

ビデオ放映「まちかど探訪」「生駒山麓」

宿題と選者（各題2句・出席者に限る）

「渡 る」 岩佐 ダン吉 選
「売 る」 筒井 祥文 選
「嘘」 塩谷 幸子 選
「生きがい」 久保田 元紀 選
「明日」 堀江 としを 選
「髪」 住田 英比古 選
「優しい」 西田 柳宏子 選

会 費 1000円（各題秀吟賞・記念品・
発表誌呈）

懇親宴 3000円（当日受付）

主 催 東大阪市文化連盟
東大阪市民川柳同好会

吹田市民川柳大会

と き 10月25日（日）午前11時開場
ところ 吹田市文化会館 メシアター3F
梅田より北千里行で15分
（阪急吹田駅西口前）

お 話 高杉 鬼遊氏
宿題と選者（各題2句・午後1時締切）

「絆」 西口 いわゑ 選
「褒める」 内 藤 光 枝 選
「気紛れ」 堀江 としを 選
「避ける」 島田 握夢 選
「おまえ」 梶川 雄次郎 選

席 題 1題当日発表 川島 颯云児 選

会 費 1000円（参加賞・秀吟賞呈）

懇親会 4000円（10月15日までに事務局へ）

事務局 早崎和子（☎06-381-2431）

吹田市教育委員会
主 催 吹田市文化団体協議会
吹 田 川 柳 会

柳界展望

新同人紹介

鈴木 トヨ子
— 公一・典子推薦 —

播本 充子
— 薫風・満秋推薦 —

開川柳大会で本社同人吉川寿美さんが平成9年度奈良新聞柳壇秀佳吟賞を受賞。

★都大路川柳社は創立20周年記念川柳大会を8月30日からすま京都ホテルで三九一名が出席して開かれた。

★しまね文芸フェスタ'98川柳大会は8月23日、出雲市の厚生年金会館で開催され本社同人の秀句は左の通り。

お寺さんのうしろで汗が引いていく 原 章峰
地に着いたあとはへちまも考える 八木千代
逢いたくて受話器を握る 雨しきり 小玉満江

★8月23日、第29回奈良新聞柳壇大会は11月7日、市民会館で開かれる。兼題は幕つ・紙・どんどん・漫画竹・一緒の六題、各題二句

★第22回茗賞川柳大会は8月30日、ホテルモナーク

★第4回出雲総合芸術文化祭川柳大会が11月7日、市民会館で開かれる。兼題は幕つ・紙・どんどん・漫画竹・一緒の六題、各題二句

吉本川柳

選評 河内天笑

第1回「食べる」(第2回「好き」12月末)
投句先 5475 大阪市中央区難波千日前11-6
5007 吉本文芸館(06-643-7799)

投句締切 平成10年10月末(隔月開催)
投句要項 便箋に3句以内 80円切手5枚同封(作品集代)

掲載誌 月刊『よしもと』
入選発表と 11月26日(金)午後6時-8時
没句評句会 吉本文芸館(ナンバ花月東隣)

鳥取で開かれ、本社同人の秀句は次のとおり。

辛口の酒で男を磨かんか

新家 完司

ばんやりと二酸化炭素吐いている 新家 完司
働きすぎたのか笑わなくなった 松本 文子

★鳥取県川柳作家連盟は9月27日、しいたけ会館「対翠閣」で創立記念川柳文芸大会を開催。本社同人の杉本孝男・岩原喬水・小谷美ツ千・新家元司の各氏が選者をつとめた。

理事長が兼題選者、柳宏子相談役・萬的参予、他同人多数が出席し、楓楽副理事長が席題の選をつとめた。

★8月22日、東京築地本願寺に於て「渡邊蓮夫を偲ぶ会」が開かれ、薫風主幹が選者として出席された。

▼出 版△
■長柳会(河内長野市)は創立拾周年を記念して『自選句集』第六号を発刊。会員27名の各十句ずつを掲載。B6判62頁・序文板尾岳人

▼訂正とお詫び▲
9月号P44(川柳塔)上段14行目七日は↓七夕は▼P85(水煙抄)上段19行目三村八重子↓三村八重子▼P86(澎湖抄)下段1行目コンクール↓アンコール

▼計 報▲
■福岡しげお氏(同人・交野市)は8月13日、病氣のため死去。通夜・告別式には薫風主幹はじめ同人多数が参列した。72歳。

▼人事往来△
■8月6日、水府忌へ天笑

■麻生アト氏(生駒市)

■御芳志御礼△

■8月6日、水府忌へ天笑

10 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 1 時から 声・押す・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	3 日(土)午後 1 時から 骨・落ちる・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
堺川柳会	川柳堺350号・第25回堺まつり 記念誌上川柳大会	月例会句会はありません 本号P124参照 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10日(土・祝)午後6時から すらり・恨む・秋・鞭	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後 1 時から 靴・名人・太い	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後 1 時から 村・数える・そっと・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後 1 時から 高い・流行・マスコミ	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)正 午 から 近所・ラーメン・ささやく・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
岸 和 田 川 柳 会	17日(土)正 午 から 岸和田市民川柳大会	岸和田市立春木市民センター 本号P125参照 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 塔 まつえ	17日(土)午後1時半から ショック・拾う・歌	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
東大阪市 川 柳 同 好 会	18日(日)正 午 から 東大阪市民川柳大会	東大阪市民立社会教育センター3F 本号P125参照 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ねやがわ	18日(日)正 午 から 目玉・癖・辿る・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後 1 時から 通帳・コスト・切る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
はびきの 市 民 川 柳 会	25日(日)午後 1 時から うきうき・ルーキー・「従う」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	26日(月)午後 1 時から 筋・てきばき・拍子	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	28日(水)午後 6 時から 似合い・憎さ・煮干・忍耐	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩 3 分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★第四回川柳塔まつりが十月七日、ホテル・アウィーナ大阪で開かれる。毎月の本社句会と同じ会場なので同人・誌友・他柳社の方も気軽に句会に参加して、川柳塔まつりを盛り上げてくださるようお願いします。

★今年は異常気象が続き、福島県や栃木・茨城県などの集中豪雨・洪水の凄まじさには目を覆いたくなる。その上、和歌山の毒物混入カレー事件をはじめとする各地の毒物混入事件、連鎖犯罪に人間の本性を考えさせられる。一日も早い事件の解決を祈るのみである。と共に、洪水でも毒物混入事件でも、自分自身の努力などではどうにもならない怖さ、歯がゆさを感じる。★それに反して、人間関係

などは或る程度は自分の努力で解決されるのではないだろうか。私事だが、私も最近、姑となった。東京と西宮に離れているが、世にいう嫁姑の関係、上手に付き合ってゆけるだろうかと自問している。

★十年程前に八十五歳で見送るまで、姑と三十二年間同居してきた。三男ではあったが、結婚当初からずっと一緒に暮らした。いろいろな事があったけれども、娘の居ない姑には可愛がってもらったし、いい勉強もさせてもらい感謝している。その経験を生かして、ごく自然体で嫁と付き合えればと思っているのだが……

★座右の句・私の句も皆さんの御協力で、未掲載の百余名の方の句を八月号から十月号までに特集として掲載することが出来た。ありがとございました。(み)

ひとこと

一枚の写真

平成二年秋、川柳塔社と川柳えんびつ社合同勉強会の記念写真を写す時「何処へ入ろうか、ここがええ」と言いながら私の肩に手を掛けられて撮った一枚の写真が御縁で手作りのしおりを下さったり、野の花は野におけ地蔵さん眠るの色紙を頂いたり、作句の上では下五は名詞止めより動詞または形容動詞が良いとアドバイスして下さった、そんな優しい川柳人と数年ぶりにお逢いするのを楽しみに三月六日、川柳塔八五〇号記念大会へ出席、目で探してもお姿はない。そのはず四月号で訃報を知り、八月号・川柳の群像で田中好啓先生のお姿を詳しく知りました。ご冥福をお祈り申し上げます。一枚の写真を撮って下さった方に感謝しています。

(島 ひかる)

ONHK朝の連続テレビ小説「天つらら」を、沢山の柳友も見えておられると思う。私もその一人だが、忙しい時間帯でいつも腰を落ちつけて見られるわけでない。○十月三日で終るので、もう大詰めというところなのだ。が、須藤理彩が扮する主人公公川鳴うらがが、祖父のあとを継いで建築の仕事に携わり、一人前になるまでの話である。

(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（12月号）

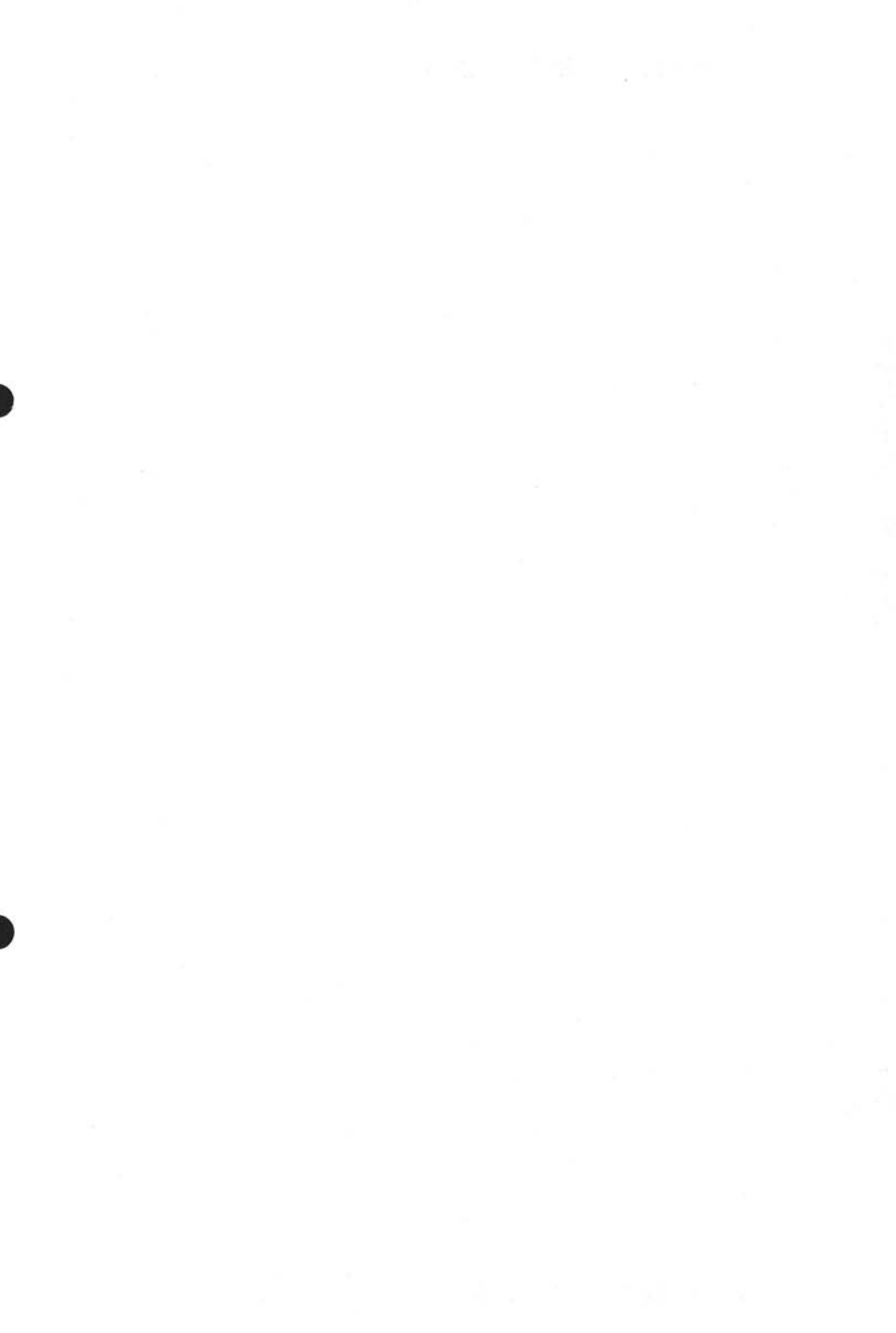
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句)	河 内 天 笑 選
渺湖抄 (3句)	八 木 千 代 選
茴香の花 (3句)	西 出 楓 楽 選
課題吟 (3句)	近 藤 豊 子 選
「学 ぶ」	井 上 富 子 選
「失 う」	西 村 黙 光 選
初歩教室「出 発」(3句)	吐 田 公 一 担 当

1月号
課題吟「雪」「和らぐ」「リボン」
初歩教室「一」

大阪文化祭川柳大会

と き 10月25日(日) 午前11時開場
ところ 大阪市中央公会堂
兼題と選者(各題2句・午後零時半締切)

「続 く」	瀬 川 瑞 紀 選
「舞 う」	西 出 楓 楽 選
「愛」	岩 井 三 窓 選
「時事雑詠」	前 田 咲 二 選
「風」	関 口 きよえ 選
「踏 む」	久 保 田 元 紀 選

席 題 当日2題発表します
会 費 1000円(作品集代含む)
賞 各主催者名で「川柳賞」贈呈
主 催 大阪府・大阪府教育委員会
大阪市・大阪市教育委員会

本社11月句会 7日(土) 予定

兼題 「持ち味」「打 算」「後押し」
「のんき」「短 所」

夜市川柳募集

第5回「海峡」 小 島 蘭 幸 選
ハガキに3句 10月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

定価 六百元(送料84円)

半年分 四 千 円(送料共)

一年分 七千九百円(同)

平成十年 十 月 一 日発行

編集兼 発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ー ト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町1-10-16
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話 (06)六元一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五二二六八番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所への御連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

弓削川柳社創立50周年記念・紋土600号記念・岡山県芸術祭参加

第50回 西日本川柳大会

とき 平成10年11月1日(日) 午前9時開場

ところ 久米南町中央公民館・弓削小学校体育館

第1部(事前投句の部)——無記名清記選

○課題と選者(応募締切終了)

「残す」 仲川たけし・小松原爽介・田口 麦彦

「半分」 山田 良行・梶川雄次郎・小林由多香

「夢」 橘高 薫風・清水 惣七・濱野 奇童

○参加費 1000円(発表誌呈)

第2部(大会当日出句)

○課題と選者(各題2句)

「スタート」 斎藤 大雄 「歩む」 大木 俊秀

「予言」 大野 風柳 「昔」 森中恵美子

「太鼓」 泉 比呂史 「結ぶ」 寺尾 俊平

○出句締切 10時半・欠席投句拝辞・席題なし

○会費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)

前夜祭 10月31日(土) 久米南町中央公民館

17時から 会費 5000円

主催 久米南町・久米南町教育委員会

弓削川柳社(086721812531)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX(06)372-1178